
TRUE ANGEL2 — — EXPRESSION — —

三九

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

TRUE ANGEL 2——EXPRESSION——

【Nコード】

N3833M

【作者名】

三九

【あらすじ】

最高神のいなくなった天の国。
新たな時代を刻み始めたカエルの奥で、何かが目覚めようとしていた。

TRUE ANGEL 続編。

誰も知らない神話の産物が、今再び動きだす。

プロローグ

ざさあつと砂埃を巻き上げ、赤い長髪の青年が地面を転がった。彼は受け身をとって直ぐ様起き上がり、白髪の老人の隣に並ぶ。

「ったく、仕方ねえな。おいじじい。貴様、本当に大丈夫なんだろうな？」

青年は砂と血の混じった唾を吐き出し、目だけで隣に佇む小柄な老人を見た。

青年は身体中に怪我を負っている。
それは老人も同様だった。

二人は今、共通の敵に立ち向かっている。
敵の力は恐ろしく強大で、この世界で最も強い力を持つ二人でも、ぎりぎりの戦況だった。

このままでは、倒すことはできない。
なれど、封印することはできるだろう。

老人は両手で印を組み、鷹揚に頷く。

「当たり前じゃ。お主のような若造とは、年期が違うからの」
白い眉の下から、紫水晶のような瞳が笑う。

青年はフンと鼻を鳴らし、老人の援護をすべく敵と対峙した。

「俺様が協力してやっているんだ。失敗なんかしやがったら貴様を殺すぞ」

青年は不敵に笑い、敵を引き付けるために躍り出た。背後では老人が印を結び、呪文を唱える声が聞こえる。

老人の呪文が完成したとき、敵の身体が二つに別れた。

その身体を、それぞれ天空と地下の牢に封じ込める。

世界を脅かす存在は、激闘の末、二人によって封印された。

これは、まだ人が生まれる以前、神話が生きていた時代に刻まれた逸話。

今や、その戦いを知る者は、たった一人となった。

胎動

あの駆け抜けるような五日間の出来事が、この世界を変えた。それはとてつもない苦難の道に乗り上げたようで、しかしとても素晴らしいことなのだ、彼は思うのだ。

ルシエルは病院のベッドに横になったまま、窓を見上げる。

四角く切り取られた青いスクリーンに、真つ白な綿菓子がか切れでは流れ、また結合し、刻一刻と違う映像を映し出す。

この景色をずっと眺めているのも退屈ではあるが、この世界の最高神であるジュピターに絶対安静を言い渡されてしまったため、先程から寝転がったままなのだ。

先日の事件で過ぎた力を行使したことにより、内側に針を仕込んだギプスで全身を固められたような、重度の筋肉痛に襲われているので、動きたくても動けないような状態ではあるのだが。

病室の外には、事件について取材したいと、神殿広報部のヘルメス及びその部下である天使が押し寄せている。

これもジュピターから面会謝絶を言い渡されており、彼らが傾れ込むようなことはないが、正直、多人数に囲まれてインタビューなど、頼まれてもやりたくない。

こん、と小さな音が病室のドアから聞こえた。

ヘルメスが叩いたのかと思ったが、違う。

ルシエルの返事を聞く前に部屋に入ってきたのは、ミカエルとサディンだった。

「時雨の見送りに行ってきた。無事に身体の方に戻れたようだ」

そう言いながら、車椅子に乗ったサディンを押して、ルシエルのベッドに近寄る。

ふとドアの向こうを見ると、中に入れないヘルメスが羨ましそうにミカエルを見ていた。

ドアは自動で閉まったため、その顔を見たのも一瞬だったが。

ルシエルは横になったまま、ミカエルを見上げて「そうですか」とだけ言った。

ミカエルも自分と同じく大きな力を行使したはずなのだが、一人だけけろりとしている。

ルシエルにはそこだけが疑問であつたが、流石大天使といったところなのだろう。

自分もまだまだ精進が足りない。

車椅子に座っているサディンも、ルシエルと同じように辛そうな様子だ。

どうやら彼の方は、ルシエルと同じく地獄の筋肉痛を味わっているらしい。

「用はそれだけですか？ サディンまで無理に連れてきて」

サディンは今の自分と同じく、動くだけでも辛いはずである。

それをわざわざ連れてきたということは、それなりの理由があるのだろう。

ミカエルは静かに首を振る。

「別々の部屋に置いておくと、いちいち診察に行くのが面倒なのだ

そうだ」

誰がそんなことを……と訊こうとしてやめた。
そんなことを言うのは、この病院の院長であるアスクレピオスだ
けだ。

そんな理由で無理矢理部屋から追い出されたサディンが、哀れで
ならない。

「なんて横暴な……」

引きつった苦笑を浮かべて、ルシエルは溜め息と共に呟いた。

そして再び、窓の外に目を向ける。

相変わらず廊下では、ヘルメスが取材させると喚んでいるが、ド
アに遮られているため、ただの囁きにしか聞こえない。

ミカエルもサディンも、そのまましばらく黙っていた。

たつぷり数分は黙ったままだったろう。

窓の外を白い鳥が飛んでいくのを目にして、ミカエルはようやく
口を開いた。

「ルシファア、時雨から伝言を預かっている」

「……何と？」

時雨からの伝言と聞いて、ルシエルは顔ごとミカエルの方を向く。
それだけでも首や肩に痛みが走るが、そんなことがどうでもよく
なるくらい、その話に興味があった。

それはサディンも同じだろう。顔を上げてミカエルを見ている。
ミカエルは、一拍間を置いてから、時雨に託された言葉を口にす

る。

「世界一の長寿になって自慢してやるから、それまで待っているだそうだ」

一言一句漏らさずに聞いていようとミカエルを凝視していたルシエルは、小さく笑って目を閉じた。

「彼らしいですね」

嵐のように通り過ぎた五日間が、頭の中に蘇ってくる。

初対面でいきなり変態呼ばわりされ、道中ではポチタマ扱いされ、命の危機に瀕したり、知り合いに殴られたり……

……………思い返すと、ろくなことがない。

ルシエルはちょっとだけ、人生ってなんだろう、と遠い目をして考えた。

「どうしたルシファー？」

それに気付いたのか、ミカエルがルシエルの顔を覗き込む。

ルシエルはなんでもないと行って、ミカエルから目を逸らした。

「そうか。ゆっくり休め」

ミカエルはそれだけ言うと、サディンを置いて病室から出ていった。

残されたサディンは、俯いたまま車椅子に座っている。

心なしか、顔色が悪い。

サデインの体調が良くないのかと、ルシエルは眉をひそめた。

「サデイン？ 大丈夫ですか？」

ルシエルの問いにも、サデインは答えない。

ただ悲しげに俯き、胸の辺りを押さえている。

「サデイン？」

普段からは想像できない程の落ち込み様に、ルシエルは身体が痛むのも忘れて起き上がった。

サデインは目に涙まで浮かべている。

そんな顔を見るのは初めてで、ルシエルは目を丸くした。

「どっ、どうしたんです！？ どこか痛むんですか？」

「……………五日」

サデインは俯いたままぼつりと呟いた。

「はい？」

何のことかさっぱり解らず、ルシエルは聞き返す。

サデインは眉根を寄せて悲しげに口を開いた。

「まともに動けるようになるまで、五日はかかると言われた……………」

「はあ……………」

それがどうかしたのだろうか。

ルシエルは、急に起き上がったことでずきずきと痛む身体に顔をしかめた。

まあ、これがあと五日も続くと思うと憂鬱だが、泣くほどではないと思う。

いったい何をそんなに思い詰めているのかと、ルシエルはサディンを注視した。

サディンは徐に体内からカストルを呼び出した。

サディンの魂の中にいる、もう一人の魂。

サディンの祖父が創った人形が、いつしか魂を宿し、サディンと共生するようになったのだ。

カストルは先日的事件で破損しており、左腕の肘から先がなくなっている。

その痛々しい姿を見て、サディンは思わず目から涙を溢れさせた。

「あと五日もカストルを修理できないなんて……！」

ついに、わっと泣き出しカストルに抱きついた。

カストルは残った手で励ますように、サディンの頭を撫でている。ルシエルはがっくりと肩を落とし、再びベッドに横になった。

「何かと思ったら、そんなことですか……」

ルシエルが思わず呟いた言葉を聞いて、サディンは彼を睨み付けた。

「そんなこととは何だ！」

そのあまりの迫力に、ルシエルは思わずベッドから落ちそうになる。

サディンと馴染みのない者は驚くかもしれないが、サディンはカストルのこととなると人格が変わる。

とにかく、この人形の悪口は許さないのだ。

幼い頃から一緒だったサディンにとって、人形と言えどカストルは兄弟同然。

たとえ友人のルシエルの言葉でも、許してはおけない。

「カストルは俺の兄弟だぞ。今度そんな口をきいたら人相が変わる程殴るからな！」

「あ、いや、すみません……」

ルシエルは素直に謝った。

今回は気が弛んでうっかり口を滑らせたただけだが、過去に充分痛い目を見ている。

あときは酷かった。一週間近くシカトされまくったうえ、少しでも近寄ろうものなら凶器が飛んできた。

ルシエルは当時を思い出し、引きつった顔で全身を震わせた。

あんなのはもう懲り懲りだ。

サディンはカストルに手伝ってもらってベッドによじ登る。

二人並んで寝転がって、窓の外を眺めた。

ベッド脇に座ったカストルは、ミカエルが置いていった荷物を開き、冷蔵庫にプリンを仕舞っている。

ちなみに、このプリンは最高神からお見舞いの品としていただいたもので、こだわり卵と産直のミルクで作られた逸品だ。

「何と言つか……」

徐にルシエルが口を開く。

窓から差し込む日の光が、部屋の中を明るく暖かく照らす。
耳を澄ませば、小鳥の囀りが聞こえた。

「平和ですねえ……」

「……そうだな」

穏やかに、緩やかに流れていく時間。

退院したあかつきには、事情聴取やら広報部からの取材やらで忙しくなるだろう。

そのことはなるべく考えないようにしながら、二人はぼんやりと窓の外を眺めていた。

「あつ、おっはよう」

間延びした声と共に、サディンは背後から抱きつかれた。

あまり高身長とは言えない自分よりも、更に低い位置にある相手の顔を振り向いて見下ろし、サディンは不機嫌そうに眉を寄せた。

「往来で抱きつくな。恥ずかしい奴……」

今し方サディンに抱きついた少年は、にいつと笑って益々きつくサディンを抱き締める。

「いいじゃん。こんなの挨拶のハグだもん。サツちゃんは照れ屋さんだにゃ」

少年はサディンとは対照的に、にこにこ笑みを絶やさず白い翼を広げる。

彼の名はラファエル。れっきとした天使である。

サディンとは同期で生れ故郷も近かったこともあり、ラファエルが一方的にサディンを慕っているのだ。

サディンも万更ではない様子で、子供のように戯れついてくるラファエルに、表面上は嫌そうな顔をしながらも付き合っていてやる。

サディンたちが退院してからというものの、ラファエルは暇を見つけてはサディンの許を訪れるようになった。

ずっとサディンのことを心配していたため、そのような行動をとっているのだろう。

それを解っているからこそ、サディンもラファエルが来ると仕事の手を休め、ラファエルのお喋りに付き合っているのだ。

「大体、往来つたって、ここ誰も来ないじゃん。ねーねー、サツちゃん、一緒におやつ食べよ？」

「……少しだけだぞ」

苦笑いしながらラファエルの手を解くと、サディンはウエストポーチから菓子を取り出した。

このところほぼ毎日のようにラファエルが遊びに来るため、こうして彼のための菓子を用意してある。

今日のおやつは、ピーナッツをチョコレートでコーティングしたもので、蓋についている当たりくじを集めると、お菓子の詰め合わ

せが貰えるというものだ。

ラファエルが集めていると聞いて、これを選んだ。
案の定、ラファエルは目を輝かせて喜んだ。

「ああーっ、サツちゃん、それチョコピーじゃん！
ねねね、俺開けていい？ いい？」

「はいはい」

笑いながら手渡した箱を、ラファエルが開ける。
残念ながら、くじはハズレだったようだ。

ラファエルはがっくりと肩を落とし、中からチョコを一つ取り出して口に放った。

「ああゝ、ハズレだあゝ……」

「気を落とすな。また買えばいいだろ？」

「えっ、サツちゃん買ってくれんの！？」

「自分で買え」

べしん

サディンに軽く頭を叩かれ、飛び付こうとしていたラファエルは
その場で転んでぼてくり倒れた。

「痛あゝいサツちゃん酷あゝい」

下から見上げるラファエルを、サディンはくすくす笑いながら見

下ろす。

あんまり楽しそうに笑うものだから、ラファエルも嬉しそうに笑った。

天の国の門前で、二人は声を上げて笑う。

一方その頃、神の住まう社では、他の天使たちが忙しく働いていた。

天使たちを束ねる大天使とて例外ではない。

寧ろ、彼はここで最も忙しい人物だろう。

大天使ミカエルは、自分のために与えられた執務室で、大量の書類の前に突っ伏していた。

先日の事件で少し神殿を留守にしていた間に、書類の山が山脈になっていたのだ。

サデインやルシエルたちが休んでいる間も、ミカエルは一人黙々とこの書類山脈と格闘していた。

最初は終わる気がしなかったが、やってみればなんとかなるもので、部屋を埋め尽くしていた山脈も、今では小高い山一つを残すだけになった。

ほぼ毎日徹夜で働いていたため、疲労も限界に達していたのだらう。

ほんの数分前に、ミカエルはペンを握り締めたまま、机に頭を乗せて動かなくなった。

魂が抜けたような、とは、正にこの状態を表すのであろうと、ルシエルは思った。

ミカエルに呼び出されて来たのはいいが、肝心のミカエルが書類にKOされていたのでは話にならない。

少々酷かと思ったが、ルシエルはミカエルを容赦なく揺り起こした。

「ミカエル、起きてください。朝ですよ。ご飯食べちゃいますよー」

激しく揺り動かされて、ミカエルは目を開いた。
別にご飯に反応した訳ではない。決して。

「……私はどれ位眠っていた？」

「僕が来たときにはもう死んでましたけど、そんなに時間は経ってないと思いますよ？」

軽い目眩を覚えながらも、ミカエルはよろよと顔を上げる。
目の下に濃い隈をこさえて、些かやつれたように見えるのは、気のせいではないだろう。

「ちょっとミカエル……あなた、ちゃんと休んでいます？」

「睡眠はとった」

「今のは睡眠じゃなくて、気を失ってたって言うんですよ」

呆れたように言うルシエルを見上げ、ミカエルは袖の跡が残る頬をこすった。

気を抜くとまた意識を飛ばしてしまいそうで、ミカエルは朝煎れておいた濃い目のコーヒーを口に含む。
それはすっかり冷めてしまっていた。

「で、いったい何の用ですか？」

……まさかこの仕事を手伝わせるために呼んだとか？」

未だ呆れた半眼のままで、ルシエルは机を挟んで正面に回る。

ミカエルはコーヒーのカップを置いて、引き出しから薄い書類の束を取り出した。

「それは名案だな。手伝ってくれるなら有難い」

「その書類は？」

「カエルス入国門番人単独就業撤廃、複数人による交代制導入の企画案だ。いつまでも、サダルメリク一人に門番を任せる訳にはいくまい」

言いながら手渡された書類を捲り、ルシエルは目を瞬かせた。

発案者の名はミカエルになっている。

この仕事を片付けながら、こんなものを考えていたなんて……

ルシエルも事件の後始末のために忙しかったとはいえ、そこまで頭が回らなかった。

それはサディンも同じである。

門番は一人というのが当たり前になりすぎていて、思い付きもしなかった。

「後は上からの通告待ちだ。早ければ来週から導入が決定する」

どうやらルシエルたちが知らない間に、ミカエルがすべて手続きを終わらせていたらしい。

改めて尊敬の念を覚えずにいられない。

「あなたという人は……」

「サダルメリクにもそれを届けてくれないか。それと、引き継ぎのためのマニュアルを作っておくように伝えてほしい」

こんな仕事をわざわざルシエルに頼むのも、ミカエルなりの思いやりなのだろう。

ルシエルもつい先日まで、事件の報告書やら始末書やらに追われていたのだ。

これはミカエルがくれた、仕事という名目の休憩なのだ。

「他人のことばかりでなく、自分のことも心配しないと、本当に過労死してしまいますよ？」

天使が過労で死ぬなど、笑い話にもならない。

ルシエルの忠告は受け取らず、ミカエルは再び仕事を続けた。

結局ミカエルが過労で倒れたのは、この二日後のことである。

澄んだ空気を、少し肌寒い夜風が運んでくる。

季節は秋に変わり、故郷の山々は紅葉で赤く染まっている頃だろう。

早いところでは、もう雪が降っているのではないだろうか。
遙か昔に旅立った郷里に思いを馳せ、わずかに口許が綻ぶ。
そんなサデインの頭上で、星が瞬いた。

ここは天空に創られた、魂が集う国力エルス。

言うなれば天国である。

雲のような地面の上に、神が創った箱庭がある。

人々の魂は、死後そこに集められるのだ。

魂は天使によって管理され、新たな輪廻の輪に組み込まれる。

ここはもちろん死後の国であり、人々が生きている世界とは、紙一枚隔てた異なる次元に存在している。

そのため、どんなに最新鋭の衛星でも、このカエルスをカメラに収めることはできない。

かくて魂の楽園たる天国は、生きている人間たちに知られることなく、長く平和の刻を保っていた。

しかし、そんなカエルスを脅かすものもある。

地獄の怪物たちである。

奴らは時折カエル스에迷い込み、そこに住まう魂を襲う。

そのため、カエルスは国を囲むように高い壁が造られており、中に入るには唯一の門を通らねばならない。

しかも、その門を守るために、腕利きの門番がいるのだ。

サダルメリク——サディンも、その門番の一人だ。

今まではずっと、この少年が一人で門を守り続けていたのだが、最近になり新しい天使が門番として赴任してきた。

今ではサディンも、決まった日に休みをとって、門の内側でくつろいでいる。

ずっと門の外から眺めていた星空は、遥か遠くまで、果てしなく続いていた。

しかし今、家の屋根に登って見上げる星空は、カエルスを守る門と壁に切り取られ、そこから先を見ることはできない。

それでも壁の反対側はずっと遠いので、そちらの空は切り取られることなく見渡せる。

壁に遮られた空を狭いと感じるか、広いと感じるか。
どちらかと問われれば狭いと答えるだろう。

しかし、その狭さは守られているが故であり、寧ろ安心感を覚える。

サディンはちびちびと炭酸水を飲みながら、壁の向こうから顔を出した月を見上げた。

雲一つない空。今夜は絶好の月見日和だ。

あの月を毎晩輝かせるのは、月の女神アルテミスの役目である。
美しく金色に輝いているところを見ると、今日は機嫌が良いらしい。

兄と喧嘩したときなど、赤い月が昇ったりするので人間たちも大騒ぎである。

月見仲間が家に集まってくるのを待ちながら、サディンは一人、
お手製の団子を頬張った。

料理の本を見ながら初めて作ったのだが、まあまあ美味しくできた
と思う。

先日、カエルスの最高神であるゼウスが、カエルスから姿を消す
という事件が起きた。

事件の真相は、天使たちを使い、力づくで世界を統一させようとしていたゼウスを、サディンを含む数名の天使と一人の人間によって
食い止めたというものだ。

これはゼウスの跡を継ぎ最高神となった、ゼウスの娘であるジュ
ピターが、カエルス全土に公表したため、衆知の事実となっている。

急に指導者が変わり、神殿内部はかなり混乱しているようだが、
ここ数日は随分と落ち着いてきた。

神、及び天使たちの職務見直しや今後の方針なども、順次決定さ

れている。

門番の単独就業も改変され、今では交代制になっている。
そのため、サディンの休日には、新しい家に昔馴染みの友人が訪れるようになった。

友人たちが来るのを待ちながら、サディンは月見団子をもう一つ頬張る。

ぴんぽーん

そのとき、玄関のチャイムが鳴った。

次いで、サディンのよく知った声が聞こえてくる。

「こんばんは。おつまみ持ってきましたよ」

「サツちゃん、いないの〜？」

サディンは屋根の上から身を乗り出して、玄関前に立っている二人を見下ろす。

「こっちだ。上がってこい」

頭上から降ってきた声に気付いて、下の二人は天を仰ぐ。

屋根の縁に手をつき、二人を見下ろすサディンの姿を発見すると、それぞれ手を振って答えた。

サディンの声に従って、二人の天使は羽を広げ地を蹴る。

ゆっくりと屋根の上に降り立ち、持参したスーパールの袋を置いた。中には酒とつまみが入っていた。転がらないように、屋根との間に雑誌を挟んでストッパーにする。

「いやあ、絶好の月見日和ですねえ」

先程のサデインの考えと同じことを言うのは、ルシエル。

黒髪を肩まで伸ばし、重そうな黒縁の眼鏡をかけた、背の高い天使だ。

ストレートの髪の毛、左側だけがやたらと跳ねている。

かつては破壊の大天使ルシファーとして名を馳せたのだが、今から百年程前に、大天使の資格は剥奪されてしまっている。

だがその話はまた別の機会にしよう。

「おおつ、月見団子！ うーまそーう」

笑いながらサデインの隣に座ったのは、サデインと同期で天使になったラファエルだ。

象牙色の髪があらゆる方向に跳ねていて、青い瞳は落ち着きなく周囲を見回している。

彼は自ら、サデインの親友だと豪語している。

だが、そう言っているのは本人だけで、周囲の者は餌に釣られた犬のようだと言っていたが。

事実、ラファエルはサデインに会う度に食べ物をせがんでいる。だって美味しいんだもん。の一言で、何度サデインの飯をたかったことか。

彼は日々、このおちゃらけた態度で周囲を和ませたり、苛立たせたりしているのだ。

が、残念ながら苛立ちの方が比率は大きい。

サデインとルシエルとラファエル、三人は各々飲み物を手に取り、美しい月に向けて乾杯する。

夜中の宴会は、始まったばかりだ。

今より、五ヶ月前に遡る。

暗闇の中で、何かが動いた。

それはゆっくりと手を握り、そして再び開く。まるで動き方を忘れてしまったかのように、ぎこちない動作だった。

動き方を思い出そうとしているようでもあり、動こうとしているのを無理矢理押さえ込まれているようでもある。

しかしそれは、動きだけでなく意識もはつきりしていないのか、しばらくして眠り始めた。

その短い活動に気付いた者は、誰もいなかった。

「ちよつとお、ラファエル出てきなさい」

翌朝、チャイムも鳴らさずに、サディンの家の玄関の扉が開いた。そこに立っていたのは、腰に手を当てて眉を吊り上げ、怒ったように家の中を見回す女性だ。

金の髪を二つに結った、少々幼い顔立ちの天使。

実際の年齢はもう少し上なのだろうが、おさげと童顔のせいで子供っぽく見える。

サディンたちよりも後から天使になった女性で、名をレミエルという。

「あれ〜？ レミレミじゃん。おっはー」

寝癖も直さずに、リビングからひよっこり顔を出したラファエルが、にへらと笑ってひらひら手を振る。

レミエルはそんなラファエルを見て、益々眉を吊り上げた。断りもなくずかずかと家の中に入ってくる。

「あんだねえ、今日はあたしと組んで仕事でしょ！ 今何時だと思ってんの！」

怒りの表情でラファエルの胸ぐら引つ掴み、鋭い眼光で睨み付ける。

ラファエルはきよろきよると部屋を見回し、時計を発見して時間を確認した。

「今くじら〜」

「お・ば・か！ 完璧遅刻じゃないの！」

レミエルはへらへら笑うラファエルの頭に拳骨を落とす。

騒ぎを聞き付けて、ルシエルが顔を出した。

「どうしました？」

ラファエルとは違い、きっちり身支度も整えて現れたルシエルに目を遣り、レミエルはさっと身構えた。

「黙れ変態。あんたまで何してんのよ。仕事は……
って、寄るな触るな近付くな！」

レミエルは首を振って、激しくルシエルを拒絶する。

この二人、どうも初めて会ったときから、馬が合わないのだ。
ルシエルの方はあまり気にしていないようなのだが、レミエルは
彼を毛嫌いしている。

恐らく、ルシエルの性格が悪いことが、原因の一つだろう。

「失礼ですね……昨日は中秋の名月でしたから、お月見してたんですよ。」

ラファエルも、今日は休みになったのだと言ってたんですが」

「うん。休みになるといいな〜って思ってた」

頭に大きなたんこぶを付けたラファエルが、へらっと笑って舌を出す。

その反省も何もない態度に、レミエルは再度ラファエルの頭を殴った。

「おばか！ 早く行くわよ！ あんたのせいで怒られるなんて、まっぴらなんだからね！」

ずるずるとラファエルを引きずって家を出る。

ラファエルは引きずられながら、ルシエルに手を振った。

「いってきまーす」

「いってらっしゃい」

今より、四ヶ月前に遡る。

暗闇の中でそれは、ゆつくりと両手を握り締めた。

一月前よりは流暢に指を動かしている。

それでも、まだぎこちない。

腕を持ち上げてみた。

なかなか思うように上がらない。

足を上げてみても、同じようなものだった。

そのうち、眠気に襲われて、それは再び眠りについた。

「おはようございます。起きてますか？」

ルシエルは寢室のドアを開けて、中を覗き込んだ。

とうに朝日は窓際から撤退し、斜めに差し込む光は薄いカーテンに阻まれ、部屋の中は朝より薄暗い。

丸くなった毛布の中から、小さな呻き声が聞こえてきた。

ベッドの上で、サディンが俯せに寝ている。

薄く目を開くが、顔色が悪い。

「大声出すな……気持ち悪い……」

青い顔で呟いて、頭を押さえる。

どうやら二日酔いのようだ。

実はサディンはほとんど酒が飲めない。

にも拘らず、ルシエルとラファエルが、サディンのジュースにこっそり酒を混入したのだ。

ほんの悪戯心というやつである。

すぐに酔いが回ったサディンは、あっさり昏倒してしまった。

悪戯好きなルシエルとラファエルが、顔に落書きしたり他にも色々悪戯したようなのだが……本人の名誉のために黙っておこう。

実際、サディンの顔には、昨夜の悪戯の名残で、額や頬にうつすら落書きの跡が残っている。

油性ペンを使わなかったのは、なけなしの良心というやつである。

今日が休みの日で本当に良かったと、サディンは心の中で呟いた。こんな状態では、門番の仕事などではいけない。

寝返りをうつただけで、ガンガンと巨大なドラを打ち鳴らす頭を抱え、サディンはぐったりと伸びている。

ルシエルは、流石にやりすぎたか、と微妙に反省の色を滲ませ、頭痛薬を取りに行った。

早々に酔い潰れたサディンに、面白がってあんなことやこんなことをした張本人である。

多少は負い目引け目を感じていたりするのだ。たぶん。

ちなみに、サディンはどう見ても未成年だが、天使としては二百年以上活動している古株である。

見た目と実働年数のギャップは、天使たちにはよくあることだ。

天使は亡くなった人間の魂で、自我の強い者だけがなれる、天国のエリート職なのだ。

外見年齢は、享年に由来する。

そのため、見た目が老人な天使もいるにはいる。

だが、それでは活動に支障が出るという理由で、少し若い年齢に設定して、器となる肉体を作成することが多い。

だから、見た目若いのに爺言葉な天使もいたりする。

断っておくが、サディンもルシエルもラファエルも、外見年齢そのままの天使だ。

ルシエルの方が、サディンたちより実働年数は下だが。

ルシエルが持ってきた薬を飲んで、サディンは再び横になる。しばらくは動けそうにない。

この殺人的な頭痛が治まったら、とりあえずルシエルを一発殴ってやろう。

それまでは、回復に集中せねば。

重い溜め息を吐いて、サディンは頭から布団を被った。

今より、三ヶ月前に遡る。

それは少しずつ手足を動かすことに成功していた。

今では肩の上まで腕を上げることができるし、その場で足踏みをすることもできる。

しかし、何故だか左半身が妙に重く、そちらだけ思うように動かせないのだ。

それは幾分はつきりしてきた思考で、自分が置かれている状況を

理解しようと、周囲を見回した。
確実に、眠り続ける時間は少なくなっていた。

昼頃になれば頭痛も吐き気も随分楽になってきて、サディンは昼食を作るために寝室から出てきた。

ルシエルはとりあえず一発殴ってから、家を追い出した。
あんなのが家にいたら、休みたくても休めない。

買い置きしてあった卵とハムで、ハムエッグを作る。

一人暮らしは長いのだ。この程度の料理など、朝飯前である。
いや、今は昼飯前だが。

出来上がった昼食を一人で食べながら、午後の予定を考える。
そろそろ切れそうな食材があるから、近所のスーパーに行き買いに行こうか。

そういえば、今朝の新聞にチラシが入っていたはずだ。
安売りしてるものをチェックしておかないと。

やたら主婦じみているが、それは仕方ない。

何しろ、生前からあまり裕福な家庭ではなかったため、節約癖がついているのだ。

いくら天使の収入が良いといっても、それは譲れない。

カエルの物品は、すべてにおいて割高なのだ。

天使にならず、輪廻の輪に戻される魂たちには、収入源がない。
そのため、彼らにはすべて無料で提供する代わりに、天使や神に

は多額の税が掛けられている。

消費税八十パーセントはほとんど詐欺に近いが、それがカエルス
のシステムなのだから仕方ない。

そのため、高収入ではあるが、支出もハンパではない。

人民に優しく政治家に厳しいのが、カエルスという国なのだ。

サデインは、リビングに無造作に置いてあった新聞を取り、挿ん
である広告を抜き取る。

スーパー激安で、サラダ油と洗剤が半額セール中。

夕方からは食品コーナーでタイムセール。

それを見た瞬間に、午後の予定は決まった。

今より、二ヶ月前に遡る。

最初の頃に比べれば、随分楽に身体を動かせるようになってきた。
それは何も無い空間で這いずり回る。

相変わらず左半身が麻痺したように動かないので、歩いて移動す
るのは困難なのだ。

暗闇が支配するその空間で、それは出口を探しているように、一
心不乱に這いずっていた。

だが、どこまで行っても空間の終わりは見えず、壁に触ることも
なかった。

出口を、光を求めて、それはただひたすらに這っていく。

夕方のスーパーは賑わっていた。

転生待ちの魂や、買い物に来た天使たちが、かごを持って店内を歩いている。

サディンはチェックを入れた広告を片手に、なるべく安いものをかごに入れていく。

パンにバター、肉と魚、野菜も選んで、ついでに半額になっている商品も手に取った。

そのままレジに行く途中で、嫌な顔を発見する。

「おやあ、サディンじゃないですか。偶然ですねえ」

買い物かごをぶら下げた、ルシエルだった。

奴のかごの中には、酒とおつましか入っていない。

いったい、何を食べて生活しているのだろうと、少々疑問に思う。

「今日の夕食は、何ですか？」

「秋刀魚の塩焼き……うちに来る気か？」

うつかり答えてから、サディンはジト目でルシエルを見上げる。

ルシエルはこうやって顔を合わせる度に、サディンの飯をたかりに行くのだ。

ラファエルも含めて、いい加減、食費を請求してやろつかと本気で考えている。

どうして自分の周りには、飯目当ての奴しかいないのだろう。

「嫌ですねえ、当たり前じゃありませんか。
いいですね、秋刀魚。今が旬ですし」

ルシエルは躊躇もせずに頷いた。

サディンは深い溜め息を吐き、ルシエルの前を通り過ぎてレジに向かう。

その後ろから、ルシエルがついてきた。

基本的に、カエルスではどの店もセルフレジだ。

何故かと問われれば、勿論人材不足が為である。

こういった店舗の経営も天使の仕事なのだが、レジにまで人員を回せる程、天使の数は多くない。

サディンはカードで支払いを済ませ、買い物かごを持った。

ルシエルも支払いを済ませて店から出てくる。

やはり、ついてくる気だ。

まあ、こんなときのために、いつも多めに買い込んでくるので問題はない。

自分の甘さにほとほと呆れながら、それも楽しいと思っている訳で、サディンは何も言わずに帰途についた。

今より、一ヶ月前に遡る。

それは終わりのない闇の空間を彷徨い歩いていた。
相変わらず左半身はまともに動かなかったが、どうにか立って歩

けるようにはなった。

片足を引きずりながら歩いていく。

それでも、這うよりは余程効率が良い。

いつまでここで彷徨い続けなければならぬのだろう。

それは初めて、自分の境遇に疑問を持った。

秋刀魚の塩焼きに椎茸を添えて、真っ白なライスを椀に盛り付ける。

スープカップに注がれているのは、トーフのミソスープだ。

所謂、和食というものである。

このカエルスには、様々な国から魂が集まる。当然、食文化も様々だ。

中でも最近人気なのが、小さな島国の食文化で、これはいくら食べても太らないと言われている。

最初は半信半疑だったのだが、食べてみるとなかなかヘルシーで美味しい。料理本を買ってまで作った甲斐はあった。

サデインはテーブルの真ん中に、でんと漬物が乗った皿を置く。

この本には又カに漬けた野菜が美味しいと書かれていたのだが、その独特の香りが苦手なので、今日のものはただの浅漬けだ。

キャベツとニンジンとキュウリ、それとジャパニーズラディッシュと呼ばれる、太くて長いカブを切ったものが山盛りになっている。

この和食を食べるときには、ナイフとフォークではなく、ハシと呼ばれる細長い棒を使うのだが、これがなかなか難しい。

最初はこの二本の棒を使いこなせなくて、ポロポロ零していたのだが、今では普通に使うことができる。

「……やあ、サディンはこと料理になると、本当になんでもありですねぇ」

ぶるぶるとハシを持ち、慣れない手つきで秋刀魚をつつくのはルシエルだ。

ルシエルがハシに慣れていないのを知った上で、わざとハシを出したのだ。

ナイフとフォークなど、ルシエルの目を盗んで隠してある。

これくらいの意趣返しはしても良いだろう。

サディンは秋刀魚のワタを除けて、器用に身だけ食べている。

「どうした、食べないのか？」

未だハシと格闘しているルシエルに、勝ち誇ったような笑みを向ける。

ルシエルはむっと押し黙り、徐にハシを置いた。

そしてにつこり笑って口を開ける。

「……何だ？」

「食べさせてください」

ほら、あーん。と自ら言って、ルシエルはテーブルを叩き催促する。

サディンは呆れたように見ていたが、やがて可笑しそうに笑った。

「仕方ないな」

そう言つてルシエルの皿にハシを伸ばす。

秋刀魚をまるごと一匹ハシで持ち上げ、その頭をルシエルの口元に運んだ。

「ほれ。あーんしろ」

「……………」

虚ろな目の秋刀魚が間近に迫り、ルシエルははらはら落涙する。

普段悪戯ばかりしているから、こういう場面で仕返しされるのだ。一種の自業自得である。

ルシエルは落胆した表情で、

「やっぱり自分で食べます」とハシを持った。

今より、三週間前に遡る。

それは自分の置かれた状況を、冷静に分析しようとした。

まず、この闇の空間がいったい何なのか、何処なのか。

何故自分がここにいるのか。

思い出そうとして、立ち止まった。

歩きながらでは考えられないのだ。

それはまだ、同時に二つ以上のことができない。

なかなか思い出せずに、むうと唸った。

そこで初めて、それは自分の声を聞いた。
自分は声が出せるのだということに気付いたそれは、意味のない
音の羅列を叫んだ。

かなり時間をかけて和食を攻略したルシエルは、ぐったりとテ
ブルに突っ伏した。
これはいったい何の苦行かと、本気でサディンを問い詰めたくな
る。

当のサディンは、洗い物を済ませて本を読んでいる。例の料理本
だ。

しかも、今度は中華。
サディンはもともと西洋に住んでいたのだが、どうやら他国の食
文化に興味があるようだ。
ひよっとしたら、ただ単にハシの使えないルシエルに、嫌がらせ
をしたいただけなのかもしれないが。

ルシエルは溜め息を吐いて、今日買ってきた缶ビールを開け、お
つまみのピーナッツを取り出した。
麦の喉越しが、疲れた身体に染み渡る。
この一杯のために、第二の人生を生きているようなものだ。

「よく飲めるな、そんな苦いもの」

ちゃっかりピーナッツをつまみ食いしながら、サディンは星の口

ゴをあしらったビール缶に目を向ける。

生前、アルコールの類を口にしたことがないサディンにとって、酒というものは理解不能の物質だ。

ルシエルは一気に飲み干した缶を置き、二本目を開けている。

「サディンつてば、まだ子供ですねえ。この美味しさが解らないなんて」

ニヤニヤ笑いながら言われると、かなりムツとくるが、ここで言い返してはならない。

売り言葉に買い言葉で、何度ルシエルの奸計に乗せられたことがサディンはルシエルから目を逸らし、再び料理本を眺めることにした。

今より、二週間前に遡る。

それは、色々な声を出しているうちに、言葉というものを思い出した。

音の羅列を組み合わせて、意味のある音にするのだ。

そうして言葉を思い出してからというもの、今まで思い出せなかった様々な記憶が蘇ってきた。

頭の中で言葉を並べて記憶を整理することで、よりスムーズに思考が働くようになったのだ。

そして、自分が置かれている状況を理解すると、それは狂ったように雄叫びを上げた。

翌朝、目覚まし時計の音に起こされ、サディンは目を覚ました。
ルシエルの姿はどこにもない。

明日は仕事で朝早いから、と言って夜中に追い出したのだ。
一人で静かにぐっすり眠ったお陰で、寝覚めはともスツキリしている。

トーストにジャムを塗っただけの簡単な朝食をとり、手早く身支度を整えた。

門番の制服に着替え、暇潰し用の本だけ持って家を出る。

門番というのは、忙しいときはとことん忙しいのだが、何もなければとことん何もないという、やたら極端な職場なのだ。

以前など、丸三日何もない日が続いたと思ったら、いきなり四日連続で地獄の獣が襲ってきたこともあった。

忙しい分には構わないのだが、やることがないと暇で仕方ない。
よって、暇潰しアイテムは、門番には必須なのだ。

八時少し前に、サディンは門の前に着いた。

そこには、新しく門番となった天使が、眠そうな顔で待っていた。
どうやら、昨日はとことん暇だったようだ。

お疲れ様、と軽く挨拶を交わして、サディンは門の脇に座り本を開く。

空は一面の快晴。今日もまた暇を持て余しそうだな、と心の中で呟いた。

今より、一週間前に遡る。

言葉を口にできるようになり、それは新たなことを思い出した。自分だけの、特別な能力のことだ。

そう、自分はこの能力があるために、このような空間に閉じ込められたのだ。

許せない。理不尽に自分を閉じ込めた者どもは、許さない。そう考えて、初めて自分の中に様々な感情があることを思い出した。

これが心というものだと、それは思い出すことができた。自分の能力は、言葉と心が組み合わせあって、初めて真価を発揮する。

それは、今までよりも効率的に、この空間から脱出する方法を考え始めた。

本を閉じて、邪魔にならないように端に置く。

いつの間にか辺りに霧が立ちこめてきて、血生臭い気配が漂ってくる。

どうやら、今日は真面目にお仕事しなければならないらしい。勘が外れた。

サディンはすぐさま立ち上がり、気配のする方向に走りだす。

気配がするのは、比較的門の近くからだ。

これくらいならば、多少門から離れても大丈夫。すぐに戻ってこれる。

サディンは袖の中に仕込んである、長くて太い針を取り出した。

サディンが使う飛び道具である。命中率は百発百中。

敵は霧の中に姿を隠しているが、サディンにはどこにいるのかが手に取るように解るのだ。

見えない敵に向かって針を投げれば、小鬼の短い悲鳴と共に、敵の気配が消えていく。

この雲のような地面が、死骸を取り込み分解してくれるので、いつもそのまま放置している。

サディンは二匹目も始末するために、再び針を構えた。

今より、数分前に遡る。

それは己をここに閉じ込めた者に復讐を果たすために、この空間から抜け出そうとしていた。

そう。すべてを思い出したのだ。

奴らに復讐するため、自分の能力を使って、ここから出る。

そのために、もっとも相応しい言葉を選ぶ。

ゆっくりと息を吸って、口を開いた。

「ここから、出せ！」

一面闇ばかりだった空間に、わずかな光が差し込んだ。

あれは、外の光。

もつと、もつと大きな出口を作らなければ。

それは無理矢理にでも出口を広げるため、更に力を込めた言葉を重ねた。

どくんっ

と、世界が脈打つように震えた。

まるで地震でも起きたかのように、カエルス全体が揺れる。

だが、遙か天空に存在するカエルスに、地震など起こるはずがない。

揺れは徐々に小さくなって消えた。

地面に倒れたサデインは、驚きを顔に貼りつけたまま立ち上がる。門の内側で起こった異変に、サデインはまだ気付いていなかった。

カエルスが揺れたそのとき、ルシエルは神殿に来ていた。

報告書をミカエルに提出するためである。

期限が今日までだったので、慌てて書きあげて持ってきたのだ。

ミカエルは、カエルスに唯一の大天使であり、神殿の中に住んでいる。

執務室も神殿の中にあり、毎日そこで送られてくる報告書に目を通すのだ。

朝から晩まで書類と格闘し、先日などは過労で倒れたと聞いたが、

翌日には復帰していたという。

ルシエルが彼の執務室を訪れたときも、ミカエルは書類の山に囲まれてペンを走らせていた。

「おはようございます。先日の轢き逃げ事件の報告書、お持ちしましたよ」

ルシエルにそう声を掛けられて、ミカエルは初めて彼の存在に気付いた。

ペンの先で、机に乗った書類の山を指し示す。

「そこに置いておけ。後で見る」

ルシエルは言われた通りに報告書を置き、未処理の書類の山を眺める。

大きな机の上に、高さ七十センチ程の山が四つ。

このすべてに目を通さなければならぬのだ。ミカエルの苦労が窺い知れる。しかも、これが一日で終わらせる仕事の量だと言うのだから、恐れ入る。

明日にはまた違う書類が、同じような山になっていることだろう。

「貴方も大変ですねえ、こんなに沢山、一人で片付けるなんて」

「用がないなら出ていけ邪魔だ」

ルシエルと言葉のキャッチボールなどしている暇はない。

ミカエルは煩そうに手を振ってルシエルを追い払おうとした。

そのとき、地下から突き上げるような、激しい揺れがカエルスを襲った。

書類の山が崩れ、机の上に雪崩となつて落ちてくる。

ルシエルは立っていられずに座り込んだ。

ミカエルも驚いたように、机にしがみ付いている。

ほんの数瞬のうちに揺れは治まり、後には慌てた天使たちの声が、扉の向こうに残るだけとなった。

ルシエルとミカエルは立ち上がり、お互いの顔を見合わせる。

カエルスに地震などあるはずがない。

どこかで大規模な爆発でもあったのかとも思ったが、揺れの直前にそんな音は聞こえなかった。

崩れた書類はそのままに、扉を開けて通路に出る。

そこには、自分たちと同じように、事態を理解できない天使たちが右往左往していた。

非常事態を報せる警報すら流れないところを見ると、神々も何が起こったのか、完全に把握していないのだろう。

神殿内の者の無事を確かめるために、ミカエルとルシエルは走りだした。

棚が倒れて下敷きになった者や、割れたガラスで怪我をした者を救助して回る。幸い怪我人は多くなかった。

無事な者には、国内の魂たちの様子を見に行かせた。

魂だけの状態で深刻なダメージを受けると、二度と転生できずに消滅してしまうのだ。

天使たちは急いでカエルス中に飛び散った。

覚醒

暗い暗い闇の空間から、それはゆっくりと姿を現した。

白いボサボサの髪が表情を隠している。

それは左足を引きずりながら、長い回廊を進んでいった。

そこは神殿の奥深く、誰も立ち入ることのない闇の牢獄。

神殿の中にそんなものがあるなど、ほとんどの者は知らない。

それはたとえ神であっても同じことだ。

そのため、彼女がその近くを通ったのは、不運な偶然としか言い様がなかった。

戦神アテナは、珍しく装備を外していた。

アテナは戦いの女神であると同時に、芸術の神でもある。

この時季になると、各地の美術会に引っ張りだこなのだ。

今日も朝から人間たちが描いた様々な作品を見て回り、代わりにまた良い作品が生み出せるよう、念を込めてきたところだ。

その帰りだった。

神殿の中で、地震のような大きな揺れを感じたのは。

アテナも被害者がいないかどうかを確かめるべく、足を踏み出した。

そのとき、神殿の壁の一部が崩れているのを発見したのだ。

誰か埋まっているのではないかと、慌てて駆け寄った直後だった。

「邪魔だよ。あっち行け」

崩れた壁の向こうから、小さな子供の声が聞こえた。

アテナが声に驚き振り向いた瞬間、まるで強い力に押し出される

ように、アテナの身体が吹き飛んだ。

反対側の壁に罅が入る程強く叩きつけられる。

背中を打ってしまったようで、立ち上がることもできない。

うまく呼吸ができず、目の前が暗くなる。

アテナを吹き飛ばしたそれは、あの暗闇の空間から抜け出したものだった。

白い髪が顔を隠していて人相は解らないが、背格好からするとまだ子供である。

その白い子供は、はやアテナには興味を失ったか、左足を引きずりながら歩き去った。

アテナはなんとか呼吸を整えて立ち上がり、その子供の後を追ったのだが、何故か何処を探しても、その子供の姿を見付けることはできなかった。

崩れた荷の下から怪我人を救助していたルシエルとミカエルの許に、一人の天使がやってきた。

「ミカさん、るっしー。カミサマが呼んでるよー」

そう言って手を振るのは、ラファエルだった。

ルシエルたちは怪我人の手当てを他の天使に任せ、ラファエルに駆け寄る。

「その呼び方はやめると言っているだろう。
それで、誰からの召集だ？」

眉間に皺を寄せたミカエルが、埃で汚れた服の裾を叩きながら言

う。

ルシエルも、同じようにしてラファエルを見た。

「あのねー、アテナお姉さまから」

その名を聞いた瞬間に、ルシエルとミカエル、二人が神経質そうにひくりと片眉を跳ね上げた。

彼女の気性の荒さは誰もが知っている。

そんなアテナに呼び出されるとなると、死を覚悟しろと言われても大袈裟ではない。

二人は軽く溜め息を吐き、ラファエルと共に部屋を出た。
あまり待たせると、余計な怒りを買うことになるからだ。

急いでアテナの部屋に向かうと、部屋の中央に仁王像と見紛うばかりのアテナが鎮座していた。

その姿に一瞬怯んだ二人だが、なるべくアテナと目を合わせないように中に入った。

よくよく見れば、アテナは包帯や湿布を貼っていて、怪我をしているようだった。

最後に入ってきたラファエルが部屋のドアを閉める。

ラファエルもアテナの怪我に気付いたらしく、ルシエルの背後から顔を出して首を傾げた。

「あれ、アテナ様怪我してるの？ 大丈夫ですかあ？」

びりっ

音を立てて部屋の空気が固まったような気がした。

アテナは鈍く光る目でラファエルを睨み付け、不機嫌さを隠そう

ともせず、ガン！ と椅子の肘掛を殴る。

「この程度、どうということもない」

ドスの利いた声で言い、アテナは足を組んでルシエルを睨み付けた。

目だけで人を殺せるなどよく言ったもので、この眼力は人だけでなく、魔王さえ仕留めてしまえそうだ。

「あの……僕に何か？」

耐えきれなくなったルシエルが、恐る恐る問う。

アテナは眼力を緩めることなく、迫力満点の顔のまま口を開いた。

「貴様の仕業ではないのだな？」

「……………え？」

「この度の騒動は、貴様の仕業ではないのかと訊いている！」

ガン！ と再度肘掛を殴り付け、アテナは声を荒げた。
ルシエルは慌ててぶんぶか首を振る。

「僕は何もしてませんよ！」

「そうか。前科持ちだから一応訊いてみただけだ」

「……………」

アテナは今までの剣幕とは打って変わって、ひょいと肩をすくめ

椅子に座り直した。

怒り狂っているように見せたのは、演技だったらしい。

アテナの怖さを知っている者程、嘘を隠す拳動が表れやすい。それで相手が嘘を言っているのかどうか、見極めていたのだ。

緊張が解けて脱力したルシエルたちを見渡し、アテナは改めて状況を説明し始めた。

「今朝の地震のような揺れの後、不審な子供が現れた。住民登録もされておらず、どの記録にも記載されていない。

今回の騒動と関係があると見て、調査搜索を開始する。ミカエル、天使たちを搜索に向かわせる。詳細は広報部から通達される」

「かしこまりました」

ミカエルが一礼すると、話はそれだけだとも言うように、アテナから退室を命じられた。

ミカエルに続き、ルシエルとラファエルも部屋の外に出る。ドアを閉めた瞬間に、どっと汗が噴き出した。

「まったく……一々怖すぎるんですよ、あの方」

「るつしーに一票お」

「それくらいにしておけ。ラファエル、ヘルメス様からの通達がある前に、カエルス門番に伝えてきてくれ」

不審者を外に逃がさないためにも、門の守りを固めておかねばならない。

ラファエルは「りょうかい」と片手を挙げ、その場から消え去った。

門の近くまで瞬間移動したのだ。

門の外側まで一気に飛ぶことはできないため、通行証を持たない者は一度内側に降り、呼び鈴を鳴らして門を開けてもらう必要がある。

ラファエルが帰ってくるのを待っている間に、ヘルメスからの通信が入った。

『ぴんぽんぱんぽーん。マイクテス、マイクテス。』

広報部長ヘルメスさんから、臨時のお知らせです』

通信機器など使っていない。ヘルメスの声が直接脳内に響いてくる。

伝達の神であるヘルメスは、ラファエルやレミエルの上司でもある。

ラファエルの軽いノリは、上司から伝染したのかもしれない。

『今朝の地震は知ってるね？ それに関係してるかもしれない不審者がいるので、皆さんで検索してください』

ヘルメスの声に合わせて、白い子供の姿が脳内に映し出される。

アテナが目撃した子供の姿だ。

白い乱髪に白い服、顔の左側は包帯に覆われていて解らないが、瞳は血のような赤だった。

『ほんじゃ、天使ちゃんたち、搜索お願いね。ミカエル、チャンネル繋がってるから、天使ちゃんたちに指示してあげて』

ヘルメスに言われて、ミカエルは声に出さず頭の中で言葉を紡ぐ。ヘルメスの力を借りれば、頭で思い描いた言葉を、カエルス全土の天使たちに伝えることができるのだ。

『怪我人を除き、搜索チームを選出する。第二会議室を臨時本部とするので、何かあればそこに連絡を入れてくれ。』

これから名を挙げる者は不審者の搜索、それ以外は通常業務に戻るように』

ミカエルは歩きながら蕩々と指示を出す。

臨時本部に着く頃には、搜索チームの選出も終わった。

名簿など持っていない。

ミカエルは、すべての天使の名前と能力を暗記しているのだ。

中々できることではないと感心しながら、ルシエルは会議室の扉を開く。

通達を聞いた天使たちが、気を利かせて会議室の中を片付けていた。

地震で倒れた棚や机を直し、通信機器を運び込んでいる。

これならばすぐにでも搜索に行けそうだ。

「皆、ご苦労。各々自分の仕事に戻ってくれ」

「はっ」

通常業務組は自分の持ち場に帰っていく。

広報部から来た助っ人二人が、本部での連絡を担当することになった。

ミカエルは自室で通常業務がてら、搜索本部の指示をする。

ルシエルはサディンと共に搜索チームに任命されていた。

二人とも自分の持ち場に行こうとしたとき、本部の入り口にラファエルが現れた。

瞬間移動で戻ってきたらしい。

いきなり目の前に現れたため、ルシエルは正面からラファエルに衝突した。

「うわっ」

「みぎやっ！」

特に勢い良く入ってきたラファエルは、潰れた蛙のような声を上げて後ろ向きに引つ繰り返った。

そのまま一回転して起き上がる。

「ミカさんミカさん！ 門番いないよ！」

ラファエルにしては珍しく慌てた様子でまくしたてる。それだけに、非常事態なのだということが想像できた。

「今日は、サディンが行っているはずですよ」

焦ったようにルシエルが言う。

サディンに何かあったのかと、酷く心配している様子だ。

「一緒に来て！」

「解った」

ラファエルはミカエルとルシエルの手を取り、三人一緒に瞬間移動する。

何かに引つ張られて放り投げられるような、奇妙な感覚を味わった次の瞬間には、門の内側が見えていた。

普段は閉まっているはずの門が、開いている。

門番でなければ開けることができないはずであり、それが勝手に開いているだけでも異常なことだ。

人一人通れるくらいの隙間しか開いていないところからすると、例の不審者がここから出ていった可能性は高い。

三人は急ぎ門の外に出た。

いつも門の近くにいるはずの、門番の姿はどこにもない。その代わり、門には血痕が残っていた。

ルシエルとミカエルの顔色が変わる。

恐らくここで、例の不審者とサディンが争ったのだろう。ミカエルはわずかに考え込み、ラファエルに向き直った。

「本部に戻るぞ。搜索チームを外に向かわせる」

ミカエルは早速本部に戻り、搜索チームをカエルスの外に派遣させた。

一部にはカエルス内の搜索を命じている。

不審者が、まだカエルス内にいる可能性もあるからだ。

天使たちは、それぞれ担当区画へと飛んでいった。サディンが

失踪したことを知ったルシエルも、不審者とサディンを捜すべく神殿から飛び出した。

その臨時のパートナーに選ばれたのは、レミエルだった。

「何で、あたしがこんな奴と……」

レミエルはぶつぶつと文句を言っていたが、非常時なのだから仕方ない。

ルシエルと共に、カエルスの方の門の外を捜索していた。

「見えましたか？」

「うっさいわね！ 集中できないから黙ってて！」

レミエルの能力、遠隔視。

遙か彼方まで見渡せるレミエルは、捜索にはうってつけの人材である。

彼女は眉を寄せて、遠くの一点を睨むように見つめている。

居場所も特定できていないため、しらみ潰しに捜すしかないのだが、これがかなり大変な作業なのだ。

世界は広い。

遠くまで見渡せると言っても、視野には限界がある。

今レミエルがやっている作業は、世界地図を一ヶ所ずつ拡大して、その中から特定の人物を捜すようなものなのだ。

すぐに見付かるはずもない。

カエルス内には不審者の姿は見えなかったから、恐らく地上に逃げたのだろう。

もしくは、レミエルの死角に隠れて未だカエルズに潜伏しているのか。

レミエルと同じく透視や遠隔視の能力を持った天使たちが、世界中を捜しているものの、発見の報告はない。

レミエルは自分の担当範囲である北欧を中心に捜しているのだが、やはり目標は見当たらない。

焦らずに隅々まで目を凝らすよう心がけているが、見落としている地域もあるかもしれない。

搜索は、かなりの長期戦になりそうだった。

何かに揺さ振られるような感覚が全身を襲う。

その瞬間、右脚に鋭い痛みが走り、サディンは目を覚ました。

小さく呻いて辺りを見回すが、そこはまったく見覚えのない場所だった。

白い壁に、白い天井。その他には何もない。

否、そこには一つ、見覚えのあるものがいた。

サディンの隣に座っている、白い髪の子供だ。

ボサボサの髪に、左側を包帯で覆った姿。

それは紛れもなく、先程自分を襲った人物だった。

あの地震のような揺れの後、サディンは急いで門の前に戻った。

そこに、その子供が現れたのだ。

内側から開けるには通行証が必要はずだが、その子供の手には通行証となる紋様は見当たらなかった。

不審に思い捕まえようとしたとき、その子供が言ったのだ。

「……似てる……でも違う」

何のことは解らなかった。

その子供は躊躇いもせずにサディンに近寄り、右手でサディンの服を掴んだ。

「ねえ、エレボスはどこ？」

その名に聞き覚えのなかったサディンは、知らないと答えた。するとその子供は急に不機嫌な表情になり、催促するように右手を掲げてサディンに差し出した。

「エレボスは、どこ！」

連れていけと言うように手を出す子供に、サディンは再度知らないと答える。

とにかく捕まえて神殿に連絡を取ろうとしたそのとき、子供は癇癪を起こしたように叫んだ。

「
」

何と言ったのかは聞き取れなかった。

しかしその子供が何か言った瞬間、サディンの右脚から血が噴き出した。

何が起ったのか。

反射的に自分の脚を見ると、何も触っていないはずなのに、右の大腿がぱっくりと切れていたのだ。

骨が見える程深く裂けており、焼けた火箸を押し付けたような痛みが駆け上がってくる。

驚愕に目を見開き、視線を子供に戻したときに、何故か意識が途切れてしまった。

直前にあの子供の声を聞いた気がするが、よく解らない。

そこまで思い出し、サディンはそっと切れた右脚に触れる。

手当てもされていないようで、未だ血が溢れ続けている。

失血のショックで死んでいないことから考えると、気を失っていた時間はほとんどないらしい。

一先ず傷の処置をしようと、サディンは上体を起こした。

「動くな」

白い子供の声が飛び、サディンはぴたりと動きを止める。

この子供がどんな能力を持っているのか解らない以上、下手に逆らうことはできない。

サディンは半身起こした不自然な体勢で、慎重に子供に話し掛けた。

「解った。だが、傷の手当てをしたいんだ。このままでは、死んでしまうよ」

その子供は、意外にも素直にサディンの言葉に耳を傾けた。

「ほんと？」

「ああ。他には何もしないから、動いてもいいか？」

早くも貧血気味になり頭がくらくらするが、焦って子供を怒らせても良い結果は得られないだろう。
サディンは子供の返答を待った。

その子供はサディンの脚の傷を見下ろし、何事か考えるように首を傾げた。

「これが、治ればいいの？」

「ああ……」

徐に顔を上げた子供は、何故か得意そうに笑う。
いったい何を考えているのかとサディンは眉をひそめるが、子供は気付いていない様子でサディンの右脚を指差した。

「それなら、大丈夫だよ。全部きれいに治ってるもん」

「何……！？」

サディンが再び脚に目をやれば、そこにあつたはずの傷口はなくなっており、裂けた服も染み込んだ血の跡も消えていた。
触ってみても、なんともない。

何が起こったのか解らず、サディンは白い子供を見つめることしかできなかった。

その子供は笑顔のままでサディンに近寄り、彼の服の裾を握る。

「一人で行こうかと思って思ったけど、お兄ちゃん、ボクに似てるから、一緒に行くことにしたんだ」

「何のことだ……？」

やはり、言っていることの意味が解らない。

サディンは不快感を顕にして眉間に皺を寄せた。

その子供は口許に笑みを浮かべ、話を続ける。

「ボクとお兄ちゃんは、似てるの。だから、お兄ちゃんがボクのお兄ちゃんになってよ」

その子供の声に、妙な響きが混じったように聞こえた。

何か、思考がぼやけるような、奇妙な声。

その声が、サディンの中で何かを揺さ振った。

眩暈のような感覚を覚えると共に、何かが麻痺していく。

サディンはゆっくり瞬きして、その子供の顔をまじまじと見つめた。

「ねえ、一緒にエレボスを捜してよ、お兄ちゃん」

「……ああ」

サディンはゆっくりと頷いた。

この子供と一緒に、エレボスを捜しに行く。

それが、自分取るべき行動なのだと、そう思えたのだ。

何かがおかしいという奇妙な感覚が抜けなかったが、サディンは立ち上がってその子供の手を取った。

そうしなければならぬような、そんな気がした。

「見付からないとは、どういうことだ？」

カエルスの神殿に作られた搜索本部で、ミカエルは目標を完全に見失ったと報告を受けた。

どこを捜しても、見付からないと言うのだ。

搜索を開始してから、既に丸一日が経過している。

報告に来たレミエルたちも、表情には疲労の色が滲み出ていた。

「言葉通り……世界中を捜したのに、見付からないんです」

レミエルは悔しそうに唇を噛んだ。

透視能力者、遠隔視能力者、すべてでそれこそ世界中を捜したのに、発見することができなかったのだ。

こんなことは初めてだった。

目標が追跡の目から隠れる能力を持っているのか、それともこの世界にはもういないのか。

もしそうならば、見付けられる可能性はゼロに等しい。

搜索は続けなければならないが、このままではいけない。何か別の方法を考えなくては。

ミカエルは顎に手を当て、しばし考え込んだ。

今回の事件はとにかく異様だった。

今捜している子供が、どこから現れたのかも判らない。

その子供が何者なのかも判っていない。

戦神アテナさえ圧倒したという、その子供の能力も何なのか解らない。

判別できていないこと、理解できていないことが多すぎる。

この件は最高神であるジュピターにも伝えられているが、彼女もその子供が何者なのか解らないと言うのだ。

ジュピターは今、先代の残した記録を探している。

そこに何か、手がかりになるものがあれば良いのだが。

「あの、ミカエル？」

不意にルシエルが話し掛けてきた。

普段は見ない真剣な表情から、彼の心情が窺える。

「何だ」

「これだけ捜して見付からないのなら、ここから見える場所にはいないのかもしれない」

「……その可能性は、私も考えていた」

ルシエルが何を言いたいのか。

他の天使たちは解らないかもしれないが、ミカエルには解る。

このカエルスからは決して見えない場所がある。

カエルスの裏側、地の底に広がる国、アビス。

あそこならば、天使はおろか神の目すら届かない。

自由に行き来できるような場所ではないが、標的である子供は未知の力を持っているのだ。

ひよっとしたら、アビスに行くことも可能だったのかもしれない。だが……

「難しいところだな」

アビスとカエルスは徐々に友好関係を築き始めている。

とはいえ、それはアビスとカエルスの上層部だけでのやり取りであり、相変わらずアビスの他の住民は、カエルスに対して好戦的な態度を示しているという。

搜索のために天使がアビスを訪れ、そこで問題が発生しないとも限らない。

両者の関係を悪化させるようなことがあつてはならない。
アビスでの搜索には、あまり大人数を動員する訳にはいかないのだ。

「ああ、くそつ、何か方法は……」

普段の丁寧な言葉遣いも忘れて、ルシエルが呟く。

それだけ焦っているのだろう。

気持ちは解るが、ミカエルにもどうにもできないことはある。

今は、ゼウスが残した記録に手がかりがあることを祈るしかない。
刻一刻と時が過ぎていく中、焦燥感ばかりが募っていった。

「ねえお兄ちゃん、エレボスはどこにいますか？」

レミエルたちが搜索を開始した頃、その子供はサディンと手を繋いで歩いていていた。

手を伸ばせばカエルスの門に届きそうなくらい近くにいるのに、
搜索に出た天使たちは誰も気付かない。

二人がいる場所は、カエルスでありながらカエルスではない場所。
その場所は、誰にも見付かることのない空間だ。

例え神であろうと、今二人がいる空間を感知することはできないだろう。

サデインの手を引いて歩く子供の足が、ぴたりと止まった。サデインが歩こうとしていない。その場に立ち止まったまま、カエルスの門を見上げている。

「どうしたの、お兄ちゃん？」

「いや……俺は、あそこに戻らなければならないんじゃないかと……」

サデインの目は門を見つめている。

先程からずっと、サデインは自分自身の行動に違和感を感じていた。

この子供と共に行くべきなのか、あの門の前に戻るべきなのか。己のとるべき行動が、解らなくなってきた。

その子供はサデインが迷っていることを知ると、歯をむき出しにしてサデインを睨み、彼の手を握り締めた。

「何、言ってるの！？ お兄ちゃんは、僕と一緒にエレボスを捜しに行くんだよ！」

子供特有の甲高い声が響く。

しかし、その声にも周囲の天使たちが気付いた様子はない。

その子供の声は、まるで水面に投げ込んだ小石のように、不思議な音の波紋を描く。

言葉の波に飲み込まれるように、サデインの思考は沈んでいく。

気付けば、サディンは笑顔で子供に頷いていた。

「ああ、解ってる。じゃあ、どこから捜しに行こうか」

サディンは子供の手を引き、カエルスに背を向けて歩きだした。子供も左足を引きずりながら並んで歩く。彼らが後ろを振り返ることはなかった。

標的発見ならずの報告を受けてからしばらくした後、ミカエルは一人でジュピターの許を訪れていた。ジュピターは資料室で古い記録をひっくり返しているところだった。

ゼウスが残した記録書は、数百にも及ぶ。それを一人で確認しているのだ。

まだ半分も読み終えていない。

効率は悪いが、極秘資料であるため他の者に手伝わせる訳にはいかなかった。

ミカエルが資料室に入ってくるのに気付いたジュピターは、開いていた本を閉じ、顔を上げる。

梯子に腰掛けて高いところの本を見ていた彼女は、ミカエルの前にふわりと舞い降りた。

「どうしました？」

澄んだ鈴のような声がミカエルに向けられる。

ミカエルは常磐色をしたジュピターの瞳を見つめ、徐に口を開いた。

「私を、アビスへ向かわせていただだけませんか」

ミカエルの言葉に、ジュピターは口許に片手を当て目を丸くした。ルシエルならばともかく、ミカエルからその言葉が聞けるとは思わなかったのだ。

「アビスへ？ ……何か、心当たりがあるのですか？」

常に冷静に物事を見ているミカエルである。短絡的にアビス行きを申し出るはずがない。

ジュピターは、ミカエルから理由を言ってくれるのを待った。ミカエルはわずかに躊躇った後、その理由を口にした。

「世界中を搜索しましたが、標的を発見することはできませんでした。こちらの目が届かない場所にいる可能性もあります。

その場所へも搜索範囲を広げたいのですが、何分危険な場所であるため、一般の天使たちを向かわせる訳には参りません」

アビスでの搜索は自分一人で行う。ミカエルはそう言っているのだ。

勿論、ジュピターはそんな申し出を承諾することはできない。

しかし、それはジュピターも考えていたことだった。

標的は、アビスに向かったのかもしれないと。

しかし、一つ気がかりなことがあった。

アビスの王であるサタンが、何も言っていないのだ。

もし標的がアビスに入ったならば、サタンがそれに気付かないはずがない。

サタンの実力は、ジュピターをも遥かに凌いでいるのだから。

そのサタンが何も言ってこないということは、標的はまだアビスに入っていないのでは？

ジュピターはそう考えているのだ。

だが、もし……もしも標的がサタンの目からも逃れる術を知っていたら。

サタンがこちらに連絡をする前に、標的から攻撃を受けていたとしたら。

そうだとしたら、標的がアビスに入っても、サタンからの連絡は来ないだろう。

ならば、こちらからサタンに訊ねてみるべきかもしれない。

ジュピターにはアビスへの道を開く力がある。

この神殿から、サタンの城へ繋がる道だけだが。

問題は、アビスに派遣する人材だ。

神々には個々の役割があり、それを手放してまでアビスに行くことはできない。

今のところ動ける神は、アテナくらいだ。

しかしアテナは怪我人である。何でもない様を装ってはいるが、実は壁に叩きつけられた際に肋骨を数ヶ所と、わずかに脊椎を損傷していたのだ。

いくら何でも、そんな彼女を動かす訳にはいかない。

かと言って、手の空いている天使を向かわせたのでは、有事の際に対処できるかどうか。

神魔と天使の間には、大人と赤子程の力差があるのだ。

神にも追い付く程の實力を持つ天使もいるが、それは今のところミカエルだけだ。

三人いた大天使は、一人は転生し、一人は地位を剥奪され力を削がれた。

最後の大天使がミカエルなのだ。

アビスに行かせるとしたら、ミカエル以外あり得ない。

「……仕方ありませんね。サタンの許へ行き、事情を説明してきていただけますか？」

「はい」

「くれぐれも魔王たちと問題のないよう、気を付けて」

「承知しております」

ミカエルとジュピターは静かに資料室を出て、奥の間に入っていた。

そこは最高神の部屋の、更に奥にある小さな部屋。

材質の判らない青白い石の床に、部屋の隅一杯まで魔法陣が描かれている。

薄暗い部屋の中には灯りになるものは置いていない。

それでも部屋の隅々まで見渡せるのは、床に描かれた魔法陣が、淡く青い光を帯びているからだ。

ジュピターとミカエルは魔法陣を挟み、部屋の両端に立った。

五芒星を模る紋様の、頂点に位置する場所にジュピターが立ち、反対側の入り口付近にミカエルが立っている。

ジュピターが魔法陣に手をかざし、小声で何か呟くと、魔法陣の

光が青から金色へと変化する。

カエルスとアビスの間に築かれている結界は、ゼウスが去った後も存在し続けている。

ゼウスに代わり、ジュピターが新たに結界を造り直したからだ。アビスから現れる獰猛な魔物からカエルスを守るために、アビスと友好関係を築き始めているこのときでも、結界を外す訳にはいかない。

今、この結界を抜ける道を自在に造ることができるのはジュピターと、アビスの王であるサタンだけなのだ。ジュピターの呪文が終わると、魔法陣は益々強く輝いた。ミカエルが魔法陣の中央へと足を踏み出した。そのとき。

ひゅっ

と、空気が裂ける音がした。それと同時に、ミカエルの目の前に見知った人物が現れる。

「間に合った!？」

「ばっちりです!」

「ちよつとドコ触ってんのおばか!」

また、それと同時に聞き覚えのある声も降ってきた。

「な……!？」

ミカエルが驚愕の表情で固まる。ミカエルの目の前に現れたのは、ラファエルとルシエル、レミエ

ルの三人だった。

ジュピターも口許に手を当て 驚いたように四人を見つめている。

呪文が完成した直後に現れたのが、幸いだったのか災いだったのか。

魔法陣の輝きはミカエルだけでなく、三人までも呑み込んで弾けた。

再び薄青い光を取り戻した魔法陣は、残されたジュピターを青白く照らしている。

そこに佇むばかりのジュピターは静かに魔法陣を見下ろし、ぽつりと呟いた。

「あら、まあ……何とかなりますかしら……？」

案外楽観的なジュピターであつた。

ぶわつと光が広がり、やがて収束して消える。

薄暗い部屋の中、かすかに黒い光を明滅させる魔法陣の上には、ミカエルを含む四人の天使の姿があつた。

先程までいた部屋ではない。

全体的に黒い石材で覆われたこの部屋には、黒い逆五芒星の魔法陣が描かれている。

不気味な黒い光に照らされて、ミカエルの顔がぼんやりと浮かび上がった。

眉間に皺を寄せて、三人の天使たちを睨み付けている。

「何てことをしてくれるのだ、馬鹿者！」

珍しく声を大きくして怒鳴るミカエルを見て、レミエルはばつが悪そうに目を逸らす。

ラファエルは相変わらずへらへらしていたが、その類には一筋の冷や汗が流れていた。

ルシエルだけが、いつもの調子でのりくらりとミカエルの言葉を躲している。

「まあまあ。旅は道連れって言うじゃないですか。

水臭いですよ、僕ら一緒にアビス巡りした仲なのに」

「ふざけるな！　どれだけ軽率なことをしたか解っているのか！」

ミカエルの声が、狭い部屋の中に響く。

そのとき、部屋の扉が重い音を立てて開かれた。

ミカエルの声が聞こえたのか、彼らが来るのを見越していたのか、開いた扉の先にいたのは、アビスを治める地底の魔王、サタンだった。

「なあゝにやってんだ俺様の城で」

開けた扉に寄り掛かり、サタンはミカエルたちを睨み付けた。どうやら、ミカエルたちは無事にアビスへと来られたらしい。サタンの存在が、それを証明している。

ミカエルは他の連中が余計なことを言う前に、サタンの前へと歩み出た。

「ご無礼の程、ご容赦を。火急の用件にて貴殿に確認したいことがあつて参りました」

ミカエルは丁寧な腰を折る。

その堅苦しさを拒むように、サタンはフンと鼻鳴らしてミカエルを見下ろした。

「いったい何の用だ？ 定例会議はまだ先だろう」

サタンは表情を変えずに口を開いた。

どうやら、カエルスで起こった異変には気付いていないようだ。そこヘルシエルが、ミカエルを押し退けるように前に出る。

眉を吊り上げるミカエルに構わず、ルシエルはサタンに訊ねた。

「こちらに、サディンが来ていませんか？」

「あのちつこいガキのことか？ 奴がどうした？」

サタンはルシエルの表情を探るように目を細める。

しかしルシエルはミカエルに押し返されてしまって、その表情を読むことは叶わなかった。

「いい加減にしろ！

……失礼。実は昨日、カエルス神殿内にて突然不審者が現れたのです。その者はすぐに姿を消し、それとほぼ同時刻に門番が行方不明になりました。

搜索は続けていますが、未だ発見ならず、何らかの方法でアビスに侵入した可能性を考慮し、こうして訪ね参った次第です」

片手でルシエルを押さえ付けながら、ミカエルはサタンに事情を

説明した。

サタンは扉に寄り掛かったまま腕組みし、ミカエルの話を聞いている。

何か思うところでもあるのか、指先で形の良い顎を掻きながらぽつりと呟いた。

「神殿内に……か」

その様子を見て、ルシエルだけでなくラファエルとレミエルまで、ミカエルを押し退けて前に出た。

「あんた、何か知ってんの!？」

「ねーねーこの人誰!？」

「サデインは、どこにいるんですか!？」

三人に一齐に詰め寄られ、サタンも思わず後退る。

押し退けられたミカエルが、怒りの形相で三人を無理矢理引き戻した。

「お前たち、止める!」

「ちょっとミカエル……!」

「黙らないと二度とその口を使えなくしてやるぞ!」

どうやら、ミカエルは心底ご立腹のようだ。

般若の如き形相に、レミエルとラファエルは慌てて自分の口を押さえた。

ルシエルも不満顔ながら、一応口をつぐむ。

ミカエルは一つ咳払いして、サタンに向き直った。

「部下が失礼した。」

本題に戻るが、その不審者がこちらに侵入した形跡はありますか？
それだけでも、お聞かせ願いたい」

サタンはしばらく黙り込んでいたが、ミカエルの顔を見下ろし、真剣な表情で口を開いた。

「その前に訊かせる。その不審者とやら、どんな成りをしていた？」

「見た目は八歳前後の子供で、左目、左手、左足を包帯で覆っていた。白い髪に赤い瞳の男児だ」

ミカエルはヘルメスから見せられた不審者の姿を思い出しながら、なるべく細かく説明した。

それを聞いたサタンの目が見開かれる。
明らかに何かを知っている様子だ。

ミカエルたちはサタンの言葉を待った。
サタンは静かに口を開く。

「……まずいことになったな。そうか、あのジジイがいなくなっ
てすぐに動き出さなかったから、油断していた……」

眉根を寄せて舌打ちする。

事態を把握しきれていない天使たちは、わずかに眉をひそめるだけだ。

サタンは彼らには構わずぶつぶつと呟き続ける。

「そうすると……いや、既に入り込んでいる可能性も……」

「サタン？」

ルシエルに声をかけられ、サタンはようやく我に返った。
珍しく動揺している。

そんなサタンの姿を見るのは初めてで、さしものルシエルも困惑しているようだ。

サタンは彼らを見渡してはつきりと宣言した。

「ああ……この件は貴様たちの手に負えん」

あまりにきつぱり言われてカチンときたのだろう。

レミエルが明らかに不機嫌そうに眉を寄せた。

事態を把握しきれていないミカエルやルシエルも、訝しげにサタンを見つめる。

サタンは皆を魔法陣の部屋に押し込め、自らも中に入り扉を閉めた。

「その神殿に現れたという不審者は、おそらくアイテールだ」

「アイテール？」

聞き慣れない名前に、ルシエルたちは首を傾げた。

サタンの話は続く。

「その昔、俺様とゼウスとで、一人の神を封印した。その身体を二つに分け、カエルスとアビスに幽閉していたのだ。

あのジジイがいなくなったことで、封印が解けたのだろう。すぐに動かなかったのは、力を回復させるためか……」

サタンの話を聞いていたミカエルとルシエルは、あることに気付いていた。

レミエルとラファエルは気付いていないようだが。

サタンは、最高神だったゼウスと二人で『封じた』と言った。

『倒した』ではなく、『封じた』と。

それはとりもなおさず、この世界で最強の二人でも、その子供を倒すことができなかったことを示している。

その子供は、それ程までに強力な力を有しているということだ。

想像していた以上に危険な相手なのだと理解したミカエルの背を、冷たい汗が伝った。

軽く緊張を覚える。

サダルメリクは無事なのだろうか、ミカエルは門番が消えた力エルの門を思い出した。

あそこに残された血痕を見るに、無事とは言えない状況だろうとは推測できる。

最悪の事態も考えなければなるまい。

ちらりとルシエルを見やると、彼も同じことを考えていたのだろう。

祈るように目を閉じているその顔が、心なしか青ざめて見えた。

「その子供を二つに分けたとき、便宜上名前を付けた。

カエルスに封じたのがアイテル。アビスに封じたのがエレボス。おそらくアイテルは、エレボスを求めてここに来るはずだ。しかし、奴の能力が問題……」

説明が続いていたサタンが、急に言葉を切った。

どうしたのかとサタンの顔を見上げれば、彼は大きく目を見開き

その身を震わせていた。

「サタン……?」

ルシエルが声をかけるが、サタンは返事をしない。
それどころか、何もしていないのに彼の額から血が流れてきたのだ。

赤い雫が頬を伝い、顎から滴り落ちる。

「サタン!？」

倒れそうになった彼を、ルシエルとミカエルが両脇から支えた。
サタンは驚愕の表情で己の血を拭い取る。
掌が真っ赤に染まった。

「サタン、どうしたんです? いったい、何が!？」

ルシエルが軽くサタンを揺さ振ると、サタンは目だけ動かしてルシエルを見た。

その唇が薄く開き、かすれた声で言葉を紡ぐ。

「奴の仕業だ……! くそつ、俺様が遅れを取るとは……」

奴、とは訊かなくても解る。

アイテールだ。

やはりアイテールはアビスに来ており、何らかの方法で攻撃を仕掛けてきたのだ。

いったい、どんな能力を使ったのかは解らないが、地獄王であるサタンが膝を付く程、強い力を持っていることは解った。

おそらく、ミカエルはおろか、他の天使たちでは太刀打ちできない。

しかも、サタンが攻撃を受けたとき、敵の姿はどこにも見えなかった。

少なくとも離れた位置から、障害物など関係なく攻撃できるようだ。

その証拠に、この部屋の壁には傷一つ付いていない。

「他の……連中は……！」

サタンが小さく呻く。

城の中にいる他の悪魔たちも攻撃を受けている可能性は高い。

ミカエルはサタンをルシエルに預け、部屋の扉を勢い良く開いた。すぐ外の通路には誰もいない。

周囲を警戒しながら、ミカエルはレミエルを呼んだ。

「レミエル、私の後に続け。前方、及び左右の監視を頼む」

「はいっ！」

レミエルはすぐにミカエルの後ろに並び、遠隔視の能力は発揮した。

とりあえず半径数百メートル四方を見回したが、アイテールの姿は見えなかった。

「周囲に敵の姿は見えません！」

「よし、ルシファー、ラファエルもそこから出る。城の中でまだ無事な者を捜しながら、怪我人を収容できる場所へ向かう。」

構わんな？ サタン」

ミカエルは背後を振り返り、サタンに声を掛けた。
一応確認する形をとってはいるが、実質命令に近い。

「ち……いいだろう」

サタンは溢れ続ける血を押さえながら、ルシエルの肩を借りて部屋を出た。

その後ろにラファエルが続く。

五人は急いで通路を駆け抜けた。

途中で悪魔たちを数人発見したが、誰もサタンと同じように額から血を流して倒れている。

神と同等の力を持つ悪魔が、全員抵抗もできなかったという事実が、天使たちの危機感を煽る。

ひとまずサタンの怪我を手当てするため、彼の自室に急いだ。

サタンの部屋にたどり着くまで、無事な悪魔には一人も出会えなかった。

皆、どこかしら血を流して倒れている。

「サタン、誰か治癒能力を持つ方はいないんですか？」

「癒し系悪魔なぞいる訳ないだろうが」

サタンの怪我の具合を看ながらルシエルが訊くが、あっさりサタンに否定されてしまった。

悪魔の力は破壊的なものがほとんどで、治癒能力を有する者はいない。

「カエルスから助っ人を呼ぶより他にないか……ジュピター様に連絡を取りたいのだが」

ミカエルが椅子に座ったサタンを見下ろす。

サタンは壁に掛けてある、顔程の大きさの黒い鏡を指差した。

「会話だけなら、そこに手を付いて念じるだけで可能だ」

ミカエルはすぐに言われた通り、何も映さない黒い鏡に手を付いた。

頭の中で数度ジュピターを呼ぶと、本当にジュピターから返答がきた。

ミカエルが事情を説明している間に、レミエルとラファエルは城中の怪我人を広間に集めていた。

全員を収容できるような広い部屋は、広間しかなかったのだ。

レミエルが遠隔視で怪我人を捜し、ラファエルが瞬間移動ですぐさま怪我人を連れてくる。

広間は徐々に怪我人で一杯になっていった。

「はっ、カエルスの連中に借りができたな」

頭に包帯を巻いたサタンが、不敵な笑みはそのままにミカエルを見上げた。

しかし声には柔らかい響きが見え隠れしている。

それでも、ミカエルたちの迅速な対応には感謝しているのだ。

「元は、こちらがアイテールを逃がしたことが原因だ。貴殿が気にする必要はない」

「それを言うなら、アイテールを滅さず封じるに止まったのが、そもそも原因だろうよ」

静かに首を振るミカエルを遮り、サタンは立ち上がりながら言った。

傷自体は然程酷いものではないはずなのだが、何故か足元が覚束ない。

ルシエルが肩を貸そうとすると、サタンは片手でそれを遮った。

「いい。それより聞け。奴の能力のことだが……」

サタンはミカエルとルシエルに、アイテールの持つ特別な能力を話始めた。

その力は確かに、今まで見たことのない『特殊』な能力だった。

広間に集められた怪我人たちに、カエルスから派遣された天使が治療の術を施している。

かつて治療の大天使と謳われたリリスに比べれば大分力は弱いが、小さな傷ならばみるみる治っていく。

だが、彼らもサタンと同じく、傷自体は治療できるのだが、何故か起き上がることはできなかった。

アイテールが何かしたのは間違いない。

助けられた悪魔たちは、皆一様に複雑な表情をしていた。

カエルスとアビスの確執のためである。

しかし、上層部であるサタンやジュピターが友好関係にあること、天使たちに助けられた事情などから、嫌な顔もできないのだ。

そんな奇妙な空気が漂う広間に、サタンとミカエル、ルシエルが入ってきた。

皆の視線が、彼らに注目される。

「よく聞け貴様ら。このアビスに今、昔俺様とゼウスが協力して封じた犯罪者が逃げ込んでいる。今回の襲撃もそいつの仕業だ。

おそらく、アビス中の住人は同じく襲撃を受けていることだろう。俺様たちには今、自由に動かせる手足がない。

そこで、カエルの神、及び天使に協力を仰ぐこととした」

ざわっ……

サタンのその宣言に、広間にいた悪魔や天使たちから騒めきが起る。

アビスとカエルスが協力するなど、今までにない事態だ。

皆が困惑している様子が、手に取るように解る。

ミカエルはサタンの横に並び、天使たちを見渡した。

「天使たちに告ぐ。これよりアビス中の集落に赴き、悪魔たちの救援活動を開始する。

数人で組み、各地の集落へ飛んでくれ。僻地へはラファエル他、移動能力を持つ天使を付ける」

天使たちは多少途惑いながらも、ミカエルの言葉に従った。

サタンに用意してもらった地図を元に、周辺の集落へと飛んで行く。

やや釈然としない天使や悪魔たちもいたが、サタンとミカエルがにこやかに握手する様を見せられ、慌てて指示に従った。

これは、サタンとジュピターが考えたことだった。
この状況を上手く利用して、カエルスとアビスの友好関係を確かなものにしようとしたのだ。

いくら上辺だけの言葉を並べたところで、納得できない者はいるだろう。

だが、こうして目の前で魔王と天使が手を取り合う姿を見せられれば、この気持ちは伝わるはずだ、と。

明日にはどうか都合をつけて、ジュピターを含む数人の神が、アビスを訪れることになっていた。

友好関係の補強はあくまで二次目的であり、アイテールを捕獲することが第一の目的だからである。

悪魔たちが動けない以上、アイテールに対抗できるのは神しかない。

それに、ここでアイテールを捕まえないことには、カエルスとアビスの関係を修復することも困難になる。

逆に言えば、アイテールさえ捕獲できれば、カエルスがアビスを救ったという形になる。

恩を売るつもりはないが、これをきっかけに両者の関係を良くすることはできるだろう。

だがここで問題になるのが、消えたサディンの存在だ。

既にアイテールに殺されているならどうしようもないが、もし人質として盾にされた場合。

その場合は、サディンを見捨てる覚悟が必要かもしれない。

だがそれは、本当に最後の手段だ。

出来うる限り、彼の発見、救出を最優先に考えている。

そしてここに、サディンの犠牲を最も忌避すべしと集まった者が

いた。

ルシエルとラファエルとレミエルである。

彼らは神の到着を待たずして、ミカエルの目を盗み魔王の城から飛び出した。

「政治が絡むとこれだから……もう二度とサディンを犠牲になんてさせる訳にはいきません！」

「もちろん！ サツちゃんは親友だもん」

「そうよ。それに、あの子が危ないってことは、カストルだって危ないってことじゃない！」

「そんなのダメよ！ あんな可愛くて賢いお人形、他にいないんだからね！」

「あなたがついてきた理由って、それだったんですね……」

三人の天使は土に覆われたアビスの空を舞う。

目的の人物を捜して、当てもなく。

レミエルは気合いを入れて、遠隔視能力を発揮した。
今度こそ見付けてみせると、自分に言い聞かせて。

城の周辺から搜索を始めて、しばらく経ったそのとき。

「い、いたあーっ！ あっち、崖の上の森！」

レミエルが大声で叫んで、北の方を指差した。
ルシエルたちがそちらを見ても、森など見当たらない。
かなり遠い場所のようだ。

三人は頷きあつて、レミエルが指した方角へと羽ばたいた。
サデインを助ける、そのために。

共生

ミカエルたちがアビスを訪れる半日前、アイテールとサディンはカエルスの外を歩いてた。

「ねえお兄ちゃん、エレボスどこにいるんだろっね？」

「さあ……少なくとも、カエルスでそんな名前は聞いたことないな」
サディンは雲のような地面を、アイテールの手を引いて歩いていく。

アイテールは動かない左足を引きずりながらも、サディンにしっかりとついていった。

いや、サディンがアイテールのペースに合わせているのだ。
アイテールはそれに気付かず、小さく唸って首を傾げた。

「カエルスにはいないの？　じゃあ、どこにいるの？」

サディンは困ったように笑ってアイテールの顔を覗き込む。

「そうだなあ……カエルスにいないなら、地上か、アビスにいるんじゃないか？」

「アビス……？」

サディンの言葉に、アイテールは眉をひそめた。

アビスという名に、どうしようもなく苛立ちを覚えるのだ。

アイテールの表情の変化に気付いたサディンは、彼の前にしゃがんで肩に手を置く。

アイテールは虚ろな目でサディンを見つめた。

「どうしたんだ？」

サディンは小さく首を傾げてアイテールを見やる。

アイテールは、何やらぶつぶつと呟きながら小さく頷いている。

サディンの方を見つめていながら、サディンの存在が目に入っていないかのようにだった。

「アビス……そう、アビスだ。ボクが最後に見た……アビス、アビス、アビス。あの男、サタンが僕を閉じ込めてるんだ」

アイテールの瞳が、剣呑な光を放つ。

サディンは背筋に冷たいものを感じ、思わず息を呑んだ。

この子供と一緒にいては危険だと、頭の中で声がする。

しかし、サディンはアイテールから離れようとはしなかった。

アイテールの肩を揺さぶり、自分の方へと注意を引き付ける。

「どうしたんだ？ 何か、解ったのか？」

先程よりも強い口調で話し掛けると、アイテールはあっさりサディンに目を向け、二、三度瞬きを繰り返した。

「お兄ちゃん、何？」

まるで同一人物とは思えないくらい、あどけない声。

先程までのアイテールは何かが乗り移ったのではないかと思う程、暗く冷たい目をしていたというのに、今は外見の年齢に相応しい無垢な瞳をしている。

サディンは途惑いを表情に出さないよう、努めて明るく振る舞っ

た。

「いや、何でもないんだ。エレボスの居場所が解ったかもしれない」

「ほんと？」

アイテールは無邪気に笑う。

サディンはアイテールの動向に注意しながら、慎重に口を開いた。

「恐らくけど、アビスに関係してるかもしれない」

再びアビスの名を聞いて、アイテールが何か別人のようになってしまうのではないか、という思いは杞憂に終わった。

彼は無邪気な笑顔のまま、サディンを見上げる。

「アビスにいるの？」

内心胸を撫で下ろしながら、サディンは曖昧に頷く。

先程のアイテールの呟きから、アビスとサタンという単語が聞き取れた。

あの地獄王が、何らかの関わりを持っているのかもしれない。

それはサディンの予想に過ぎなかったが、アイテールは嬉しそうに笑う。

サディンの手を引いて、早く行こうと促した。

「早くアビスに行こうよ」

「ああ、でも道が……」

ない、と言おうとしたサディンの言葉を遮り、アイテールは近く

の地面を指差した。

「もうすぐそこに道、できるよ」

その言葉が終わると同時に、目の前の地面に変化が起こった。

ぽつんと黒い染みのようなものが現れ、それが徐々に広がって赤黒い穴になっていく。

その穴を隠すように、周囲の霧が濃くなった。

サデインは思わず身構えるが、その穴から地獄の獣たちが出てくる様子はない。

アビスへの道は、人一人分程の大きさまで広がり、膨張を止めた。まるで、ここからアビスへ行けとでも言うように、赤黒い闇は静かに渦巻いている。

サデインは目の前に現れた道を呆然と見やる。

そして道の出現を言い当てたアイテルにも目を向けた。

アビスへの道は出現に規則性はなく、今まで誰も予測できた者はいなかった。

それなのに、この子供はあっさりと道の出現を言い当てたのだ。

何か、自分の知らない特殊な能力があるのだろっとは思っただが、それがどんな力なのかは解らない。

預言の力でもあるのだろうか。

「お兄ちゃん、行こうよ」

考え込んでいたサデインの手を、アイテルが引っ張る。

しかしサデインは注意深く道を見ながら、未だ動こうとはしなかった。

以前、この道でアビスに行ったときは、無数の腕のような触手に攻撃された挙げ句、上空から放り出されたのだ。

触手の攻撃くらいならどうとでもなるが、空中に放り出されたらどうしようもない。

サデインの背には、翼がないのだから。

「……大丈夫なのか？　これ、アビスの天井に繋がってるんだろう？」

眉をひそめて言うサデインに、アイテールは焦れたように叫ぶ。

「大丈夫だよ！　いいから行くの！」

アイテールの声を聞いて、サデインはようやく歩きだした。
この子が言うのなら大丈夫なのだろう。

根拠はないが、何故かそう思えるのだ。

サデインとアイテールは、一緒に穴の中へ飛び込んだ。

風の流れる音が耳をかすめていく。

赤黒い壁がものすごい早さで上へ上へと昇っていき、逆にサデインたちは下へ下へ落ちていく。

やがて赤黒い壁は唐突に終わり、急速に視界が開けた。

赤茶けた土が覆う空、荒れた大地、黒々と広がる森に濁った湖。
遠くの山は煙を噴いていた。

サデインがアビスを訪れるのは、これで二回目。

しかし、最初に見た景色とは大分違っていた。

道の出口が違っただろう。

あのときは、眼下には荒野が広がり、遠くに湖が見えた。

今は、下には広大な森があり、遙か彼方に湖らしきものが見える。
それらの景色を冷静に見つめてから、サデインは唐突に我に返った。

ああ俺、今、すっごい落ちてる。

「全然大丈夫じゃないじゃないか！」

サデインの叫びを聞いて、手を繋いで一緒に落ちているアイテールは首を傾げた。

「え？　なんで？」

本気で言っているのかとぼけているのか、アイテールはぱちくり瞬きする。

ボサボサだった髪が、風に煽られてさらに方々へ翻っていた。

一瞬、アフロになったらどうしよう、などといらぬ心配がサデインの頭を過ったが、今はそんなことを気にしている場合ではない。

「俺は羽をなくしたから飛べないんだ！　このまま落ちたら死んじやうだろ！」

「うそっ！　お兄ちゃん、死んじやうの？」

「二人ともだ！」

こうして言い合っているうちにも、地面はどんどん近付いてくる。それでもまだ遠いが、このままではいずれ墜落死してしまうだろう。

何かないかと、サデインはあちこちに目を向けた。

その目が、こちらに向かって飛んでくるあるものを捉えた。大きな羽を翻し、一直線にこちらに向かってくる。

それは天使でも悪魔でもなかった。

長い首に金の鱗、翼膜の張った翼と、首と同じくらい長い尾。腕はなく、鉤爪の付いた脚が二本ある。

「うそだろ……」

サディンは呆然と呟く。

こちらに向かって飛んでくるのは、本でのみしかその姿を見たことがない、飛竜だった。

空を飛ぶことに特化した竜種で、前脚は退化し、後ろ脚で二足歩行する。

竜種に見られる、炎や氷の吐息はなく、主に鋭い鉤爪や嘴で攻撃してくる。

獰猛ではないが、肉食で鳥などを捕食する。

図書館で読んだ本の内容が、脳内にそっくりそのまま蘇った。

恐らく、あの飛竜はサディンたちを餌だと思っているのだろう。

墜落死する前に、飛竜に食われてしまう可能性が出てきた。

近付くにつれ、それは大きさを増す。

最初は小鳥程に感じた姿も、今ではサディンが両手を広げるより大きい。

しかし、アビスというところはどうしてこうも幻想世界の生き物が住んでいるのか。

ここから地上に迷い出たものを人間が目撃し、そのため様々な幻獣伝説が世界各地に散らばっている訳で。

その伝説の基となる生物を拝めたことは、幸運と言うべきなのだろうか？

サディンはふと、そんなことを思った。

しかし、これはチャンスでもある。

あの飛竜を上手く利用すれば、墜落も捕食も免れるかもしれない。サディンは自由に身動きのとれない空中で、飛竜からアイテールを庇うように前に出る。

飛竜は間近に迫っていた。

飛竜が大きく口を開けて飛び掛かってくる。

片手で上顎を叩き、その手を支点にアイテールを背負ったまま、飛び上がるように飛竜の背に逃れた。

背中に乗せた異物が気に入らなかったのだろう。

飛竜は大きく羽ばたき上昇する。

縦に大きな輪を描くように飛び、頂点にまで昇るとわざと身体をくねらせ、サディンたちを振り落とした。

思わず手を離れたサディンは、アイテールと一緒に投げ出される。旋回して戻ってきた飛竜が、再びサディンに突っ込んだ。

どうにか身を捻って牙を躲したつもりだったが、服の裾が嘴の端に引っ掛かってしまった。

急に引っ張られて、風圧がサディンとアイテールを襲う。

サディンとアイテールの手が、耐えきれずに離れる。

「ああっ」

「お兄ちゃん！」

二人の声が離れていく。

飛竜はサディンだけでも持ち帰るつもりのようなのだ。落ちるアイテールには目もくれない。

サディンは急いで飛竜の首に掴まった。

嘴に引っ掛かっている裾を、強引に引き千切る。

飛竜の翼の付け根に脚を掛け、飛竜の背によじ登った。

飛竜は再度背の上のサディンを落とそうとするが、それより先にサディンが仕掛けた。

サディンの指先から、細く長い糸のようなものが紡ぎ出される。それは体内の気の力で紡いだ、不可視の糸だ。

その糸はサディンの意思に従い、飛竜の身体に巻き付いていく。すべての糸が飛竜を絡め取るのは一瞬だった。

糸でサディンと繋がった飛竜は、今までの動きが嘘のようになくなる。

サディンが軽く糸を引くと、飛竜は方向転換してアイテールの許へ向かった。

飛竜の飛行速度は速く、すぐにアイテールに追い付いた。

「お兄ちゃん！」

大声で叫ぶアイテールを、空中で捕まえる。

サディンは片手でアイテールを抱きかかえたまま、糸を操り飛竜を近くの森に降ろした。

サディンたちは飛竜から降り、森の木陰に隠れる。

サディンが糸を切ると、飛竜は辺りを見回してから、何事もなかったように飛び去っていった。

切れた糸は、するするとサディンの手の中に消える。

この糸こそ、サディンが持つ能力なのだ。

この糸で繋がったモノを、意のままに操る能力。

物だけでなく、自我の弱い者をも操ることができる。

飛竜の姿が完全に見えなくなっから、サディンとアイテールは

その場にへたり込んだ。

どっと疲れが押し寄せてきて、サディンは深く深く溜め息を吐く。

「ああ、死ぬかと思っただ……」

「怖かったあ……」

二人でそれぞれ呟き、身を寄せ合って座る。

今まで気付かなかったが、辺りは暗くなり始めていた。

もうすぐ日が沈む。

黒々と葉が茂る森の中では、更に日暮れは早い。

いつまでもここにいる訳にもいかず、サディンは立ち上がってアイテールを抱き上げた。

森の中には獰猛な地獄の獣がうろついている危険性がある。

片足が動かないアイテールでは、いざというときに咄嗟に動けない。

多少骨は折れるが、サディンが抱えて歩くしかないのだ。

「お兄ちゃん、これからどこ行くの？」

アイテールが更にボサボサになった髪を弄りながら訊ねる。

サディンはアイテールの髪を直してやりながら答えた。

「サタンの城だな。アビスのことを訊くなら、やはりサタンを訪ねないと」

サディンはまっすぐに歩いていく。

見知らぬ地でありながら、その足取りに迷いはない。

サディンの中にいる、カストルの能力のためだ。

カストルには、探查能力が備わっており、一度会った相手ならば、

正確な位置を知ることができる。

サタンのいる城まではかなり遠かったが、どうにか歩いて行くしかないだろう。

先程の飛竜に乗って行けばすぐに着いたかもしれないが、あまり目立つことは避けたかった。

飛竜よりも凶悪な地獄の獣に見付かったら厄介だ。そうになったら、今度も上手く操れる保証はない。

「まあでも、サタンの城に行く前に、安全に休める場所を探さないと」

サディンは早くも黒に染まりつつある空を見上げた。

この深い森の中を、夜に歩くのは危険だ。

何より、子供を抱えたまま夜通し歩き続けられる程、体力に自信はない。

サディンはアイテールを抱え直し、休める場所を探して周囲に目を向けた。

幸い、近くに獰猛な獣の気配はなさそうだ。

しばらくうつろついてみると、幹に大きな空洞がある大木を発見した。

まあまあのださだ。ここでなら休めるだろう。

サディンはアイテールと一緒に、木の下に潜り込んだ。

「今日はここで休もう。明日の朝、サタンの城へ出発だ」

「はい」

アイテールは素直にサディンの隣に座り、寄り添うようにして目を閉じた。

その右手はサデインの手を握っている。

「どこにも行かないでね。一緒にいてね」

「解ってるよ。おやすみ」

サデインが優しく頭を撫でてやると、アイテールは安心したように静かな寝息をたて始めた。

やがてアイテールが完全に眠った頃、サデインの中で変化が起った。

それはこの状況に対する疑問、不安、疑念。

今まで当たり前のようにアイテールの隣にいたことが、おかしいことのように思えてきたのだ。

何故自分はここにいる？

何故この子供についてきてしまったのだ？

この子供は誰なんだ？

何故今まで、そのことを考えなかった？

疑問にすら思わなかったのは、何故？

今まで麻痺していた思考が、一気に蘇ってきたかのようなだった。

サデインは片手で頭を抱え、背を丸めて膝に顔を埋めた。

得体の知れない子供と二人きりであるこの状況が、急に怖くなった。

ゆっくりと息を吐き出し、気分を落ち着かせる。

サデインはまず、何故ここまでついてきてしまったのかを考えた。この子供に無理矢理つれてこられた訳ではない。自分の意思でこの子供と共にいたのだ。

それこそが最大の疑問点だった。

本来ならば絶対にしないはずの行動を、自らの意思で起こしている。

何かがあったのだ。思考を麻痺させるような何かが。

それが解れば、この状況を打開する足掛かりになるだろう。

サディンは頭の中で、この子供と出会ったときのことを思い出した。

あのときは、この子供から攻撃を受けたのだ。

右脚をざつくりと切り裂かれ、一度意識を失った。

そこが腑に落ちない。

あのとき、この子供は攻撃するような仕草をしただろうか？

しかし、どんなに思い返してみても、そんな場面は見付からない。それどころか、子供には触れてすらいなかったのだ。

つまり、少なくともこの子供は、物理的な方法を用いずに、他人に危害を加える手段を持っているということになる。

それは何なのかと考え込み、サディンはふと、ある可能性に気付いた。

それを当てはめて考えてみると、今まで解らなかったことにも説明がつく。

それはサディンの推論に過ぎなかったが、それ以外にこの状況をつくりだす方法は考えられなかった。

サディンはその推論を確信に変えるため、カストルを呼び出した。魂の一部が分離して、サディンの外で形となる。

小柄な人形が、サディンの前に現れた。

魂の一端が繋がっているため、声に出さずとも互いの意思は手に取るように解る。

サディンはしばらく無言のままにカストルと言葉を交わし、先程の推論が正しかったことを確信した。

次にやらなければならないのは、この状況を打開するための行動だ。

サディンはそのために、カストルを別行動させることを決意した。カストルがサディンを励ますように、軽くサディンの肩を叩く。それに応えるように、サディンは笑みを浮かべた。

そしてカストルは一人、外へ飛び出した。そのまま遠くへと走り去っていく。

カストルの後ろ姿を見送り、サディンは静かに目を閉じた。

翌朝、サディンが目を覚ますと、アイテールは隣でまだ眠っていた。

辺りはもう明るくなっている。

外に出ようとして、左手が引つ張られた。

どうやら、一晩中アイテールに手を握られていたらしい。

起こさないようにそっと手を外し、サディンは外に這い出した。

カストルがいなかったため正確なことは言えないが、近くに地獄の獣はいないようだった。

安心して振り向くと、目の前にアイテールが立っていた。

思わずびくつと肩を震わせ、一歩後退る。

アイテールは俯いているため、その表情は陰になっていてよく見えない。

呼吸一つ分程の間を置いて、サディンはアイテールに声を掛けた。

「……お、おはよう。よく眠れたか？」

しかしアイテールは答えない。

緩慢な動作で顔を上げ、サディンを見上げる。
血の色の瞳が、ぬらりと光ったように見えた。

「お兄ちゃん、何で一人なの？」

その言葉にぎくりと身を強ばらせる。

アイテールはサディンとカストルが分離するところを見ていないはずなのに、そのことを知っているのだろうか。

サディンは強ばった笑みを浮かべて、首を傾げてみせた。

「な、何のことだ？」

「昨日は、お兄ちゃんの中にもう一人いたのに、今はいなくなってるよね」

やはり、この子供はサディンとカストルが別れたことを知っている。

しかし、そのときは確かに眠っていたはずなのだ。

何らかの力で、内包している魂を見分けることができるのだろうか。

サディンは咄嗟に嘘について誤魔化した。

「あ、ああ、それなら、周囲の見回りに行ってもらってるんだよ。また変な生き物に襲われたら大変だから……」

嘘だと気付かれて責められるかとも思ったが、アイテールはあっさり納得してくれた。

「じゃあ、戻ってきたら出発するの？」

「いや、待たなくても平気だから、すぐに出発しよう。大丈夫、俺の居場所ならすぐ解るようになってるから」

サディンは早口気味に言ってアイテールの手を取った。
アイテールは手を引かれながら、ゆっくりと歩きだす。
カストルを待つ訳にはいかない。
カストルが戻ってきてしまったら、意味がないのだから。

サディンは歩きながら、近くに食べられそうなものがないか探した。

昨日からほとんど何も口にしていない。

しかし、この森にはの木々には、果実が実っていないかった。
鳥でもいれば捕まえて食べることもできるだろうが、森の中に生き物の気配は感じられない。

まさか得体の知れない草を食べる訳にはいかないだろう。
毒草だったら堪ったものではない。

せめて水くらい欲しかったが、付近には川のせせらぎすら聞こえなかった。

「お兄ちゃん、お腹すいたね」

アイテールにそう言われると、一層空腹感が増したように思える。
サディンは困ったように笑って、自分の腹に手を当てた。

「そうだなあ……サタンの城に着いたら、何か食べさせてもらえるさ」

何の気はなしにサタンの名を口にしたとき、アイテールはすっと目を細めて呟いた。

「サタンがそんなことしてくれるはずないよ。あいつ、いじわるなんだ。ボクたちを閉じ込めて、ひどいやつらなんだ、あいつら。サタンなんか嫌いだ。悪魔なんか嫌いだ」

初めは呟くように言っていた声が、徐々に大きくなる。

サディンは歩を止めて、驚いたようにアイテールを見下ろした。

「サタンなんか、悪魔たちなんか、皆死んじゃえばいいのに」
「やめろ！」

アイテールが叫ぶように言い終わる前に、サディンはその声を遮った。

突然大声を出されて、アイテールはきょとんとサディンを見上げる。

「……そんなこと言っちゃだめだ」

サディンはアイテールの前に片膝をついてしゃがみ、アイテールを正面から見つめる。

その両肩に手を置いて、真剣な表情でアイテールに言った。

「どんなに嫌いな人でも、死んじゃえばいいなんて言っちゃだめだ」

「なんで？」

アイテールは一つ瞬きしてから首を傾げる。

「死んじゃえばいいって、とても悪い言葉なんだよ。絶対、言っちゃダメ」

「ふーん？」

アイテールはよく解っていないようだ。

サディンは立ち上がり、再びアイテールの手を引いて歩きだす。

その表情は険しかった。

サディンの予想が正しければ、恐らく今、このアビスは大変なことになるだろう。

今のサディンにはそれを確認する手段はないが、その予想は当たっていたのだ。

その後もしばらく歩き続け、二人はようやく森の外に出ることができた。

しかし、目の前には大きな崖が広がっている。かなり深い。

覗き込んでみると、底は霞んで見えなかった。

周囲を見回してみるが、大地に走った亀裂のような崖には橋など架かっていない。

ここを降りようとは思えない。しかし、崖の向こう側に飛び移れる程狭くはない。

「どうしょつか？」

アイテールがサディンを見上げてくる。

流石に、この崖を渡る方法を思いつかないのだろう。

しかしサディンは悩む様子もなく、アイテールに笑みを向ける。

「大丈夫だ。ここを渡るくらい、簡単だよ」

アイテールはまだ不安そうにサディンを見ている。

「ほんと？ 落ちない？ お兄ちゃん、ボクのこと守ってね」

サディンは「勿論だ」と言って大きく頷いた。

そのとき、遠くの空から鳥の羽ばたきのような音が聞こえた。サディンははっとして顔を上げる。

聞き間違えるはずがない。

あれは天使たちの羽音。

音の聞こえた方を見て目を凝らすと、遠くから三人の天使が飛んでくるのが見えた。

思わず目を疑った。

あれはルシエルたちだ。

まっすぐにこちらに向かってきている。

サディンは咄嗟に、アイテールを庇うように前に出た。

コノ子供ヲ守ラナケレバ……

何故か、そう思うのだ。

アイテールがサディンの手を強く握る。

「ちゃんとボクのこと守ってね……」

アイテールの言葉が、まるで矢のように心に突き刺さる。

サディンはもう一度大きく頷いた。

「ああ」

その直後、三人の天使たちは二人の上まで来て停止した。

ルシエルが、サディンの姿を見てほっと息を吐く。

門に残された血から、てつきり怪我をしていると思っていたのだが、今見る分にはどこも怪我などしていないようだ。

「良かった……サディン、無事だったんですね……！」

ルシエルの声に合わせて、ラファエルとレミエルが降下してくる。ルシエルもすぐにサディンの前に降り立った。

サディンの背後で、アイテールが身を固くする。

ルシエルたちはアイテールを刺激しないように、口許に笑みを浮かべて近付いていく。

「良かったあゝサっちゃんが無事でえゝ」

「あんまり心配かけさせるんじゃないわよ」

「見付かって良かった。さあ、帰りましょう」

三人は口々に言ってサディンに手を差し伸べる。

サディンもほっとしたように笑みを浮かべ、その手を取ろうとした。しかし……

「だめだよお兄ちゃん」

アイテールの声が響く。

サディンの手がぴたりと止まった。

その瞬間、辺りの空気がピンと張り詰めたのが解った。

「そいつらと行っちゃだめだよ。ボクと一緒に行くっ?。」

アイテールは言いながらサディンの腕を引っ張る。

サデインはルシエルたちに伸ばしかけた手を引っ込めた。胸の前でぐつと手を握り締め、ルシエルたちを見やる。

「ルシエル、俺は……行けない」

やつのことで絞り出したサデインの声は、震えていた。自分でも、何故こんなに震えてしまうのか解らない。声を出すのが、ひどく苦しかった。

「サデイン！」

ルシエルがその声を遮るように呼び掛ける。一歩だけ、前に足を踏み出した。

「来ないで」

しかし、アイテールはルシエルたちを拒絶する。仕方なくルシエルは足を止めた。

「サデイン、僕の言葉を聞いてください。彼の言葉に耳を傾けてはいけません！」

ルシエルはその場に立ち止まったまま、サデインに語り掛けた。サデインの瞳は困惑したようにルシエルたちの顔を交互に見やり、握り締める手に力が入る。

サデインは今、アイテールの能力に囚われているのだ。そして、このままではルシエルたちも囚われてしまう可能性が高い。

ルシエルは両手を広げて見せた。アイテールに、自分たちが危害を加えるつもりがないことを知ら

せるためだ。

「僕は何もしませんよ。だから、一緒に来てください」

それはアイテールに向けて言った言葉だった。

しかしアイテールは、頑なにサディンの側を離れようとしない。

「やだよお。ボクはこのお兄ちゃんと一緒にいいん……」

アイテールの言葉の途中、その背後に突如ラファエルが姿を現した。

ルシエルの陰に隠れて、テレポートしたのだ。

アイテールが振り向くより早く、ラファエルは彼を無理矢理サディンから引き離す。

「捕まえたよっ」

アイテールに騒がれないよう、口を塞ごうとしたラファエルだったが、それより先にアイテールが声を張り上げた。

「助けてお兄ちゃん！」

次の瞬間、サディンが動いた。

ほとんど何の予備動作もなく背後のラファエルに飛び掛かり、アイテールとラファエルの間に腕をねじ込んで二人を引き剥がす。

ラファエルは後ろに突き飛ばされたが、アイテールはしっかりとサディンに抱きかかえられていた。

「ラファエル！」

「サディン！」

レミエルとルシエルの声が、同時に二人の名を呼んだ。
サディンは困惑した表情のまま、ラファエルから二人へと視線を移す。

「すまない……俺は、この子を守らないといけないんだ……」

サディンの顔は、心なしか青ざめているようにも見えた。

アイテールがサディンにしがみ付き、怯えたように身を縮めた。

「お兄ちゃんはボクの味方だもん。ボクを守ってくれるんだもん。ボクをいじめるあいつらをやっつけてくれるもん」

アイテールはサディンにしがみ付いたままで呟き続ける。

その言葉を聞いて、サディンは歯を食い縛った。

一瞬の逡巡の後に、ルシエルたちに背を向けて走り出す。

ルシエルは咄嗟にその後を追えなかった。

足が動かない。前へ進める気がしない。

代わりにレミエルがサディンを追い掛けた。

レミエルが走りだしてから、ようやくラファエルが起き上がってくる。

「いた……頭打った……」

突き飛ばされた拍子に、後頭部をぶつけたのだろう。

片手で頭を押さえている。

ルシエルが動けないで見ているのを見て取ると、ラファエルもレミエルを追って走っていく。

ルシエルだけが、未だそこから動けなかった。

サディンは早くもレミエルに追いつかれそうになっていた。
翼を持つ者と地を行く者では、移動速度が違う。

このままでは捕まると判断したサディンは、意を決して彼に呼び掛けた。

「来い、カストル！」

その声に反応するように、森の中からカストルが姿を現した。
次の瞬間、サディンは抱えていたアイテールを、崖の下へと放り投げたのだ。

当然、アイテールの身体は崖下へと落ちていく。

「えっ!？」

「わっ、うわあっ！」

レミエルが驚きの声を上げる。

アイテールも同じように驚愕の表情を浮かべた。

しかしそこにカストルが飛び出した。

迷わず崖から飛び降り、空中でアイテールを捕まえる。

体勢を直してアイテールを抱え、カストルはそのまま下へと落ちていった。

レミエルは一瞬だけ迷った。

サディンを見捨ててアイテールを追うべきか、アイテールを見捨ててサディンを保護するべきか。

しかし、その一瞬の間が命取りとなる。

サディンはその一瞬で間合いを詰め、レミエルの鳩尾に鋭い一撃

を叩き込んだのだ。

「……っ！」

声を出すこともできず、レミエルは仰向けに倒れる。

レミエルは元々、戦闘が得意ではないのだ。サディンが相手では、分が悪すぎた。

ラファエルが追い付いたのは、丁度そのときだった。

倒れるレミエルの姿に、目を見開く。

急いでレミエルに駆け寄った。

「サっちゃん！ レミレミに何するんだよ！」

ラファエルの非難の言葉に、サディンはびくりと肩を竦めた。

仲間に手をあげたという罪悪感に襲われる。

それでも、サディンは止めることができなかった。

あの子を守らなければならない。

彼らを倒さなければならない。

最早それは、強迫観念にも似た思いだった。

しかし、それを良としない自分も、確かに存在する。

二つの意思が、サディンの中でせめぎ合っていた。

サディンは大きく息を吐き、ラファエルと対峙する。

他に方法が思い浮かばない。

もう、意思に従うしかないのだ。

「すまないな……俺のこと、恨んでるか？」

「そんなことないよ！　だって、仕方ないことでしょ？
……サっちゃん、あいつに操られてるだけなんだよね？」

自嘲めいた笑みを浮かべるサディンを、ラファエルは見上げる。
抱き起こしたレミエルは、意識こそ失っているものの大事には至
っていないようだ。

サディンが手加減したのだろう。

サディンがレミエルを襲ったのは、自らの意思ではない。

アイテールにそう仕向けられたのだと、ラファエルは信じている。

そう、ラファエルはサディンを信じている。

信じなければならぬのだ。

昔、百年前のあの日、ラファエルはサディンを信じることがで
きなかった。

神の手から守ることができなかった。

サディンはラファエルの友だ。友を信じられない者は、友でいる
資格を持たない。

だから、ラファエルはサディンを信じていなければならないのだ。

サディンは、そんなラファエルの心を理解している。

彼は、彼ならば、自分のことを信じていてくれると。

だからこそ、ここで捕まる訳にはいかない。

サディンは穏やかに微笑んだ。

「ありがとう……だから、ごめん」

言葉と同時に、足元の小石がラファエルに向かって飛んだ。

サディンはただ立っていた訳ではない。

ラファエルが話している隙に、地面の小石に糸を繋げていたのだ。
その小石を、ラファエルに向けて飛ばした。

ラファエルは咄嗟に、片手で目を庇う。
その一瞬で、サディンはラファエルの背後に回り込んだ。

「サッ……！」

ラファエルが気付いて振り返るよりも一瞬速く、サディンの手刀がラファエルの首に放たれる。

衝撃が首から脳へ駆け上がり、視界がぐらりと揺らいだ。

ラファエルは為す術なく、レミエルの上に倒れ込む。

その姿を見下ろし、サディンは一人、来た道を引き返した。

アイテールが崖下に消えてから、ルシエルはようやく前に進むことができるようになった。

動くようになった足を慎重に前に出してみる。

あの意思を押さえ込まれるような感じはしない。

急いでラファエルたちを追おうとするも、再びその足が止まる。

アイテールに阻まれた訳ではない。

ルシエルの視線の先、ラファエルたちの向かった方から、サディンが歩いてきたのだ。

「サディン……ラファエルとレミエルは、どうしたんです？」

ルシエルの言葉に、サディンは薄く笑みを浮かべる。

「別に……少し眠ってもらっただけだ。お前も、俺たちの邪魔をするなら……ただではすまないぞ」

すっとサディンの目が細められた。

ルシエルは思わず息を呑む。

やはりサディンは、アイテールに操られているのだ。

そして恐らく、本人もそれに気付いている。

それでも尚ルシエルの前に立ちほだかるのは、アイテールに抗うことができないからだ。

それが例え神であろうと、アイテールには抗えない。

サディンを助けるためには、多少手荒な方法でも、力づくで捕らえるしかないのだ。

ルシエルは浚面を浮かべる。

アイテールの思惑通りになるのは悔しいが、サディンを守るにはこれしかなかった。

「サディン……あなたをこれ以上、あれの傍に置く訳にはいきません」

「そうか。ならば仕方ないな」

ざっと地面を擦るように足を踏みしめ、サディンが構える。

ルシエルも両手に気を集中する。

二人の間に、緊張が走り抜ける。

数瞬の睨み合いの後、先に仕掛けたのはサディンだった。

力強く地を蹴り、ルシエルとの距離を詰める。

下から伸び上がるような掌底の一撃を、ルシエルは後ろに跳んで躲した。

サディンは攻撃の手を休めず追撃する。

ルシエルの顔のすぐ横を、サディンの手が掠める。

爪の先が引つ掛かり、ルシエルの頬に一本の赤い筋が出来上がる。

「くっ……」

ルシエルは堪らず空に逃げる。

翼を翻し、崖の上へと身を踊らせた。

サディンは下からルシエルを見上げる。

翼を持たないサディンには、空を行くルシエルを追い掛ける術はない。

離れた場所から気弾で攻撃し、躲したところを捕らえるつもりだ。ルシエルの両手がぼんやりと光る。

ぱん！ と手を併せ、ゆっくり開くと、両手の間に光る珠が生まれた。

それをサディンの足元に撃ち出す。

サディンは難なくそれを横に跳んで躲した。

その着地点を狙って、ルシエルはもう一撃を放った。

目の前は崖。左側は先程の一撃が破裂し、砂埃が舞い上がっている。

避ける方向は背後しかない。

そこへ回り込んで捕らえれば良い。

しかし、ルシエルの読みは外れた。

あるうことが、サディンは崖の方へと跳んだのである。

このままでは、崖下へ落ちてしまう。

「サディン！？」

後ろに回り込もうとしていたルシエルは、慌ててサディンを捕まえようと手を伸ばす。

しかし、急な方向転換が間に合わず、ルシエルの手がサディンに届く前に、サディンの身体は崖へと吸い込まれていく。

「甘い！」

落ちながら、サディンは袖の針を取り出し、ルシエルへと投げる。

太い針はルシエルの髪を数本切り飛ばし、空中でぴたりと静止する。

驚愕の表情を浮かべるルシエルの下、崖の間に張り巡らせた糸の上に立ったサディンが、ルシエルを見上げていた。

サディンの能力である操り糸は、強度がある。

その上に乗ることも、充分可能なのだ。

ルシエルは安堵の溜め息を吐きながら、同時に表情を強ばらせた。サディンを捕らえることが、大分難しくなった。

できることなら無傷で保護したかったが、それも適わぬかもしれない。

「サディン、あなたは……隠し芸が多くて困りますね」

「力のない者は、いくつも手の内を隠しているものさ」

にやりと口の端に笑みを浮かべ、二人は再度対峙した。

今度はルシエルから動いた。

更に上昇し、サディンから距離をとる。

サディンが下に落ちることはなくなったが、それもこの糸を巡らせてある崖の中だけだ。

今立っている場所よりも上に昇ることはできないはずである。

これだけ離れると、サディンの糸はほとんど視認できない。

まるで何もない空中に浮いているように見える。

ルシエルは再び両手に気を集中した。

サディンを狙う訳ではない。

周囲の糸を切り、足場を無くすのが狙いだ。

ルシエルの手から、光球が放たれる。

それはサディンの周囲を撃ち抜き、彼の足元にあった糸を切断し

た。

しかしサディンも、ただ黙って立っている訳ではない。すぐに次の糸へと飛び移っていた。

ルシエルも続けて光球を撃ち出す。

しかし、やはり結果は同じだった。

いったい何本の糸を張り巡らせたのか、サディンの足場は一向に失われる気配がない。

このままでは、こちらの方が先に力尽きてしまいかもしれない。

ルシエルがそんなことを考えたときだった。

サディンが何かを引くような仕草をしたのだ。

次の瞬間、ルシエルの足がサディンの方へと引っ張られた。

「な……っ!？」

ルシエルが驚愕の表情を浮かべて、引っ張られている足の方を見る。

そこには、サディンが武器として使う針が付いていた。

先程サディンが投げた針だと、ルシエルは瞬間的に悟った。

ルシエルの攻撃を避けながら、この針の先に付けた糸を、ルシエルの足に絡めたのだ。

慌てて糸を切断しようとするが、遅かった。

その身は既に、崖の間まで引きずり込まれている。

手に気を込め、なんとか糸を切って体勢を直した瞬間、蜘蛛の糸に絡め取られるような、そんな感触が全身を襲う。

サディンの糸が全身に絡み付いていた。

気を編み上げた糸は、とても細く、目に見えない。

しかも、かなり頑丈でちよつとやそつとでは切れはしない。

糸の網から逃れようと藻掻く程、それは複雑に絡み付いてくる。

糸を通して相手を意のままに操るだけがサデインの能力ではない。寧ろ、こうして何重にも絡め取り、敵の動きを封じることこそ、彼の本領と言える。

蜘蛛の巣に捕まった羽虫のように、ルシエルは身動きが取れなくなっていた。

「ちよっ……サデイン、僕、縛られるのは嫌いなんですけど。解いてくれない？」

藻掻き疲れたルシエルは、ずり落ちた眼鏡を直すこともできずにサデインを見上げた。

サデインは彼の前にしゃがんで、口許に笑みを浮かべている。

「駄目だ」

につこり微笑まれてきっぱり断られてしまった。

ルシエルは力なく項垂れる。

いったい自分は何をしに来たのか。

助けに来たはずのサデインに、逆にあしらわれている。

ルシエルは小さく溜め息を吐き出した。

「……まさかサデインに負けるなんて思いませんでしたよ」

ルシエルの呟きを聞いて、サデインは可笑しそうに笑う。

「誰がお前に戦い方を教えたと思ってるんだ？」

力押ししかできない後輩に、俺が負ける訳ないだろう」

そう言われて、ルシエルは言葉に詰まる。

単に力だけならばルシエルの方が圧倒的に強いのだが、戦闘中の

駆け引きとなると分が悪い。

ルシエルは、攻撃力はあるのだが、それだけなのだ。

サデインのように、応用が利く能力ではない。

そのため、手加減しながら相手を牽制し捕獲するような、今回の戦闘にはまるで向いていない。

力ずくで敵を叩き潰すような戦闘ならば、ルシエル以上の適材はいないのだが。

ルシエル自身も、それは重々承知していた。

大天使となつてからは、サデインと手合わせする機会もなく、その間に自分も上手く戦えるつもりになつていたのだが……

やはり、亀の甲より年の功。

サデインには敵わないと思ひ知らされた。

ルシエルが項垂れていると、サデインがいきなり口を開いた。

「ルシエル、俺はこのままあの子と一緒にサタンの城へ行くが、お前たちはついて来るなよ。恐らく、明日の夕方には着くはずだ」

いきなり何を言うのかと、ルシエルは首だけ上げてサデインを見る。

サデインは真剣な表情でルシエルを見下ろしていた。

「サデイン、あなたは……」

ルシエルの言葉を遮り、サデインはそつと手を伸ばす。

その手でルシエルのずり落ちた眼鏡を取り、元の位置に戻してやった。

その間もルシエルは、頭の中でサデインの言葉の意味を考えていた。

何故彼は、今後の足取りを教えるような真似を？

それはつまり……

ずびっし

瞬きもせずにサディンを見上げたまま考え込んでいたルシエルの額から、小気味よい音がした。

サディンが思い切りデコピンを放ったのである。

眉間に赤く痕を付けたルシエルは、一つ瞬きして我に返った。

「サディン……！」

「最善を尽くせ。いいな？」

サディンは最後にそれだけ言ってから立ち上がり、崖の下へと跳んだ。

梯子のように張り巡らせた糸を蹴り、下へ下へと。

その後ろ姿を見送りながら、ルシエルはじたばたと藻掻く。

「これ解いてから行ってください！」

しかし、その声にサディンが戻ってくることはなかった。

サディンが三人の足止めをしている間に、アイテールを抱えたカストルは崖下へと降りていた。

岩壁に手を掛け、落ちる速度を調節しながら飛び降りたため、アイテールには怪我一つない。

しかし、途中で何度も岩壁に叩きつけたカストルの右手は、ひどく損壊していた。

白い手袋はとうに破れて失くしてしまった。

剥き出しになった右手も、数本の指を失くし、掌には大きな亀裂が入っている。

痛みを感じないカストルだからできたことだ。
普通なら、この高さの崖から落ちたら、まず助からない。

アイテールはカストルにしがみ付いたまま、気を失ってしまったらしい。

カストルは彼を地面に下ろし、その傍らに座り込んだ。
アイテールの右手が、カストルの服をしっかりと握り締めていた。

そのままの状態でしばらくすると、サディンが走ってきた。
近くまで来ると、サディンはカストルの壊れた右手に気付いたらしく、かなり狼狽えてカストルの右手を取った。

「ああ、なんてことを……すまない、カストル。こんなことになってしまった……」

カストルの右手をさすりながら、サディンはひどく落ち込んだように頷垂れた。

そんなサディンの頭を、カストルが反対側の手で撫でる。
気に病むなと言うように、優しくサディンの髪を梳く。

サディンはカストルの目を見つめながら、小さく頷いてアイテールを抱き上げた。

カストルの服からアイテールの手をそつと外し、カストルだけ先に行させる。

サディンの推察に過ぎないが、カストルをアイテールから遠ざけておくべきだと考えたからだ。

ルシエルたちのお陰で少し予定が狂ったが、今ならまだ大丈夫だ。
アイテールが目覚まさないうちに、カストルを遠くへ行かせる。
けれど決して離れすぎない位置へ。

こうしておくことが、恐らくだが保険になる。
サディンは未だ目覚めないアイテールを抱いて、サタンの城へと歩きだした。

ラファエルが気付いたのは、サディンたちがその場を離れた後だった。

首の後ろが痛む。

いくら手加減されていたとはいえ、痛いものは痛いのだ。

「いだあゝ……レミレミ起きて」

ラファエルは隣に倒れていたレミエルを揺り起こす。

レミエルが小さく呻き、ゆっくりと目を開いた。

「……あれ？ あたしいつたっ！ お腹痛っ！」

起きた直後から殴られた腹部を押さえて肩を震わせる。

レミエルもラファエルも、ああいった戦闘には向いていない。

サディンが相手では、致し方ないと言える結果だった。

「あんにやろー後で一発殴ってやる……」

亀のように蹲ったまま、レミエルが剣呑なことを呟いた。

首を回し負傷の有無を確認していたラファエルは、そんなレミエルを見下ろしへらへらと笑いながら言う。

「じょーだんキツいなー、レミレミ。サっちゃんが悪い訳じゃないでしょ」

言い終わるとラファエルは立ち上がり、周囲を見回した。
辺りに人影はない。

どうやらサディンはもう行ってしまったのだろうと判断し、ラファエルはがっくりと肩を落とした。

やっと見付けることができたと思ったら、あっさり逃げられてしまった。

ちよつと悔しい。

「あー、もう……一旦戻りましょ。あの変態もほつとけないし」

あの変態とはルシエルのことである。

多少ふらつきながら立ち上がったレミエルに促され、ラファエルもルシエルと別れた地点まで戻ることにした。

二人が、糸に絡まって藻掻いているルシエルを見て大爆笑するのは、この一分後である。

「助けてくれたのには感謝しますよ……でももう、いい加減笑うの止めてもらえませんかね？」

「あははははえひゅっ、ひー、お腹……お腹痛い……！」

「ごっめーんルッシー。でもほんと面白いひゃひゃひゃひゃー！」

腹を抱えて笑いながら転げ回る二人を見下ろし、ルシエルはこめかみをひくつかせる。

ちよっぴり殺意が芽生えそうになるが、そこはどうか我慢しな

ければ。

普段ならば決して見られないものを見られたと、レミエルもラファエルも大喜びだ。

どうにか笑いの発作が治まったラファエルが、笑いすぎて痛みを訴える腹をさすりながら立ち上がる。

レミエルはまだ笑いが止まらないようだ。

糸に絡まって宙吊り状態だったルシエルが、相当ツボにはまっただらしい。

「あー、ひー、苦しい……でも良かった、ルツシーが無事で」

素直にそう言われると怒ることもできず、ルシエルは苦笑いを浮かべて頷いた。

「まあ……でもサディンには逃げられてしまいましたけどね」

残念そうに言うルシエルの肩をラファエルが叩く。
その顔は先程までと変わらぬ笑みだ。

「だーいじょーおぶ。俺たちも逃げられちゃったから」

「どこが大丈夫なんですか」

笑いながらばんばん肩を叩くラファエルを半眼で見下ろし、ルシエルは呆れたような溜め息を吐く。

そこに、ようやく笑いが治まったレミエルが割り込んできた。

「そついえば……ごほっ、あんた何で動けるのよ？ あたしたちが走りだしたときには、動けなかったじゃない」

笑いすぎて息は上がっているが、頭の中はしっかりと切り替えが
できているようだ。

レミエルに指摘されて初めて、ルシエルもそのことに気付いた。

「そういえば……一定時間で効果がなくなるものなのでしょうか？」

「えー？ でも悪魔の人たちのケガ、治らなかったよねえ？」

ラファエルがかくんと首を傾げて会話に交ざってきた。

ルシエルとレミエルはその言葉を聞き、怪我をした悪魔たちの様
子を思い出す。

彼らの怪我もアイテールによるものなのだが、一定時間で勝手に
治るような様子はなかった。

ルシエルの動きを封じたのも、悪魔たちに傷を負わせたのも、ア
イテールの能力である。

なのに、双方に生じているこの差は何なのだろうか。

サタンからアイテールの能力について、もっと詳細を聞いておけ
ばよかったと、多少後悔した。

敵の能力については、いくら知っておいても多すぎるということ
はない。

三人は、ひとまずサタンの城に戻り、対策を練ることにした。

城の前まで飛んできると、入り口の前に誰かが立っているのが見
えた。

近付くにつれ、その姿がはっきりと見えてくる。

そこに立っているのは、ミカエルだった。

腕組みして、修羅か羅刹かと見紛う形相で、飛んできるとルシエル

たちを見上げている。

「……うわっちゃ……ミカさん怒ってるよ……」

「そりゃそうよね……勝手に出てきちゃったんだし……」

「いやあ、こんなに怒った顔を見るのは久しぶりですねえ」

三人は幾分青ざめ引きつった表情で顔を見合わせ、やがて覚悟を決めたのか、ミカエルの許へと降下していった。

「お前たち……今までどこで何をしていた？」

降り立った瞬間にドスの利いた声で問われ、三人は思わず後退った。

ミカエルの全身から溢れる怒気で、周囲の景色が揺らいで見えるような錯覚さえ覚える。

「ちょっと、あんた言いなさいよ!」

「嫌ですよ何で僕が!」

「ルツシーにしかできないよ」

「僕よりあなたの方が古株でしょう!？」

小声でこそこそ言い合っていると、ミカエルに思い切り睨まれてしまった。

三人は慌てて口をつぐむ。

レミエルとラファエルの視線に押され、仕方なくルシエルが口を

開いた。

「すみません。サディンを捜しに行ってたんです」

大方予想はしていたのだろう。

ルシエルの言葉を聞いても、ミカエルの表情に変化はない。
冷やかな目で三人を見遣り、静かに口を開く。

「アビスの集落へ行き、救助活動を手伝うよう言ったはずだが？
ラファエル」

ラファエルの移動能力がなければ、迅速な対応は難しい。
広いアビスでは、彼の力が必要だった。

ラファエルはしゅんと項垂れて肩を落とした。

「怪我人が他にいないか、確認するよう頼んだはずだ。レミエル」

集落を離れている住人がいないとも限らない。

彼女の遠隔視能力は、そんな人々を捜すために必要だった。

レミエルは背筋を伸ばし、直角に礼をする。

「すみませんでしたっ！」

最後に、ミカエルはルシエルに目を向けた。

「お前は邪魔だから帰れ」

「僕の扱い酷くないですか！？」

あっさり切り捨てられ、ルシエルは不満顔で抗議した。

実際、救助活動に破壊の力はいらないのだが。

ミカエルはルシエルを無視して、ラファエルとレミエルに、城へ戻って天使たちの手伝いをするよう命じた。

「で、でも……」

「人手が足りないのだ。急いで戻れ」

渋るレミエルたちの背を、軽く押して城に向かわせる。

レミエルは素直に城へと足を向けたが、ラファエルはそれでも動こうとしなかった。

「ミカさん、サっちゃんは……！」

「こちらで探す」

「違うよ！ サっちゃんいたんだよ！」

ラファエルの言葉に、一瞬ミカエルは眉をひそめた。

サディンを発見したと言うのに、彼の姿がどこにもないからだ。

サディンを発見したが、アイテールに阻まれて保護できなかったのか。

それとも、サディンが自らの意思で彼らから離れたのか。前者ならば仕方ない。しかし後者ならば……

「ひとまず城に戻れ。詳細はそちらで聞く」

ミカエルは三人と共に、サタンの城へと入っていった。与えられた一室で、テーブルを囲んで車座に座る。

サデインを発見したときのことを、三人は口々に語りだした。

「あのね、連れ戻そうとしたんだけど、あの子が一緒に行っちゃダメって、邪魔したんだ」

「二時間くらい前に、私がここから北西に二十キロ程の崖に、サデインと標的を発見しました」

「僕たちは標的に足止めをくらってしまいました」

話し口がまったく違う三人の言葉を、ミカエルは頭の中で整理しながら聞く。

大まかな流れを理解したところで、改めて三人の顔を眺めた。

「つまり、サダルメリクを発見したが、標的が邪魔をして連れ戻すことができなかった、と」

ミカエルの言葉に、三人は同時に頷いた。
しかし、ミカエルはそんな彼らを咎めるように、鋭い眼光で射ぬく。

レミエルとルシエルは、思わず背筋を伸ばした。

「……まだ言っていないことがあるだろう。」

お前たちの邪魔をしたのは、本当にアイテールだったのか？」

ミカエルの静かな声が、さほど広くもない室内に響いた。
ルシエルは思わず息を呑んだ。

サデインと一戦交えたことを伏せているのを、見破られている。
ルシエルは気付いていなかったが、その髪にサデインの糸が一本、絡み付いていたのだ。

それをミカエルは見逃さなかった。

「お前たちと直接戦ったのは、サダルメリクだろう。何故それを報告しない？」

冷静なミカエルとは対照的に、声を大きくしたのはラファエルだった。

「サつちよんは、サつちよんは悪くないよ！ あの子に言われて、無理矢理、仕方なくやったんだよ！」

思わずテーブルを叩いて立ち上がり、ミカエルの方へと身を乗り出す。

レミエルが驚いたように肩を震わせたが、ラファエルは気付かずミカエルに詰め寄った。

「ねえ、ミカさん、サつちよん悪くないよね？ 罰受けたりしないよねえ！？」

ルシエルやラファエルが心配していたのは、サディンがカエルスを裏切ったと思われるのではないかということだ。

アイテールの側にいることで、カエルス、アビス双方から敵対視される可能性があった。

もしもサディンの行動が敵対行為であると判断されれば、彼はまた処断されてしまうかもしれない。
それだけは避けたかった。

だが、それはミカエルも同じだ。
理不尽な処刑など、二度とやってはいけない。

「落ち着け。サダルメリクの行動が、アイテールの影響であることは私も予想している」

ラファエルを宥めるように、その肩を片手で押し返し座らせる。不安そうに己を見つめる三対の目を順に見返し、ミカエルはゆっくりと口を開いた。

「現時点では、サダルメリクはアイテールに洗脳された状態である
と見ている。

彼の保護を最優先にし、安全を確保した上で標的の捕獲を実行する。

そのときは私が出る。お前たちは己の任務に戻れ」

ミカエルの説明を聞き、ラファエルはようやく安堵の息を吐く。
ミカエル自身がサディンの保護に当たってくれるのなら、これ程心強いことはない。

ラファエルとレミエルは、悪魔たちの救援のために部屋を出ていった。

「ミカさん」

不意に扉から声を掛けられる。

ミカエルがそちらに目を向けると、今し方出ていったはずのラファエルが戻ってきていた。

ラファエルは足早にミカエルに歩み寄り、彼の手を取る。

「絶対だからね。約束だよ。サっちゃんのこと、助けてね」

ラファエルは早口にそう言いながら、強引にミカエルの小指に己の小指を絡めた。

軽く手を上下に揺らし、指切りをする。

ミカエルが咎めるような視線を送る前に、ラファエルは部屋を出て行ってしまった。

部屋の外で、ラファエルは誰にも聞こえない程の小声で呟く。

「大丈夫……俺は信じてるから」

そして己を奮い立たせるように、両手で自分の顔を叩き、治療班を悪魔たちの集落へ移送するべく、広間の方へ走りだした。

部屋の中では、無理矢理に約束させられてしまったミカエルが、わずかに困惑したように小指を見つめていた。

ラファエルは解つていて『約束』したのだろうか。

ミカエルは先程、「現時点では」と言ったのだ。

それはつまり、今後のサディンの動向次第で、彼を敵とみなす可能性があるということを示している。

「先手を打たれてしまいましたね」

困惑するミカエルを見ながら、ルシエルはくすりと笑った。

ルシエルもまた、そのことに気付いている。

ラファエルの『約束』が、結果として、サディンを討つというミカエルの意思を揺らがせたことに、ひそかに安堵していたのだ。

ミカエルは笑みを浮かべるルシエルに目を向け、今まで見つめていた小指を解しつつ、テーブルに手を置いた。

そのまま咳払いを一つ。

「さて、サダルメリクを発見したときのことを、詳しく話してもらおうか。正確に、事実を」

真剣な表情でルシエルを見遣り、耳を傾ける。
ルシエルは知らず固唾を呑んだ。

この説明で、ひよっとしたらサディンは敵対視されてしまうかもしれない。

しかし、ここで虚偽を述べることは許されない。

ルシエルは慎重に、先程の出来事を説明し始めた。

「……………」

ミカエルは黙ってルシエルの話を聞いていた。

話が終わっても、しばらくの間は無言で目を閉じていた。

ルシエルにしてみると、その沈黙が意味あり気で怖いのだが。

何か、サディンの不利になるようなことを言ってしまったのかと、

ルシエルは息を呑んでミカエルの言葉を待った。

やがて、ミカエルは静かに目を開く。

ルシエルを正面から見据えて、はっきりと言った。

「サダルメリクは、己の意思でアイテールに味方している」

ルシエルは思わず耳を疑った。

それはまるで、サディンが自らアイテールの手を取ったようではないか。

サディンはアイテールに操られているはずだ。

そうでなければ……

「……………何故です？」

ルシエルの唇が、かすかに震えている。

その目には、怒りにも似た色が浮かび、じっとミカエルを見据えていた。

ミカエルは冷静に話を続ける。

「まず、アイテールの能力だが、本人の意識がなくなれば、一時的に効果が弱まるのだそうだ」

それは、ルシエルたちが無断で出ていった間に、サタンから聞いた情報だった。

ルシエルの身体の自由を奪ったのは、対象の精神に働き掛ける力だ。

この場合、能力者本人の意識がなくなれば、効果が薄れ、それ以降自分の意思で身体を動かせるようになる。

ルシエルたちは知らないが、アイテールはあるとき、崖から落ちていく恐怖で気を失っていた。

そのため能力が半減し、ルシエルは動くことができたのだ。

そしてそれは、アイテールを守るよう洗脳されていたサディンも同じだ。

あるとき、サディンはアイテールと別れて、ルシエルたちと共に行くこともできたのではないか。

しかし、それでもルシエルたちの足止めをして、アイテールの許へ向かった。

それは即ち、サディンが自らの意思で、アイテールの側にいることを選んだということだと言える。

「まさか……」

ルシエルは驚きを隠せないようだった。

確かにあのとき、アイテールからの支配は感じられなかった。

それは恐らく、サディンにも言えることだろう。

やはり、サディンは己の意思でアイテールの許へ戻ったと考えた方が自然だ。

「ですが、それだけでサディンを敵とみなすのは……」

抗議するルシエルの言葉に、ミカエルは頷いた。

「ああ。私も、サダルメリクが我々を裏切ったとは思っていない」

思ってもみなかったことを言われて、ルシエルはわずかに眉をひそめた。

しかし、次のミカエルの言葉で、サディンは敵になった訳ではないと確信した。

「明日の夕方。恐らくそれが標的捕獲のチャンスだ」

それは、ルシエルも考えていたことだった。

サディンが去り際に、わざわざ今後の足取りを教えたのは、アイテールを捕獲するための準備をしると言っているのではないかと。

サディンは言っていたではないか。「最善を尽くせ」と。

恐らく彼自身、アイテールの能力に薄々気付いていたのだろう。

アイテールの『言葉を現実にする』という能力に。

しかし、気付いたときにはもう、アイテールの言葉に支配されていたのだ。

アイテールを守りつつ、アイテールを捕獲するためルシエルたちに協力する。

そのためには、大きな戦力が必要。

あえてアイテールと行動を共にしたのは、自らアイテールの動向を見張り、上手くサタンの城へと誘導するため。

ミカエルは、ルシエルの話からそう判断したのだ。

「再びアイテールを封印できるのは、サタンかジュピター様だけだろう。」

その場で無理矢理アイテールを押さえ込まなかったのは、正しい判断だ」

アイテールの口を塞げば、『言葉を現実にする能力』は防げるかもしれない。

しかし、サタンでさえ知らない未知の力を秘めている可能性もあるのだ。

標的の捕獲には、万全を期した方が良い。

何しろ相手は、サタンとゼウスが二人がかりで、ようやく封印したような人物なのだから。

ジュピターが来たとしても、対等に渡り合える確率は五分五分とあったところだろう。

サタンたちアビスの住人が動けない今、天使たちがジュピターをサポートせねばなるまい。

神同士の戦いに、どこまで天使の力が通用するかは解らないが。

「アイテール捕獲の際には、お前にも働いてもらおうぞ」

「ええ」

ミカエルの言葉に、ルシエルは大きく頷いた。

サデインとアイテールは、手を繋いで荒野を歩いていた。

崖下の道を辿って行くと、すぐに森の出口が見え、その頃にはアイテールも目を覚まし、今は己の足で歩いている。

この広い荒野を過ぎれば、サタンの城に着く。

恐らく、ルシエルたちが待ち構えているだろう。

戦闘になる可能性は限りなく高い。

サデインは隣を歩くアイテールを見下ろした。

アイテールは左足を引きずりながら、ゆっくり歩いている。

その姿を見ていると、この手で守らなければという思いが込み上げてくる。

先程アイテールが気を失ったことにより、一時的に洗脳は弱まったのだが、どうしてもアイテールを見捨てることはできなかった。

近くで直接アイテールの言葉を聞きすぎたせいだろうか。

アイテールが実の弟のように思えてしまう。

その思いが深層心理にまで食い込み、離れないのだ。

こうなってしまうと、もう己の意思とは関係なく、アイテールを守ることを優先してしまうだろう。

戦闘になったとき、この手で仲間を傷つけてしまうのだろうか。

サデインは、それが怖かった。

もしそんなことになったら、自分はどうすれば良いのだろうか。

そんなことを考えながら歩いていて、思わず険しい顔つきになってしまったようだ。

アイテールがサデインを見上げて、わずかに不安そうな表情にな

る。

「どうしたの？　どこか、痛いのか？」

心配そうなアイテルの声を聞いて、サデインは慌てて笑みを取り繕う。

「いいや、大丈夫だ。少し、考え事をしてただけだよ」

サデインが笑みを浮かべたのを見て、アイテルは安心したように頬を弛ませる。

視線を前に戻し、遙か広がる茶色の地平線を見つめた。

「ボクね、エレボスを見付けたら、皆に仕返ししようと思ってたんだ」

前を向いたまま、アイテルは喋り続ける。

サデインは黙ってそれを聞いていた。

「ボク、サタンもゼウスも嫌い。ボクを閉じ込めるんだもん」

外見通りの、子供っぽい言葉。

アイテルは精神が力に追い付いていないのだと、サデインは感じた。

この世の理さえひっくり返してしまえる程の力を持ちながら、その危うさに気付いていない。

このまま喋り続けていたら、またいらぬ言葉を口にしてしまうかもしれない。

サデインはさりげなくアイテルの言葉を遮った。

「静かに。あんまり喋ってる、魔物に見付かるぞ」

「そっか。しー、だね」

アイテールは素直にサディンの言葉に従った。

この子供は、実はサディンにはあまり逆らわない。

慕ってくれているということなのだろうか。

サディンはちらりとアイテールを盗み見た。

しっかりサディンの手を握り、穏やかな表情で歩いている。

隙だらけだ。

今なら、当て身でもして気絶させることもできそうな気がする。

そう思えるのだが、行動に移すことはできなかった。

仕方なく、サディンはアイテールを連れて、黙々と目的地であるサタンの城を目指す。

できないことをあれこれ考えるより、今自分ができる最善のことをするべきだ。そう考えたからだ。

そのために、まずやらなければならないことは何か。

それは、アイテールとより親密になることだ。

アイテールから信頼を得ることができれば、上手くコントロールできるだろう。

現に今、アイテールはサディンの言葉に従って、口をつぐんでい

る。

できることならば、この子を説得して穏便に済ませたい。

歩きながら、サディンは必死にアイテールを宥める台詞を考えた。

地の底の国に浮かぶ、偽りの太陽が消える。

暗くなりかけていた天井は、完全に夜の藍色に染まった。

この偽りの空もサタンの力によって創られているのだが、本人が負傷している今でも正常に夜空を描いている。

夜になっても、アビスのあちらこちらで救助活動は続いていた。そんな折、カエルスからサタンの城へ、訪問者が現れた。

「不思議……こちらに来るのは初めてなのに、私はこの景色を覚えているような気がします」

新緑色の長い髪をなびかせて、ジュピターは転移の魔方陣から足を踏み出した。

「お待ちしておりました」

彼女の前に立ったミカエルが、深々と頭を下げる。

明日訪れるはずだったジュピターが、予定を早めて訪問してきたのだ。

ジュピターの背後には、医療の神であるアスクレピオスもいる。

天使たちだけでは手が足りないとの判断で、彼が呼ばれたらしい。

ミカエルがルシエルたちから話を聴いている間に、サタンがジュピターに連絡を取ったのだそうだ。

ジュピターとアスクレピオスはミカエルに案内され、サタンの待つ部屋へと向かった。

一際大きなその部屋で、サタンは待っていた。

天使たちの治癒で傷自体はすっかり消えたのだが、未だ貧血にも似た怠さが抜けきっていない。

ジュピターたちが部屋に入っても、サタンは椅子に腰掛けたまま

で唇を開いた。

「よく来たな」

「他ならぬあなたの頼みですもの」

立って挨拶もしないサタンに気を悪くした様子もなく、ジュピターは静かに微笑んだ。

アスクレピオスはわずかに不快感を表情に出したが、特に何も言わずにジュピターの後ろに控えている。

ミカエルがそつと扉を閉めると、サタンは現状を語りだした。

「天使どもの報告によると、各集落で数人の悪魔の死亡を確認したらしい」

そう告げるサタンの口調は淡々としている。

逆にジュピターの方が、悲しげに表情を歪めた。

「そうですね……せめて、次の輪廻では健やかにあるよう、お祈り申しあげます」

そう言つて静かに目を閉じるジュピターの隣に、アスクレピオスが並んだ。

無表情にサタンを見下ろし、蛇を象った杖で軽く床を叩く。

乾いた音が部屋の中に反響した。

「面倒だからさつさと終わらせたい。俺が治すのは例の悪魔どもだけで良いんだな？」

「貴様がもう少し働き者だったら、他の悪魔と幽鬼たちもお願いし

たいところなのだな」

サタンの言葉にアスクレピオスは小さく鼻を鳴らした。

アビスにも、カエルの天使と神のような関係がある。

ゼウスにより墮とされた、元の世界の人々を悪魔。

この世界の魂たちが変化した者を幽鬼と呼んでいる。

この区別はカエルの神が定めたものだが、アビスに住む者たちは、面倒だからという理由で、全員が悪魔と名乗っていた。

そして悪魔の中には、サタンに匹敵する強さの者が数人いるのだが、互いに仲が悪く、アビス各地に散らばっているのだ。

ここ数百年は交流がないという。

しかし放っておく訳にもいかず、今回、サタン自ら彼らに連絡を取った。

彼らも同じく、アイテールの影響を受けている。

もし彼らに大事があれば、その配下の悪魔たちが何をするか解らない。

血気盛んな悪魔を内包するアビスの秩序を守るためにも、彼らに死なれては困るのだ。

アスクレピオスはしばし黙り込んでいたが、ややあって口を開いた。

「報酬次第では考えてやっても良いぞ」

サタンは口の端をにやりと歪め、鷹揚に頷く。

「望むものを一つくれてやろう」

「二言はないな？」

「当たり前だ。俺様を誰だと思っている」

双方ふてぶてしい態度を崩そうともせずに言葉を交わす。
アスクレピオスは杖を片手に、颯爽と部屋を出ていった。

「良いのですか？ そんな約束をして」

二人のやり取りを見ていたジュピターが、小さく微笑う。
サタンは「構わん」と言うようにひらひら手を振った。

「さて、と……例の坊主のことだが……」

急に真剣な顔で話し始めたサタンに、ジュピターも口許を引き締める。

明日の夕刻、サデインがアイテールをこの城の前まで連れてくるはずだ。

そのときどう対応すれば良いのか、ミカエルを交え、ジュピターとサタンは慎重に話し合った。

そして翌夕、神と天使たちは、サデインとアイテール、二人を迎え撃つことになる。

成長

岩肌に囲まれたこの空間で、太陽はどこに沈んでゆくのだろうか。サデインはふと、傾いた陽光を見て考えた。

創られたこのアビスがどれ程の広さなのかは解らない。

ひょっとしたら世界の反対側まで続いている、あの太陽も本物と同じように、ぐるりとアビスを一周しているのかもしれない。

いくら考えたところで、真実を確認しなければただの想像。

嘘か誠かを判断するには、判断するに足る知識が必要となる。

自分には、そのための知識が足りない。

これからアイテールを裁こうとしている神たちにも、それは言えるのだ。

なぜこんな子供が裁かれなければならないのか？

もっと別の方法もあるのではないだろうか？

それを知るためにも、知ってもらうためにも、今はサデインが動かなければならない。

地獄を治める王の居城は、目前に迫る。

同時刻、サタンの居城の前には、ジュピターとサタンが並んで立っていた。

その後ろに控えるのは二対の翼。ミカエルとルシエルだ。

他の天使や悪魔たちは、城の中で待機している。

救援のために来た天使たちは戦闘に向いておらず、ましてや負傷している悪魔たちを戦わせる訳にはいかない。

それぞれの顔には、各々の覚悟が刻まれている。

彼らが見据える荒野の向こうから、小さな人影が二つ、徐々に近付いてきていた。

サデインの背を、緊張の汗が滑り落ちる。

話し合いだけで解決できれば良いが、自分が話している間に、この子供が何を口にするか解らない。

ここに着くまでに、決して口を開くなど言い聞かせてはきたが、それは絶対の保証にはならない。

アイテールが戦闘を指示するような言葉を出した瞬間、サデインはアイテールに支配される兵士になってしまう。

それだけは避けたいと思いながら、サデインはアイテールの手を引いてジュピターの前で立ち止まった。

「よく……無事でいてくれました」

ジュピターの口から、安堵の息が漏れる。

優しい微笑みと温かな声は、この荒涼とした大地に見合わない。

天の光が、木漏れ日となって降りてきたかのようだ。

ジュピターの声には、アイテールとはまた違った、不思議な力がある。

聞く者すべてが安心感を得られるような、そんな声だった。

彼女の声を聞いたサデインも、また同じだ。

サデインはジュピターの前に跪き、深々と頭を垂れた。

「ご心配をおかけいたしました」

サデインは表情を殺して無感動を装っているが、内心では泣きだしたい程の激情が渦巻いていた。

すべてを放り出してジュピターに預けてしまえたら、どんなに心

が軽くなるだろう。

しかし、そんなことができるはずもない。

己には、この子供を守らなければならぬ義務がある。

サディンとは対照的に、怒りを露にしているのはアイテールだ。その目はジュピターを……いや、すぐ隣に立つサタンを凝視している。

今にも呪咀の言葉を口にしような形相で、それでもただ黙っているのは、サディンとの約束があるからである。

これから先、何が起きようとも一切手も口も出さず黙っていてほしいと、サディンに頼まれたのだ。

神や悪魔たちは許せなくても、彼だけは特別。

彼の頼みなら、聞いてやってもいいと思っている。

アイテールから放たれるプレッシャーを受けて、言葉を失くしているのは、神と悪魔の背後に控える二人の天使だ。

目の前に友の姿を見ながら、一歩も動けないでいる。

彼らはアイテールが何もしないよう、祈ることしかできなかった。

「サディン、さあ、顔を上げてください。あなたが無事だったことが何よりです」

ジュピターの柔らかな声が言葉を紡ぐ。

なるべくアイテールを刺激しないよう、慎重に言葉を選んでいるのが、サディンにも解った。

神も恐れているのだ。

アイテールの力を。

サディンは静かに顔を上げて立ち上がる。

サディンの袖を、アイテールが強く握り締めた。

サディンは目だけ動かしてアイテールを見下ろす。
アイテールは未だ、じっとサタンを睨んでいた。

「この子供は……」

「その子は私たちが保護しましょう。さあ、こちらへいらっしやい」

サディンの言わんとしていることを察知して、先にジュピターが口を開いた。

サディンはほっと安堵の息を漏らす。

ジュピターたちが問答無用でこの子供を殺すのではないかと、いらぬ心配をしていたようだ。

ジュピターの方へ踏み出した足は、しかしアイテールの声で遮られた。

「うそつき」

ピンと場の空気が張り詰める。

そこにいた誰もが、表情を強ばらせた。

「あのお姉ちゃん、うそつきだ。ほんとにボクのこと、また封印するつもりなんですよ？」

「お前……っ！」

慌ててサディンがアイテールの口を塞ごうとするが、既に遅かった。

アイテールはもう言葉を口に出している。

アイテールは一層強くサディンの袖口を握り締めた。

「私は……」

否定しようと口を開いたジュピターだったが、その声は途中で小さくなり消えた。

アイテールの言葉の魔力。

ジュピターは今、真実が言えなくなっている。

如何な言葉を並べ立てようと、虚偽しか口にできないのでは、気持ち伝えられるはずもない。

「口を挟むなと言ったはずだぞ！」

怒りが混じったサディンの声に、アイテールはびくつと肩を竦める。

だが、すぐに拗ねたような口調で異を唱えた。

「だって……」

「頼むから、俺が話し終わるまで待っててくれ」

アイテールはしばらく口を尖らせて黙っていたが、ようやく一つ頷いた。

サディンもやっと安堵の表情を見せる。

「ん、良い子だな」

そう言っサディンはアイテールの頭を撫でた。

アイテールは照れたように撫でられた頭に手をやり、片足で地面の小石を転がしている。

その様子を見て、サディンは再びジュピターたちに向き直った。

「あなた方はこの子供を危険視しているようですが、俺にはそうは思えない」

サデインがゆっくりと語りだした言葉を、神たちは黙って聞いていた。

しかし、その表情には多少なりとも驚愕の色が窺える。
サデインはそれに気付きながらも、話を進めた。

「この子の言葉に力があることは解っています。ですが、それだけで封印するなんて……」

「甘い小僧。貴様は何も解っていない」

サデインの言葉を遮り、今まで黙っていたサタンが口を開いた。

「そのガキの言葉一つで、この世界そのものが消滅することもあるのだぞ。」

臭いものに蓋をするようなやり方は、俺様も好かん。だが、そいつだけは別だ」

いきなり本音を言いだしたサタンに、ジュピターたちの視線が集まる。

なるべくアイテールを刺激しないようにしてきたのに、急に態度を変えたのだ。

皆が途惑うのも当然である。

しかし、サタンのとった行動は、仕方のないことだった。
アイテールの言葉によって、ジュピターは『うそつき』になってしまっている。

その状態のジュピターがいくら誠心誠意交渉を行ったところで、

信用できるものではない。

他のメンバーにしても、サタンはアイテールに毛嫌いされているし、実力的に神に劣る天使では、対等に話し合うことすら難しい。精神的にまだ未熟なアイテールは、いつ癇癪を起こすか解らない。そのときに、力づくでも押さえ付けられる者でなければならぬのだ。

ならば何故、ルシエルとミカエルがこの場にいるのか？

アイテールを押さえるためではない。

別の理由があるからだ。

そんな四人を睨むように見上げ、アイテールは怒りを露に叫んだ。

「やつぱりそうだ！　そうやって、またボクのこと封印するつもりなんでしょ！？

お前らなんか嫌いだ！　ボクの味方はお兄ちゃんだけでいい！」

アイテールの声が、波紋のように広がっていく。

それはそこにいる者のみならず、世界中にまで浸透する大きな波となるのだ。

アイテールは気付いていない。

己の言葉で、己の立場を危ういものに行っていることに。過ぎたる能力。

その力を使いこなすには、彼の精神は余りに幼いのだ。

それ故、誰もがアイテールを危険視する。

彼一人を除いては。

「何故……それしか方法がないんですか……？」

静かにそう言ったのは、サディンだった。

アイテールを庇うように前に出て、サタンを非難するような目で見つめる。

その表情には途惑いがあった。少なからず恐怖もあった。

しかし、サディンはアイテールを擁護する。

この子の味方になれるのは、自分一人なのだから。

「もう少し、考えていただきたいんです。他に、何か、この子が苦しまなくて済む方法が……」

「無いな」

必死に言葉を紡ぎ出すサディンを、サタンの一言が遮った。

「言葉を紡ぐ声を奪い、言葉を綴る身体を奪い、言葉を生み出す心を奪えばいいのか？」

はっ、貴様の方が余程残酷だな」

「違う！ この子が言葉を選ぶよう周囲が教育すれば……」

「待てんな。いつ爆発するか解らない爆弾を抱えていると？ 貴様は良くても、他の連中はその恐怖に耐えられんだろうよ」

確かに、サタンの言うことは正しい。

それはサディンも理解している。

誰もが、いつか来る終末を忌避すべしと思うだろう。

そのために、危険因子を持つものは排除しようとするだろう。

だがそれでは、排除される側の意思はどうなるのだ。

危険な可能性があるから排除しよう。

それは裏を返せば、必ずしも危険であるとは言いきれない、ということだ。

アイテールがこの世の滅びを口にするかもしれないと、あるかどうか解らない未来に怯え、一人の子供の未来を奪おうとしている。アイテールがこの世界を滅亡させるかどうかなど、ただの可能性でしかない。絶対であるとは限らないのだ。

サデインは、それが納得できなかった。

根拠のない可能性を恐れて、罪もない子供から自由を奪うなど。

或いは、サデインはアイテールと自分の境遇を、重ねていたのかもしれない。

かつて、なんら根拠のない可能性を危惧し処刑された自分と、今まさに処断されようとしているアイテールとを。

アイテールの言葉に操られているだけでなく、そのことも、サデインがアイテールを守ろうとする一因なのだろう。

サデインは必死にサタンたちを説得しようとする。

「この子に力の危険性を教えて、自分の意思で力をコントロールできるようにすればいいでしょう!? きちんと教えれば、この子は理解してくれる!」

しかしサタンは、それにすら耳を傾けない。

「そのガキが理解する前に、貴様が殺されるだろうよ」

そう言い放ち、軽く指を鳴らす。

たったそれだけで、アイテールの足下から炎が噴き出した。

「うわぁっ お兄ちゃん!」

咄嗟に、アイテールはサディンに助けを求める。

幼い彼では、突発的な事態に対処できる言葉を、思い描くことができないのだ。

すぐ傍にいる、サディンを呼ぶことしかできない。

サディンはアイテールの声を聞くと同時に、怯みもせずに炎の中に飛び込んだ。

アイテールを抱えて、立ち上がる業火から飛び出してくる。

サディンに抱えられたアイテールは、憎しみに満ちた瞳でサタンたちを睨んだ。

ジュピターたちも同時に動いた。

最早こうなってしまうては、力づくでアイテールを黙らせるしかない。

ジュピターは複雑な表情で、祈るように指を組む。

サディンの足下から、絡み付くように緑の蔦が生えてきた。

それは瞬時にサディンの自由を奪い取る。

その隙に、サディンとアイテールを引き離そうと、ルシエルとミカエルが飛び出した。

この二人は、サディンを押さえるためにここにいたのだ。

アイテールを封じることができるのは、サタンとジュピターしかない。

その間、サディンが封印術を妨害しないよう、押さえ付けておく役が必要だった。

それに選ばれたのが、この二人だ。

なるべくサディンを傷付けないよう、蔦が動きを封じている間にアイテールの口を押さえ、無理矢理引き離すつもりだった。

しかし、二人がアイテールを捕まえるより、アイテールが口を開

く方が若干速い。

「こんな草、枯れちゃえ！」

アイテールの言葉と同時に、サディンの足を絡めとった蔦は枯れはてた。

サディンはすぐに蔦から抜け出し、アイテールを抱いたまま後ろに跳ぶ。

二人の手は空を切った。

怯えたようなアイテールの声が響く。

「お兄ちゃん、あいつらやつつけて！　ボクを守って！」

その言葉を耳にした全員の顔に、緊張が走る。

ついに、言われてしまった。

アイテールからサディンへ、攻撃命令が。

抗えない言葉の波紋に、サディンの心が揺らされる。

ルシエルたちを傷つけないのに、身体は自然と迎撃態勢になっていた。

ミカエルたちと戦いたくないのに、頭は如何にして二人を攻撃するかを考え始める。

心のどこかで止めると叫ぶ自分がいながら、サディンはアイテールの支配に逆らえなかった。

とにかく動き回って二人の天使から距離をとり、同時に、動かないジュピターとサタンへの警戒も怠らない。

サタンとジュピターは、先程からじっとサディンの動きを目で追っている。

恐らく、何らかの罠があるのだろう。

追いかけてくるルシエルとミカエルには、サディンに危害を加えるつもりはないらしく、積極的な攻撃はしてこない。

しかしだからと言って、気を抜くことはできない。

サディンはアイテールを、守らねばならないのだから。

一方、ルシエルたちも焦っていた。

極力サディンを傷付けずに動きを止めたいのだが、それが中々難しい。

ルシエルは手加減が苦手だし、ミカエルは攻撃そのものが苦手科目なのだ。

サディンの動きを阻むべく、不可視の障壁を作っているのだが、サディンはそれらをほとんど躲している。

「探查能力を有する者に、障害物は無意味か」

「構いませんよ。とにかく動き回らせて、体力が尽きたところを狙いましょう」

ミカエルとルシエルは、互いに小声で会話する。

二対一、しかもサディンはアイテールという荷物を抱えているのだ。

どちらが先に体力が尽きるかは明白だ。

そこを狙えば、如何にサディンが体術に長けていようと、逃げることはできないだろう。

二人は持久戦を覚悟で、手緩くサディンを追い詰めていく。

サタンたちが動かないのも、それを狙っているからだ。

サディンという足がなければ、身体が半分封印されたままのアイテールは、満足に動くこともできない。

そうなれば、多少は楽に封じられる。

実際、以前アイテールを封じたときは、サタンが押さえ付けてゼウスが術式を発動させたのだ。

動けないようにしてしまえば、後は言葉にだけ注意を払えばいい。

しかし、今回ばかりはサタンの失態だった。

相手が半分封じられた不完全体だと、少しばかり油断していたのだ。

身体は封じられていても、その口までは封じられていない。

いくら天使二人がかりで追い詰めていると言っても、完全にアイテールを押さえ付けた訳ではないのだから。

サディンにしがみ付きながら、アイテールは高らかに言った。

「お兄ちゃんはお前らなんかより強いもん。ぜったい負けないんだから」

その言葉と共に、サディンの心臓が激しく脈打った。

身体を駆け巡る血が熱い。

体内の熱を放出するように、サディンは自らの能力を振るった。

そのことに最初に気付いたのは、サタンだった。

「しまった！ 小僧から離れろ！」

咄嗟に上げた声に反応して、ルシエルとミカエル、二人の動きが一瞬止まる。

これまた反射的にサディンたちから距離を取ろうとするが、少し遅かった。

アイテールによって強化されたサディンの力は、二人を遥かに上回っていたのだ。

瞬時に紡ぎ上げた糸が、二人の天使に放たれる。

より強度を増した糸が、二人の腕を、足を、胴を絡め取る。

はつとして後ろに跳ぶが、既に遅い。

サデインは片手で糸を思い切り引いた。

複雑な綾のように絡み合った糸は、ルシエルとミカエルをそれぞれ別の方向へと引きずる。

滑車の原理を応用し、少ない力でも充分効果を発揮するよう、あの短時間で周囲に糸を張り巡らせていたのだ。

「くっ」

「また……！」

ミカエルとルシエルの身体は、空中で停止した。

まるで蜘蛛の巣に引っかかった羽虫のようだ。

いくら藻掻けども、糸が切れる様子はない。

「あははっ。お兄ちゃん、やったね！」

ルシエルたちを目にして、アイテールが無邪気に笑う。

対照的に、サデインの表情は苦渋に満ちていた。

そんな二人が見ている中、糸に捕らわれた天使たちの姿が、突如炎に包まれた。

サデインの目が、驚愕で見開かれる。

巨大な炎はすぐに消え、糸が焼き切れて自由を取り戻したルシエルとミカエルが地に降り立った。

軽い火傷を負ったものの、それ以外はほとんど無傷だ。

服についた汚れを払いながら、ルシエルはサタンを睨む。

「もう少し優しい助け方はないんですか？」

ミカエルも何か言いたそうにサタンを睨むが、当の本人はまるで悪びれた様子もなく肩をすくめた。

「助けてやったんだから文句を言つな。そもそも、捕まる方が悪い」
ルシエルもミカエルも、それ以上何も言えなくなつて押し黙る。
そんな彼らを見ながら、サデインは思わず安堵の溜息を吐きだす。
アイテールがそれに気付き、わずかに怒つたような目つきになつた。

「お兄ちゃん、はやくあいつらやつつけて！」

「う……つくつ」

抗い難い破壊的な衝動を抑えようと、サデインは歯を食い縛る。
だがそんなことでアイテールの支配から、逃れることはできない。
サデインは再度、天使たちに向かって糸を放つた。
二人の天使もそれを察知して身を翻すが、サデインの糸は意思を持っているかのように二人を追う。

そこに突如、突風が往き過ぎた。

突風は鎌鼬のような鋭さを持ち、サデインの糸を切断する。

ジュピターの放つた攻撃だった。

彼女は無言のままに、祈るような姿勢で戦況を見ている。

アイテールに真実の言葉を封じられているものの、彼女の力には影響はない。

サタンと二人、後ろからの援護は完璧だ。

だが、当然アイテールはそれを許すはずがない。

どうにか邪魔なサタンとジュピターを排除しようと口を開いた。

「もつつ、じゃましな……」

しかしそれは途中で遮られた。

ルシエルが放った攻撃が、サデインの足元へと突き刺さったのだ。それを避けようとサデインは素早く背後に跳躍する。

ルシエルの放った珠は、地面に届くと同時に爆発した。

爆風がサデインを襲い、彼に抱えられていたアイテルも揺さぶられ、強制的に言葉を封じられたのである。

アイテル本人を押さえるのは難しいが、要は喋れなくなるような状況を作ればいいのだ。

そのためには、連続でサデインに猛攻を仕掛け、アイテルの言葉を遮るしかない。

激しく揺らされると、うまく言葉を紡げなくなるものだ。

サデインには申し訳ないと思うが、もうそれしかない。

ミカエルとルシエルは、今までよりもさらに攻撃の手を強めた。サタンとジュピターも、ルシエルたちの意図を悟り、積極的に援護をする。

なるべく傷つけないようにしようとするのだが、サデインの身体は確実に傷ついていった。

爆風に飛ばされた小石が皮膚を掠め、しなる荊が肌を裂く。

噴き上がる炎は容赦なくその身を焼き、全身に痛々しい生傷が作られる。

それでも、サデインが抱えるアイテルには、傷一つついていなかった。

アイテルの命令通り、彼はアイテルを守っているのだ。

サデインは苦痛に顔を歪め、荒い呼吸を繰り返し、傷口から流れる血も顧みず、ルシエルたちに襲い掛かってくる。

ルシエルは堪らず声を張り上げた。

「もうやめてください！ これ以上戦ったら、サデインは……！」

しかし、ルシエルの悲痛な叫びも、アイテールには届かない。

「うるさいなあっ。お兄ちゃん、やっちゃえ！」

「……………」

サデインは無言のまま、袖の中に仕込んである針を取り出す。それを逆手に握り、ルシエルへと振りがぶった。

ルシエルに鋭い針が振り下ろされる、刹那。

ルシエルの周りを透明な障壁が覆った。ミカエルが咄嗟に張った防護壁だ。

サデインの針は、防護壁に弾かれる。

体勢が崩れたところを、サタンの炎が襲った。

アイテールを抱えている腕を焼かれ、サデインは堪らず仰け反り倒れる。

アイテールも投げ出された。

ルシエルは咄嗟に、サデインの許へと向かい、彼を抱き起した。

「サデイン！」

名を呼んでも返事はない。

荒く呼吸をする度、ヒュウヒュウと咽が鳴り、声も出せない程疲弊しているのが解る。

アイテールによって無理に引き出された力のせいで、サデインの身体はとうに限界を迎えていたのだ。

動けないサデインをルシエルに任せ、ミカエルは投げ出されたアイテールの確保に向かった。

そのままアイテールの口を塞いでしまえば、こちらの勝ちだ。

ミカエルの手が、アイテールに届く。

サタンもジユピターも、勝利を確信したように口元に笑みを浮かべる。

だが、ミカエルの手がアイテールを押さえつける直前、悲鳴にも似た声が、アイテールから発せられた。

「動くなあっ！」

その場にいた全員が、ぴたりと動きを停める。

凍りついた時の中、アイテールだけがゆっくりと立ち上がった。包帯に覆われていない右目が、鋭くルシエルを射抜く。

「お兄ちゃんを返せ」

怒りを孕んだアイテールの声が、しんと静まり返った空間に響く。サディンを守るように抱きかかえていたルシエルの手が、緩んだ。しかし、それ以上離そうとしない。

必死にアイテールの言葉に抗おうとする。

だが、それも無駄な抵抗だった。

アイテールは動かない左足を引きずりながらサディンに近付き、更に言葉を重ねる。

「ボクのお兄ちゃんを返せ！」

ついにルシエルは、サディンを地面に横たえて手を放してしまっ
た。

アイテールはサディンの腕を掴んで、立ち上がらせようと引つ張
る。

しかし酷く疲弊しているサディンは、中々立ち上がることができ
なかった。

「お兄ちゃん、はやく起きてよ」

アイテールの言葉に急かされて、サディンは立ち上がろうと四肢に力を込める。

最早自身の身体を支えるのも困難な程、サディンは消耗していた。アイテールはそんなサディンを気遣う素振りもなく、早く早くと何度も急かす。

「ほら、お兄ちゃん、何してんの。はやく立って、悪いやつらやつつけてよ。ねえ……」

「もう止めなさい！」

アイテールの言葉を遮って叫んだのは、ルシエルだった。そのあまりの剣幕に、アイテールも思わず口を閉じる。それ程までに、ルシエルの声は真剣なものだった。

「これ以上、サディンを巻き込むのは止めなさい！」

「な……なんだよ！ お兄ちゃんはボクの味方だもん！ 守ってくれるって言ったもん！」

「あなたがその言葉で、無理矢理従わせているだけでしょう！」

「ちがうもん！ お兄ちゃんは……」

「いい加減になさい！ サディンはあなたの人形じゃない！」

「……………っ！！」

アイテールは目を吊り上げてルシエルを睨む。

片足で地団太を踏み、うーうーと意味不明なことを叫んでいる。その様は、我が儘で自分勝手な子供の姿そのものだった。

悪いことをして叱られているのに、それを認めたくなくて怒っている。

我慢することを拒み、癇癪を起こした子供というものは、大概が泣いて暴れるものだ。

それがただの子供ならばいい。だが、アイテールには力があるのだ。

元々短絡的だったアイテールは、怒りに任せて更に短絡的な行動をとる。

即ち、自分の気に入らない相手への、暴力。

「おまえなんか……！」

死んでしまえ。そう言おうとしたのだろう。

しかし、それは適わなかった。

ようやく身を起こしたサディンが、アイテールの頬を叩いたのだ。

小気味良い乾いた音が、余韻を残して消える。

何が起こったのか解らずに、アイテールはのろのろと己の頬に触れた。

赤く腫れた頬は、その時になって痛みを訴えだした。

じんじんと痛む頬を押さえ、驚愕に目を見開き、アイテールはサディンを見つめる。

アイテールが兄と呼び慕う青年は、駄々をこねる弟を叱るような目をしていた。

サディンは未だアイテールの支配下にあった。

しかし、ルシエルとのやり取りでアイテールが放った言葉が、謀らずもサディンにわずかな自由を与えていたのだ。

アイテールは言った。「悪いやつを倒せ」と。

『悪』というものはとても曖昧な言葉なのだ。

何を以ってして悪であると認識するか、確かな基準は存在しない。更にその後、「サディンは味方である」と言いながら、直後に「違う」と否定している。

アイテールにそのつもりはなかったのだが、その矛盾した言葉のお蔭で、サディンを束縛していた「アイテールを守らなければならない」という意識が一時的に消えたのだ。

アイテールにその言葉を言わせたルシエル自身にも、誘導しようという心算はなかった。

この場にいる誰もが矛盾した言葉を言わせることで、アイテールを無力化できるなど、知らなかったのだ。

以前直接アイテールと対峙したことのあるサタンですら、この状況は予想していなかったのだろう。

アイテールが何もせずに佇んでいるこの好機に、何もできなかったのだから。

誰もが呆然とする中で、ただ一人、アイテールに動くことを許されているサディンが、ゆっくりと立ち上がった。

器の許容量を超過する力を無理に引き出された身体は、たったそれだけの動作でも激痛が走る。

それでもサディンは、言わなければならないのだ。

過ちを犯そうとしているその子供に。ほんのわずかな時間だったとはいえ、その子を見守ってきたからこそ、言わなければならない。道を正すための言葉を。

「その言葉は言うなと……以前にも言ったはずだ。いけないことだと、教えたはずだ。何故理解しようとしななんだ」

その声は激しく怒鳴ったりしている訳ではなかった。

しかし、初めてサディンの怒りの表情を見たアイテールには、まるで鋭い刃物で刺されたような衝撃だった。

今まで自分には優しくかった彼が、自分を叱るなどあり得ないと思ひ込んでいたからだ。

「だ、だって……だって……」

ひどく混乱して、言い訳の言葉すら出てこない。

目の前にいるサディンの姿がぼやけて滲む。

アイテールの目には、涙が浮かんでいた。

「だって、あいつが……」

「他人のせいにするな」

「でも……お兄ちゃ」

「俺はお前の兄じゃない」

皆が固唾を呑んで見守る中、サディンははっきりとそう言い放った。

それは、初めてサディンからアイテールに向けられた拒絶の言葉だった。

アイテールの目から、一粒の涙が零れる。

その一粒を皮切りに、アイテールの目から次々と大粒の涙があふれてきた。

瞳に刻まれているのは怒りか悲しみか。半分を包帯で覆われたアイテルの顔からは、表情が読み取りづらい。

しかし、アイテルの内に不穏な気配が集中しているのは判る。その場にいるサディン以外の者は、緊張から思わず身を固くした。そして、アイテルの口から出たのは、最悪の言葉だった。

「お兄ちゃんなんかきらいだ！ 死んじゃえ！」

アイテルの声が、奇妙な余韻を残して消える。

言葉と共にサディンを襲ったのは、ずっと昔、一度だけ感じた痛みだった。

抗えない強大な力に押し潰されるような、恐怖を伴う痛み。

目の前が急激に暗くなる。自分の躰が重く感じた。震える程に全身が寒い。身体中の力が抜け、代わりに錆びた剣で刺し貫かれたような痛みが満ちる。声も上げられず、立っていることもできない。やけにゆっくりと景色が傾ぎ、そして、

赤く染まる世界。

「サディン！」

ルシエルの悲鳴が、赤く染まる大地に響く。

声もなく、音もなく、ただ崩れ落ちるサディンを、ルシエルは受け止めた。

両腕に伝わる重みと冷たさは、恐ろしい現実を突きつける。

生を感じさせない虚ろな瞳が、すべてを物語っていた。

手を濡らす赤い色は、まるで流れ落ちていく彼の命そのもの。

呼吸も、鼓動も感じない。

サディンの身体は、完全に動かなくなっていた。

「なんということを……」

呆然と呟き、ミカエルは膝をついて頂垂れる。

ジュピターは両手で顔を覆い崩れ落ちる。

隣に立つサタンは、険しい表情でアイテールを見ていた。当のアイテールは、涙の余韻を残し肩を上下させている。

自分が如何に重大な過ちを犯してしまったのか、解りかねている様子だ。

ただ呆然とサディンを見下ろし、立ち尽くしているだけ。

誰もが言葉もなく、しばしの間呆然と立ち尽くしていた。

そんな中、アイテールがおずおずと口を開く。

「お……お兄ちゃん……ボク……」

「黙れ！」

何事かアイテールが言い掛けたそのとき、サディンを抱えたルシエルが、血を吐くような大声で遮った。

その声に、アイテールがびくりと肩を竦める。

アイテールだけでなく、その場にいた誰もがはっと顔を上げてルシエルを注視した。

わずかに肩が震え、俯いた頬に一粒の雫が伝う。

それは滴となって零れ落ち、血に染まるサディンの頬を濡らした。ルシエルがゆっくりと顔を上げ、アイテールを睨むように見据える。

「お前は、自分が何をしたか解っているのか！」

ルシエルの声に揺さ振られるように、アイテールの身体が震える。アイテールの瞳が、サディンを捉えた。

青白い顔と対照的な鮮やかな赤のコントラスト。

どこか非現実的な光景を現実だと理解するのに、時間を要した。

アイテールの放った言葉によって、サディンは記憶の奥底に持つ死のイメージを増幅させられた。

天使とは、人間が死した魂。

そのときの死の記憶が強烈に残っているからこそ、カエルスやアビスの住人にはアイテールの言葉が脅威なのだ。

人間たちに同じ言葉を放つても、深刻なダメージを負うが最悪の事態までは回避できただろう。

サディンは首に大きな傷を負い、夥しい量の血を流していた。

それは彼がカエルスに来た理由、即ち死因とまったく同じ状態を再現している。

サディンはかつて、祖国の内乱で命を落とした。

そのときの傷が、アイテールの言葉で再現されたのだ。

しかし、ここにいる誰もがそんな事情など知らなかった。

アイテール本人でさえ、本当にサディンが死んでしまうとは思っていないかった。

精々、痛い思いをするだろう程度にしか、考えていなかったのだ。アイテールが、自分にどれだけ危険な力があるのかを把握しきれていなかったことが、この事態を生み出した最大の要因とも言える。ようやく現状を理解したアイテールは、その場に座り込んだ。

「だ……だって……だって、知らなかったんだもん」

震える声で絞り出したアイテールの言葉は、ただの子供らしい言

い訳だった。

知らなかったことなのだから、仕方がない。

しかし、それで許されるような事態ではないのだ。

ルシエルは怒りに染まった眼で、アイテールを睨み付ける。

「識らなかったでは済まされないんですよ！ お前はサデインを…

…！」

「だって！ 誰も教えてくれなかったじゃないか！」

アイテールの声が、ルシエルの台詞を遮った。

アイテールの紅い瞳から再び涙が零れる。

「誰も教えてくれなかった！ 何も見せないように、何も聞こえないように、真っ暗なところに閉じ込めて！」

アイテールの言葉にはつとしたのは、ジュピターだった。

彼女も、アイテールという存在がカエルスにいたことを識らなかった。

知ろうとしなかった。

それは何故かと問われれば、教えてくれる者がいなかったからだ
と答えるだろう。

何か知りたいと思うには、その何かを識っていなければならない。
識っているからこそ、人は知りたいと思うのだ。

識らないものを知りたいと思うのは、実はとても難しい。

だからこそ人は、親から子へ、師から徒へ、己の知った知識を伝えようとするのだ。

しかしまだ幼いアイテールは、知るという行為自体識らなかった
のかもしれない。

そしてそれを教えることを怠ったのは、ジュピターやサタンやゼウス、大人たちだったのだ。

今更後悔しても遅い。

既に取り返しの付かない事態は、起こってしまったのだから。ふとサタンに目を向けると、彼も同様のことを考えていたのか、唇を噛み締め苦渋の表情を浮かべている。

アイテールは未だ泣き顔のまま、サディンの方へと身を乗り出した。

「ウソだよ、お兄ちゃん、きらいじゃないよ。今まで言ったの、ぜんぶ取り消すから……」

乗り出した身体を支えるため地についた手に、サディンの血が付着する。

アイテールは一瞬そちらに視線を落とし、悲しみに顔を歪ませた。ようやく、事の重大性を理解し始めたのだ。

「起きてよお兄ちゃん……！」

しかし、アイテールの言葉は虚しく響くだけ。サディンが動く気配はない。

「お兄ちゃんは、死なないもん。死んじゃえなんて、ウソだもん！」

いくら言葉を並べてみても、目の前の光景は変わらなかった。

どれだけ彼の死を否定する言葉を並べてみても、サディンはまったく動かなかった。

「なんで？ 取り消すって言うてるのに、なんで起きないの!？」

ヒステリックに叫ぶアイテールを見つめるルシエルの眼は、温かいものではなかった。

いくら幼いと言っても、善悪の区別がつかない齡でもないのに。

怒りを覚えたルシエルが、つい感情的に口を開くより早く、アイテールの身体が宙に浮かんだ。

何事かと視線を上げれば、険しい表情のサタンが目飛び込んでくる。

サタンがアイテールの首を掴んで持ち上げたのだ。

こんなにも怒りを顕にしているサタンを見るのは初めてで、ルシエルは思わず息を呑む。

「貴様ほど救えない馬鹿もおらん」

驚いて目を丸くしたアイテールに、サタンの叱責が飛ぶ。

「取り消すだと？ そんな簡単な言葉で、己の過ちが許されるとでも思ったのか？

貴様がどれ程強大な力を持っていようと、過ぎ去った刻を戻すことなど出来ん。これは誰にも侵すことのできない、絶対の摂理だ。

半端な覚悟すら持てないひよっこが、軽い言動に随伴する責任の重さも知らないガキが、遊びで発していい言葉じゃねえんだ！」

皆が呆然と見つめる中、サタンは地面に叩きつけるようにアイテールを下ろす。

首を掴まれていた圧迫が消え、アイテールは激しくむせる。

涙で濡れた眼を開けば、映るのは血の気を失ったサデインの姿。

「よく見る！ それが貴様の招いた結果だ！」

サタンの怒声に、身を切られるような錯覚を覚える。
アイテールは初めて、心の底から恐怖を感じた。

サタンに怒られることが恐いのではない。

目の前の、兄と慕った青年を失うことが、恐かった。

何か言いたいのに、言葉が出てこない。

何かしたいのに、どうすればいいのか解らない。

アイテールにできるのは、ただ涙を流すことだけ。

「お……お兄ちゃん……」

アイテールは声を上げて泣きじゃくる。

その姿に、サタンは苛立ちを覚えた。

泣けば許されるとでも思っているのか！

思わず振り上げた手は、しかしアイテールに振り下ろされることはなかった。

駆け寄ってきたジュピターが、サタンの腕を引っ張ったのだ。

「いけません！ 怒りに任せて手をあげては、その子のしてきたことと同じです！」

サタンは目だけを動かしジュピターを見た。

ジュピターはサタンに縋った手を離そうとはしない。

しかしサタンも、振り上げた手を下ろそうとはしなかった。

元よりアイテールを封じるため、サタンはここにいるのだ。

この絶好の機会を逃すことはない。

ジュピターとて目的はサタンと同じはずだ。

それなのに、ジュピターはサタンからアイテールを守るような行

動をしている。

ジュピターはサタンを見上げ、彼女にしては珍しい程に声を荒げた。

「この件の責任は、この子だけで負うものではありません。私たちにも責任はあります。」

私たちは、この子を導かなければならなかったのです。子が道を誤ることを、恐れてはならなかったのです！

子を守り、教え、導くことこそ、私たち大人の責任なのですから！」

だんだん大きくなる声を抑えようとせず、ジュピターはサタンの腕に縋りつく。

真剣に己を見つめるジュピターを目にして、サタンは静かに手を下ろした。

ジュピターの言っていることは正しい。

サタンもゼウスも、その昔アイテールの力を恐れて封じた。

アイテールに悪い影響を与えるもの——この世界の暗い部分を見せないように、聞かせないように、それらを口にしないように。

その行動は、最善と思われた。

しかし、諸刃の剣でもあったのだ。

外界から遮断することで、アイテールに善悪を教えることができなかった。

悪いことが何故悪いのか、理由も、倫理も、何も教えられなかった。

子は失敗を繰り返し、失敗を回避する方法を学び、少しずつ成長する。

心の成長は、失敗なくしては得られないのだ。

だがサタンが言っていたこともまた正しい。
しかしそれは、責任というものの意味、重みを知る者にしか解らない。

何も知らないアイテールが責任を負えなくとも、仕方ないと言えないこともないだろう。

だがそれでは、とサタンは思う。

「どうすれば良かったんだ？　いつ爆発するかもしれない爆弾を抱えて、このガキの親代わりにでもなれと？」

「ふざけないでください！」

口端を上げて肩をすくめるサタンに、ジュピターは表情を険しくする。

「あなたは、怒りに任せて力を振るうような方ではありません。この子とも、話し合えば解り合えるはずです」

言いながら、サタンとアイテールの間に割って入る。

アイテールを背に庇うように立つジュピターを見て、子を守る母親のようだとサタンは思った。

母性でも目覚めたというのか。この神に創られた人形に。

ああ、なんて苛立たい。

ジュピターそっくりの顔で、ジュピターと同じことを言うなんて。

一瞬、脳裏を過ったその考えに、サタンは小さく舌打ちする。

そんなことは、今考えても仕方がない。どうしようもないことで

もあるし、関係のないこともある。

それでも腹が立つのは抑えられない。

サタンはあからさまに苛立ちを滲ませた瞳でジュピターを一瞥すると、彼女の細い首を掴んだ。

「俺様を理解したような台詞は止める。勝手なことを言いやがって……」

「……！」

ジュピターの眼が、驚愕で見開かれる。息ができず、喉の奥でひゅつと空気が漏れたような音がした。

息苦しさよりも先に驚きを感じたせいか、まったく苦しくはない。

息苦しさは驚愕を凌駕する前に、サタンの手が振り払われた。

ミカエルが噛み付かんばかりの勢いで、サタンを睨んでいた。

ジュピターは膝をつき、軽く咳き込む。

「……………」

サタンは無言でミカエルとジュピターを見下ろした。

どうしてこんなにも怒りを覚えたのか、自分でもよく解らなかった。

そう、このジュピターは彼女の父が記憶を頼りに創った、そっくりの人形。

そんなことは最初から解っていたはずなのに、彼女との相違点を見付ける度に、どうしようもなく苛々するのだ。

サタンはまた小さな舌打ち一つして、ジュピターたちから目を逸らした。

先程から妙に落ち着かない気分を紛らわそうと、見慣れた地獄の

空を見る。

しかし視線を動かした瞬間、視界の端に何か映ったような気がして目を戻した。

城の方。何か、白いものが……

時を同じくして、サタンの城の中で、わずかに異変が起きていた。何かと問われても、答えられる者はいないだろう。

敢えて言うなら、何かが孵化する直前の緊張に似ている。

最初にそれを感じ取ったのは、救助活動から戻ってきたラファエルだった。

ラファエルは、城から遠い集落へ治療チームを送り届けた後、城の広間へと戻ってきた。

そこで城を出る前と、帰ってきた後との微妙な違いに気付いたのだ。

空間を渡る能力を持つラファエルだからこそ、気付いたのだろう。城の中のどこかで、空間に罅が入ってきている。まるで、卵を内側から破ろうとしているように。

しかし、それがどこで起きているのか、ラファエルには解らなかった。

感じた違和感も微々たるものであったし、連続で移動能力を使用した疲労もあった。

それ故、自分の勘違いかと思ひ込んでしまったのだ。

果たして、このときに何か行動を起こしていたら、この後の事態は変わっただろうか。

それは誰にも解らない。

だが恐らく、誰にも、どうにもできなかっただろう。
空間を割り光の渦から這い出してきたのは、神も魔も凌駕する力の持ち主だったのだから。

城の中、サタンの部屋の前を、レミエルが走っていた。

書物を収めた部屋がこの奥にあり、そこにより詳しいアビスの地図がある。それを取りに来ていた。

サタンからもらった地図と、実際の集落の位置にわずかな違いがあったためだ。

丁度サタンの部屋の前を通りかかったそのときが、ラファエルが空間に違和感を感じた瞬間だった。

ぴしつと固い何かに亀裂が入るような、小さな音をレミエルは聞いた。

何故かそれが気になり、音のした方向に目を向ける。

部屋の扉の下。部屋の中から外へと向かって、小さな罅割れがいくつも作られていく。

その亀裂から、光が漏れだしていた。

気付いたときにはもう遅い。

亀裂は一気に大きさを増し、まばゆい光が瞳を焼く。

何かが破裂したような音と衝撃が、全身を襲った。

いったい何が？ 考える前に目の前が真っ白になった。

身体中に感じる圧迫感のせいで息苦しい。

為す術なくレミエルの意識は沈む。直前に見たものは、白い髪の子供の姿だった。

サタンは己の目を疑った。

城からゆっくりと歩いてくるのは、アイテールとよく似た姿をした子供だった。

ただし、アイテールは左側を包帯で覆っているのに対し、あちらは身体の右側を覆っている。

アイテールと対を成す存在、エレボス。

それが、サタンの封印を破って現れたのだ。

誰も気付かなかったが、泣き続けるアイテールは小さな声で呟いていた。

「エレボスに会いたい……」

その言葉が何らかの影響を与えたのかもしれない。

サタンの部屋の下、空間をねじ曲げて作られた光の牢獄から、エレボスは外へと足を踏み出した。アイテールに会うために。

サタンの眼光が、より鋭さを増す。

ジュピターやミカエルたちも異変に気付き、城の方へと目を向けた。

「貴様……俺様の許可なく外に出るとは、覚悟はできているんだろうな！」

サタンの声に応えるように、エレボスが小さく口を動かす。

未だ遠くにいたエレボスの姿が消え、刹那の後にはサタンの目の前に降り立った。

「ちよつとどいて」

サタンが仕掛ける前にエレボスが言う。

サタンは仕方なく道を開けた。

エレボスの目に映っているのは、アイテールだけだ。

アイテールが涙に濡れた顔を上げる。エレボスと目が合った。

「え……エレボスう、ボク……」

「うん、知ってるよ。ずっと視てた」

泣きじゃくるアイテールとは対照的に、エレボスは無表情で近付いてくる。

まるで感情をなくしてしまったように。

二人が向かい合うと、鏡像を見ているような錯覚を覚える。

しかし、二人の表情は真逆だ。これではまるで……

「封印、失敗してたみたいだね」

エレボスが静かに言う。

その言葉でサタンは悟った。

二人に分けて天地に封じた際、偏りがあつたのだと。

即ち、アイテールには感情が、エレボスには知恵が。

危険視すべきは、感情に任せて力の使い方を知らないアイテールではなく、知恵を持ったエレボスの方だったのだ。

それに気付いた瞬間に、サタンは足を踏み出した。

その手がエレボスを捕らえるより先に、エレボスが口を開く。

「触るな」

その一言で、サタンの手はエレボスに触れる直前で止まった。アイテールと違い、エレボスは流れるように言葉を紡ぐ。

「ボクたちを害するものは、すべてボクたちに触れることはない。ここから先はボクたちの一方的な復讐だ」

外見と釣り合わない、大人びた口調でエレボスは言う。

その言葉が終わると同時に、サタンが動いた。

掌の上に生まれた炎を、火炎の渦にして二人の子供に放つ。

炎に巻き込まれないように、ジュピターたちは咄嗟に跳び退る。ルシエルもサディンの身体を抱えて炎を避けた。

「待つて！ お兄ちゃん連れてかないで！」

渦炎からアイテールの声が言う。

その直後、左足を引きずり、炎の中からアイテールが飛び出してきた。

エレボスの言葉に守られているお陰か、髪の上にすら焼け焦げつない。

アイテールの言葉に引きずられるように、サディンがルシエルの腕から転がり落ちた。

アイテールは転ぶようにサディンに抱きつく。

直ぐ様身を起こし、白い服や肌が赤く汚れることも意に介さず、必死に引き寄せサディンの頭を抱え込むように抱き締めた。

「サディン……！」

「もう死んでるんだろうが！ 放っておけ！」

足を止めたルシエルに、サタンの叱責が飛ぶ。
しかしそう簡単に割り切れることではない。
ルシエルはサディンを奪い返そうと手を伸ばした。

「届かないよ」

そのとき、炎の中からエレボスの声が聞こえた。
途端にルシエルの手は止まり、炎が割れて中から無傷のエレボスが姿を現わす。

エレボスの左目がサディンを一瞥した。

「このお兄ちゃんにも手出ししないでよね」

言葉の圧力が、ルシエルを後退させる。

これ以上サディンの身体を傷つける心配はなくなったが、あの子供たちを捕らえるのが困難であることは変わらない。

攻撃の手が鈍るルシエルたちに、何度目かになる小さな舌打ち一つして、サタンは間断なくエレボスとアイテールを攻撃した。

仲間の遺体を気にして本気を出せない天使たちに、子供に暴力を振るうことができない母親面した神。

頼りにならない味方に苛立ちを覚えては、その怒りの矛先を二人の子供に向ける。

しかし火炎で焼いても焰は二人を避け、風刃で切り裂いても二人の前では微風になる。氷の槍は溶かされ、溶岩は砂となった。

エレボスの言葉通り、二人を害するものは決して当たらないのだ。一撃も与えられないまま、エレボスから反撃の言葉が紡がれた。

「自分の炎でその身を焦がせ」

言葉の余韻も消えないうちに、エレボスたちの周りを囲んでいた炎が大きくうねりサタンを襲う。

咄嗟に身を振り炎を躲そうとしたのだが、炎は意思を持った蛇のようにサタンを追った。

サタンの身体は、瞬時に炎に包まれる。

思わず駆け寄ろうとしたジュピターを、ミカエルが止めた。青ざめた顔でジュピターが叫ぶ。

「サタン！」

「なんだっ！」

返答は、予想外に早かった。

炎はすぐに掻き消え、そこにはほとんど無傷のサタンが立っていた。

左手の甲が、少しだけ煤けたようになっていただけだ。

エレボスの言葉の力で、炎はサタンの身を焦がすまでは消えない。サタンはわざと防御術を部分的に弱くして、『身』の一部に焼け焦げの痕を作ったのだ。

そうなれば、役目を終えた炎を消すなど造作もない。

「俺様がそう簡単にくたばるわけないだろうが。余計な心配をする前に、あのガキどもをどうにかする方法を考えろ」

高圧的な態度で言うサタンの姿に、ジュピターは安堵の息を吐く。一先ずは無事なようだが、それでもいつまで保つか解らない。己の身を犠牲にしながらでないと攻撃を防げないということは、

いつかは蓄積したダメージで死に至る可能性もあるということだ。ジューピターもサタンも、天使たちも皆そのことには気付いている。実際、サタンの傷は小さいが、そこから感じる痛みは大きかった。一部分とはいえ、焦げて炭化する程の火傷を負ったのだ。砂埃を乗せた風が撫でるだけでも痛みを感じる。それを押し殺し、サタンは口端に笑みを浮かべた。

「この糞ガキにはキツい仕置きが必要だな。貴様らも黙って見てないで手を貸せ！」

言うが早いか、サタンは地面に魔力を落とす。大地が揺れ、アイテールとエレボスの真下から槍のように岩が立ち上がった。

しかしそれも二人を直撃することではなく、アイテールとエレボスの間に柱のようにせり上がるのみだ。まるで二人の周りだけ空間が歪んでいるようだ。

サタンに続いてルシエルとミカエルが動く。ルシエルの攻撃が岩の槍を砕いた。無数の石の雨が、正確にアイテールとエレボスに降り注ぐ。ミカエルが二人の周囲に筒状の防護壁を張り巡らせ、瓦礫が落ちる道を作っていたのだ。

エレボスとアイテールの姿が瓦礫の中に消える。

だが、動きを封じることができたかというささやかな期待は、瞬時に打ち砕かれた。ミカエルの防護壁を突き破り、瓦礫がすべて四方に飛び散ったのだ。

飛来する石を、ミカエルが咄嗟に張ったシールドが弾く。

瓦礫の飛礫が治まった後には、やはり無傷のエレボスとアイテールの姿。

間接的な攻撃でも、二人に届くことはないということか。

砂煙が風に流され、サタンに向けられていたエレボスの無機質な瞳が、ルシエルとミカエルを捉える。

「ボクの復讐の邪魔をするなら、お前たちにも容赦しないよ」

エレボスの冷たい声を聞き、二人は身構える。

どんな言葉が発せられるか、解らないのが厄介なところだ。

どうしても攻撃の後でないと、回避も防御もできない。

アイテールのときのように事前に攻撃を防げればいいのだが、エレボスにこちらの攻撃が届かないのであれば、それも難しい。

何しろ、エレボスたちに『害』のあるものはすべて、あの二人に触れないようにされているのだから。

「どうしようかな……」

エレボスは品定めするように、二人の天使を交互に見つめる。

「ぼさつとするな！ 奴の口を塞ぐことを考えろ！」

すぐにサタンの叱責が飛んできて、ルシエルはエレボスの足元に光の珠を撃ち出した。

それは着弾点の土を巻き上げて爆発するが、エレボスもアイテールも爆風に飛ばされる様子はない。

言葉の力を打ち破るような『何か』が必要なのだ。

それは恐らく、とても簡単でいてとても難しい。

「そうだ。その天使二人は……」

「おやめなさい！」

エレボスの言葉を、ジュピターが遮った。

彼女を庇うように立っていたミカエルの前へ飛び出し、エレボスの傍へと走り寄る。

エレボスと視線を合わせるようにしゃがんで、祈るように胸の前で手を握り締める。

「あなたを封じたのは、私たちです。あの子たちは関係ありません」

「止せ。何を言っても無駄だ」

ジュピターの声に重なるように、サタンが吐き捨てる。

その顔が、先程からいつにも増して青白く見えた気がするが、何のことはない。ただ日が陰り、辺りが暗くなってきただけのようだ。

サタンの赤い瞳が魔力を帯び、金色に鈍く光る。

「考えてみる。話して済むようなら、封じることなかっただろうが。」

ガキが被害者ぶってりゃ許してもらえと思うなよ」

「お黙りなさい！ 私は今、この子と話しているのです！」

悲鳴にも似たジュピターの叫びが響き渡る。

何が彼女をそこまで駆り立てるのか。

自分でもよく解らないが、ジュピターの中の何かが彼女を突き動かす。

こちらの都合で、自分たちの安全ばかりを考えて、この子供たちを封じることができない。

この子たちに罪がない訳ではないが、それは自分たちにも言えることなのだから。

しかしサタンは違った。

彼はこの子供の恐ろしさを知っている。

世界が滅びることが、どういふことなのかを知っている。

故に、滅びを招く可能性のあるこの子供を野放しにしておくことが、どれ程危険であるかを知っている。

だからこそ、ジュピターの言葉に是を感じつつ、完全に肯定できないのだ。

サタンはジュピターを睨み付ける。

「……何だと？ 俺様に命令するのか？」

静かなる炎の如く揺れるサタンの瞳に、ジュピターの横顔が映る。ジュピターは一瞬サタンを見たが、すぐに視線をエレボスに戻した。

先程とはまったく違う優しい声音で、彼女はエレボスに言った。

「私は私たちの非を認めます。あなたたちの時間と自由を奪ってしまった罪を、償いたいです。」

ですから、あなたたちも約束してください。二度と人々を、この世界を脅かすような言葉は言わないと。

私たちは、共に生きられるはずです」

そう言ってジュピターは手を伸ばす。

その指先が、エレボスの手に触れる。

害なすものは触れないはずのエレボスに、ジュピターの体温が伝

わってくる。

「ほら……私たちは、きっと歩み寄れます」

今やしつかりと握られた左手に、エレボスは視線を落とす。

無表情だったその顔に、わずかな変化が見られた。目を大きく開き、何か言いたそうに唇が震える。

単純に、ジュピターが自分に触れたことに驚いただけかもしれないが。

例えそうだとしても、ジュピターは確かに手応えを感じていた。エレボスにも、こちらの話を聞こうとする意思はあるのだ。

だが、サタンは黙っていなかった。

「貴様はそのガキが何者か知らんから、そんな悠長なことが言えるのだ！」

何も知らん者が、思慮の足りんことを吐かしやがる！」

サタンのあまりに一方的な物言いに、今度はジュピターがサタンを睨み付けた。

「私は私なりに考えています。子供の自由な未来の可能性を奪っていい権利など、誰も持っていません。」

この子たちの気持ちも聞かずに、一方的に封じるなど、浅はかです」

「ああ？ そいつは俺様のことを言っているのか？」

ひくりと顔を引きつらせ、眉間を寄せてサタンが言う。

こめかみに青筋がはつきり見えている辺り、相当御冠のようだ。

「貴方のことだけを言っているではありません」

「結局俺様も浅はかだと言っているじゃねえか！」

大声で怒鳴るサタンに対し、ジュピターも表情に怒りの色を浮かべた。

エレボスから手を離し、立ち上がってサタンを睨み上げる。

「貴方だけではないと言っているではありませんか！」

皆が互いの罪を認めて許し合わなければ、誰とも和解できなくなってしまう！

まずはこの子たちの気持ちを聞くことが第一です！」

「ああそれで全員死ななきゃ許さないとでも言ったらどうするつもりだ？ ああ！？ 世界が滅びるまで殺し合いでもするつもりか！？ これだから自分を神だとか吐かす連中は傲慢なんだ！ できもしない理想ばかり並べやがって、具体策なんか考えちゃいねえ！」

「理想を求めて何がいけないのです！ 理想は叶わぬと諦めてしまつては、道は閉ざされるのですよ！」

それにこれは実現不可能な理想ではありません！ 現に私はこの子の手を取ることができました！」

ジュピターもサタンも双方譲らず、言い合いながらじりじりと詰め寄り、ついに至近距離で互いの顔を睨み付けながらの舌戦になつてしまった。

その様相はまさしく痴話喧嘩であり、周囲の者は誰一人として口を挟むことができずにいる。

いや、そもそも戦場でいきなり口喧嘩を始める神と地獄王など、誰が想像しただろうか。

まさかこんな状況になるなど、誰一人、予想すらもなかった。ルシエルもミカエルも、二人の子供たちまで、ぽかんと口を開けてその様子を眺めている。

そんな彼らなど最早視界に入っていないかの如く、天地の頂点に立つ二人は口論を続けた。

「最初は貴様も封印に賛成してやがったくせに、今更何だ！ 自分の感情でぼんぼん方向性変えられたんじゃ、カエルの連中はさぞかし苦労してるんだろうな！」

「それは貴方が、この子たちを話も通じない極悪人のように説明したからです！ 貴方の情報提供が足りなかったから、私も基本方針が定まらなかったのです！ 私が悪いように言わないでください！ 心外です！」

「貴様もこのガキと同じで自分の非を他人の所為にするのか！？ はっ、そりゃとんだ指導者だな。己の言動に責任も持てないなんてよ！」

俺様が悪いってんなら、望み通りすべて教えてやる！ このガキはな、かつて世界を滅ぼした魔王の眷属なんだよ！」

その言葉に、ジュピターの表情が凍り付いた。

サタンの言っていることが事実ならば、元通り一人に戻ったこの子供には、誰も力では敵わないだろう。

だからこそサタンは、この子供を封じること固執していたのだ。もしこの子供が本気で滅びを願えば、それを止められる者などいない。

昔封印に成功したのも、奇跡のようなことだったのだから。

あのような奇跡が、何度も起こることはない。

封印術が解けきっていない今しか、再び封じる機会はないだろう。その思いから、サタンは焦りを感じていたのだ。

世界の滅亡を直接知らないジュピターたちは、サタン程エレボスたちに脅威を感じていなかったのだろう。

サタンとの意見の食い違いは、そこから来ていた。

そう、ジュピターは何も知らない。

彼女の記憶は、父によって植え付けられた紛い物だから。

だから、サタンが今どんな思いで子供たちを封じようとしているのか、想像もできない。

知らぬことが罪である、とはよく言ったものだ。

この子供たちは、サタンにとって故郷を滅ぼした大敵なのに、その敵を庇うような真似をしてしまった。

さぞかし自分を憎いと思っているだろう。

しかしそれも、ジュピターの想像でしかない。

どうすれば、双方が脅かされることなく手を取り合うことができるのか？

どんなに考えても、上手い策が見付からなかった。

「もうケンカやめちゃうの？」

ジュピターの意識を思考の海から引き戻したのは、エレボスの声だった。

見れば、ルシエルとミカエルは何かを押さえ付けられるように、地に伏している。

どうやら二人が口論に熱中している間に、エレボスにやられたようだ。

起き上がろうと藻掻いているが、身体は地面から離れない。

「もっとやってほしかったのに。ね、アイテールもそう思うでしょ？」

「……………」

エレボスが振り返るが、アイテールはサディンを抱き締めたまま首を振る。

エレボスは肩をすくめてジュピターとサタンに目を向けた。

「ねえ、そっちのお姉ちゃんは、謝る気はあるんでしょ？」

「……ええ」

エレボスの問い掛けに、ジュピターは少し躊躇った後小さく頷いた。

その横で、サタンがこれ見よがしに舌打ちする。

エレボスは相変わらずの無表情で言葉を続ける。

「お姉ちゃんが謝ってくれるなら、ボクも今日のことは謝るよ」

その言葉に反発したのは、サタンだった。

怒りの冷めやらぬ表情でエレボスを見下ろす。

「謝って済む問題か、糞ガキが」

思わず口を突いて出たその言葉を、エレボスは聞き逃さない。

「それなら、お前らがやったことも、謝って済む問題じゃないよね

？」

エレボスの眼差しは冷たい。

単に感情が希薄なだけなのか、本気でサタンを憎んでいるのかは、その表情からは読み取れないが。

何れにせよ、エレボスはサタンを許すつもりはないらしい。

その昔、己の自由を奪った張本人である。そう簡単に、許せるはずがない。

「それじゃあ、何だ？　俺様に死ねとでも言うつもりか？」

相手が子供であろうと容赦なく、サタンは冷たく吐き捨てた。

互いに相手を睨み付ける。

しかしそれも数瞬しか続かない。

じつくりと相手の出方を見極めるような戦いは苦手なのだろう。

子供らしい性急さで、エレボスは口を開いた。

「それは悪い言葉なんですよ？　そんなこと言わないよ。アイテールが怒るもん」

その意外な台詞に、サタンは眉をひそめた。

エレボスの前では、一度もそんな話はしていなかったはずなのに。だが、すぐに思い直した。アイテールとエレボスは元々同じ身体だったのだから、互いの得た情報を共有できても不思議ではない。

それよりも気になった点は、エレボスがアイテールの意思を尊重しているということだ。

知識が乏しく本当の幼子のように振る舞うアイテールより、知識の多いエレボスの方が主導権を握っているように見える。

しかし、実際は違うようだ。

人は知識よりも、感情が行動を決定づける。

それは魔王の眷属たる二人も同じことだろう。

恐らくエレボスは、アイテールの意思を己の行動の基盤としているのだ。

封印の際、力のバランスが崩れたのをきっかけに、アイテールとエレボスの間に主と従の関係が出来上がった。そう考えれば合点がいく。

サタンは脳内で瞬時にその答えを導き出した。

そして、同時に思いついたことを、一番近くにいたジュピターに伝える。

声には出さず、己の精神のみをジュピターに投げ渡した。地獄王と名乗るのは伊達ではない。この程度はお手の物である。

突然頭の中に届いたサタンの意識に、ジュピターも気付いた。

表情には出さず、サタンの目を見返す。

二人同時に、無言で意思の疎通を図る。

だが、故意か偶然か、エレボスが彼らの邪魔をするように口を開いた。

「そうだ。サタンはそのお姉ちゃんとケンカし続ければいいんだ。どちらかが動けなくなるまでさ」

「なに……っ!？」

エレボスの言葉に動かされ、サタンとジュピターは対峙した。

二人の表情にはわずかばかりの動揺が見られる。

ここでジュピターが倒れるようなことがあつてはならない。

彼女には、アイテールを説得してもらわなければならないのだから。

ジュピターにアイテールを説得してもらうこと。これはサタンが考えたことだった。

サタンは今でも、あの二人を説得できるとは思っていない。ただ、力づくで抑え込むことができないだろうことも、充分理解している。

ならば、わずかでも可能性がある選択肢を選んだ方がいい。

本当に苛立つ、ムカつく、虫酸が走る、策とも呼べないこの博打。俺様が意見を曲げてまで選択したこの行動を邪魔しやがって。

この糞ガキには、後で尻百叩きの刑だ。

頭の中でそんなことを考えながら、しかし身体はエレボスの言葉に従おうとする。

ここはエレボスの言葉を逆手にとって、ジュピターに動きを封じる術でも使ってもらおうか。

ジュピターも同じことを思っていたようで、彼女は封縛の呪を唱え始めた。

だがエレボスはそれを許さない。

「ちゃんと二人で戦闘してよ。死ぬ寸前まで追い込むくらい激しくさ」

この糞ガキが！

心の中で吐き捨てながら、サタンはジュピターに向けて手を振りかざした。

その掌に青い焰が点る。

次の瞬間、青く燃える数百の矢が焰の中から放たれた。

この至近距離では躲すことは不可能。

だがジュピターも瞬時に印を組む。

焰の矢が放たれるのとほぼ同時に、ジュピターの前に何本もの大木が立ち上がった。

樹は太い幹で焰矢を受け止める。

樹木は焰により燃え上がり、赤い炎の壁となってサタンに立ちはだかった。根元からサタンへと倒れ込む。

ズンと重い音をたて、炎の壁は大地に倒れ砕けた。

衝撃と炎の熱風で、砂埃が舞い上がる。

その中にサタンの姿はない。

炎の壁が倒れる前に、後方へと跳び退避していた。

そして瞬時に次の攻撃に移る。

放たれる閃光、湧き上がる炎柱、吹き荒れる雷撃。

最高神と地獄王の『喧嘩』は、より激しさを増す。

ジュピター、サタン共に、表情からは苦渋が窺える。

だが、エレボスによる言葉の呪縛が、精神に働き掛けるものでなかったことは、不幸中の幸いだった。

ただ「戦え」と命じられただけで、「憎み合え」とは言われていない。

もしそんなことを言われていたら、ギリギリの手加減さえできなくなっていただろう。

危うい均衡を保ったまま、二人の戦いは続いた。

その『喧嘩』の余波が、観戦者たちを襲っていた。エレボスたちは言葉によって守られているが、ここで被害を被っているのが天使たちだ。

エレボスの言葉で地面に礫状態にされている今、飛んでくる喧嘩の余波を躲すことができない。

どうにかミカエルの防護壁で防いでいるものの、いつ破れるか心配ではある。

「……ミカエル？ シールドが弱くなってきたる気がするんですけど？」

ルシエルが目だけ動かしてミカエルを見ると、彼は険しい表情で短く呟いた。

「話し掛けるなっ！ 集中が途切れる……！」

予想以上に切迫した声に、この喧嘩の凄まじさを知る。

早く二人を止めさせないと、こちらも地味に限界が来そうだ。

こんなところで、こんな地味なやられ方するのはゴメンである。ルシエルはどうかエレボスとアイテールの気を引こうと、二人に向けて声を張り上げた。

「エレボス、アイテール！ こんなことはもう止めなさい！」

ルシエルの呼び掛けに、アイテールはぼんやりと、エレボスは煩わしそうに顔を向ける。

「何？」

感情が稀薄なエレボスは、喧嘩の観戦を邪魔されたくらいで腹を立てたりはしない。

ただ少し、邪魔だな程度には感じたのだろう。向けられた目が冷たい。

対照的に、感情の塊であるアイテールは、わずかばかり怯えの色が窺える。

サディンのことで責められるのではないかと、警戒しているようだ。

ルシエルは上から押さえ付けられる圧力に逆らい、必死に顔を上げて二人に語った。

「もう止めなさい。充分でしょう。サディンの他に、また犠牲者を出すつもりですか！」

ルシエルの口から出た名を聞いて、アイテールがびくりと肩を竦める。

だがエレボスの方はまったく動じていない。
表情も変えず、ルシエルを見下ろした。

「そのお兄ちゃんのことは申し訳ないと思ってる。でも、サタンは別。あいつはボクらを閉じ込めたんだもの、許せないでしょ？」

本当はゼウスにも復讐してやりたかったんだけど、もうこの世界にはいないようだし、あのお姉ちゃんに責任とってもらうことにしたんだ」

大人と子供が混ざり合ったような、安定しない口調は、エレボスの感情が少ないからだろうか。

ルシエルはふと、そんなことを考えながら、エレボスを見上げた。

「復讐なんかしても、何も変わりません。そんなことをすれば、皆あなたたちを恐れ、また封じようとする。

今ならまだ、サタンも許してくれますよ。だから、もう止めなさい」

「何故サタンに許しを請わなきゃいけないの？」

エレボスの声音は淡々としていたが、内心は穏やかではないだろ

う。

アイテールのように癪癢を起こさないのは、激昂する程の感情を有していないからだ。

突然怒って暴言を吐かれないのは助かるが、こつも感情が稀薄だと、こちらの訴えを正しく理解してくれるかどうか。

かといって知識が少なく思慮の足りないアイテールに訴えても、こちらもしっかり理解してくれるかどうか解らない。

どうする。どうすればいい。

自問自答を繰り返し、それでもルシエルは有効な答えを見付けられない。

アイテールとエレボス、二人が同じく、いや、最低でもアイテールが納得してくれるような説得を。

何故復讐がいけないのか。何故、誰かを殺すことがいけないのか。理解しているはずなのに、子供に教えるのはひどく難しい。

ルシエルは困却して唇を噛み締めた。

今よりほんの少し前。

サタンの城の中で、ラファエルは倒れたレミエルに駆け寄った。

地図を取りに行ったまま戻らないレミエルを心配し、探しに来たのだ。

「レミレミ、どうしたの？ しっかりしてよ！」

「う……っ痛……腰打った……」

ラファエルがレミエルの身体を揺ると、彼女は小さく呻いて目を覚ました。

どうやら大した怪我ではないようだ。
ラファエルはほっと胸を撫で下ろす。

「よかったあゝレミレミ、死んじゃったかと思ったよ。ねえ、何があったの？」

ラファエルの問い掛けに、レミエルは痛む腰をさすりながら答える。

「わっかんない……急に、そこから何か出てきて……」

レミエルが指差す先には、罅割れて穴の空いた通路と、壊れたサタンの部屋の扉がある。

辺りには瓦礫が散らばっており、他には何も不審なものはない。

飛んできた瓦礫が背後に当たり、その衝撃で意識が飛んでしまったようだが、その直前、レミエルは確かに見た。

穴の空いた場所の空間が歪み、そこから白い誰かが出てきたのだ。誰だったのか、顔ははつきり見えなかったので解らない。

だが、あの雰囲気はどこか覚えがある。

サデインが連れていた、あの白い子供に似ていた気がする。

レミエルは腰を庇いながらゆっくりと身を起こした。

「ちょっと待って……捜してみる」

レミエルは城の外へ目を向けた。

サタンたちがアイテールを迎え撃っているのは、この城から少し離れた荒野だ。

先程見たものがもし、アイテールに関係するものならば、そこに向かった可能性が高い。

そう思い、戦場となった場所を遠隔視した。

「……………え？」

レミエルの口から、小さな声が漏れた。

己が見たものを疑うように瞬きし、じっと荒野を見つめた。
動揺を隠せずに瞳が揺れ、緊張から掌が汗ばんでくる。

そんなレミエルの様子を見て、ラファエルは彼女の顔を覗き込んだ。

「どしたの？ 何か……………あったの？」

ラファエルの問いに、レミエルはすぐに答えられなかった。

口の中が渴き、まるで喉に何かが詰まったように、言葉を発することができなかったのだ。

レミエルは青ざめた顔で荒野を見つめたまま、やっと声を絞り出した。

「……………サディンが……………」

「……………何？」

「……………し、死んでるの……………」

それを聞いたとき、ラファエルはレミエルの言葉をすぐには理解できなかった。

数回瞬きをして、ひきつった笑みを浮かべる。

「……………うそ……………？」

かすれた声で紡いだ言葉は、およそ現実を受け入れない猜疑の言葉。

だが、レミエルは首を振ってそれを否定する。

「嘘じゃないわ……だって、見たんだもの……」

「うそだっ！」

震える声で言ったレミエルの言葉を打ち消すように、ラファエルは叫ぶ。

信じたくなかった。それが現実であると。

きつとレミエルが見間違えたに違いない。

そう自身に言い聞かせ、レミエルに詰め寄った。

「ねえレミレミ、うそだよ。見間違えたんだよ、そうでしょ？」

レミエルは肯定しない。

ただ目を閉じて、首を横に振るだけだ。

ラファエルは段々腹立たしくなってきた。

嘘に決まっているはずなのに、何故レミエルは認めてくれないのか。

きつくレミエルの肩を掴み、感情の赴くままに彼女を揺すぶった。

「うそなんですよ？ うそだよな？ さっちゃんが死ぬ訳ないだろ、嘘だって言えよ！」

「痛い……っ、やめてよっ！」

力を込めるラファエルの手を、レミエルは力任せに振り払った。ラファエルは尻餅をつくように倒れる。

急いで起き上がると、レミエルの眼から涙が零れるのが見えた。ラファエルは思わず言葉を呑み込む。

「嘘だと思うなら、自分で見てくればいいじゃない！」

レミエルはそう言ったきり、両目を覆って座り込んでしまった。ラファエルが声を掛けても、返事もしない。こうなってしまうと、レミエルは何を言っても聞いてくれない。ラファエルは一人で立ち上がり、静かに目を閉じた。

ラファエルは意固地なまでに、信じている。サディンはまだ生きています。

戦場でレミエルが見たのは偽物か、別人か、きっと見間違えたのだ。

それならば、サディンはどこか別の場所にいるのだろう。捜さなくてはならない。そして、無事を確認しなくては。

それがただの思い込み過ぎないと、心の奥では解っていても、ラファエルは意思を曲げるつもりはなかった。

己が一度に移動できる距離の空間を探る。

ラファエルの、空間を瞬時に移動する能力は、移動先の空間を認識できなければ発揮できない。

移動先を認識せずに飛ぶと、まったく見当違いの場所に出るか、下手をすれば地面の下や湖の底など、自力脱出も困難な場所に出現してしまう。

移動先の空間を感知し、その場にあるものは草一本、虫一匹に至るまで把握する。

それはカストルが持つ探査能力と非常に似ているが、感知できる

距離には大分差がある。

カストルは数千キロ先まで探査できるのに対し、ラファエルは精々、半径数百メートル程度しか感知できないのだ。

その短い距離の中に、ルシエルやミカエル、ジュピターたちがいるのが判る。

はつきりと景色が見える訳ではなく、ただその座標にシルエットが立っているように感じるのだ。

無論そこに、サデインと同じ体格の人物が倒れていることも判る。だが、あれは違うと言い聞かせ、ラファエルは己が感知できる限界まで神経を尖らせた。

少しでも意識を外に向けるため、廊下の端ギリギリまで歩み寄り、壁に身体を押し付けるように密着する。

もつと遠くまで、もつと、もつと……

普段の彼からは考えられないくらいの集中力。

限界以上の力を引き出し、さらに遠方へ意識を向けた。

能力と共に、己の精神まで遠くへ抜けていってしまいそんな錯覚が、ラファエルの全身を襲う。

脚の力が抜けそうになりながら、それでもラファエルは、彼方の空間に違和感を覚えた。

感知できるかできないかの、ギリギリの位置に誰かがいる。

そう感じた瞬間に、ラファエルはその場所へと瞬間移動した。

サタンとジュピターの『喧嘩』は、いよいよ激しさを増してきた。エレボスの命令のせいではあるのだが、巻き込まれる者としては堪ったものではない。

ミカエルの防護壁のお陰で、襲い来る爆風もほとんど感じないが、

それもいつまで保っていられるか。
アイテールたちを納得させられるだけの言葉が思いつかぬまま、
時間だけが過ぎてゆく。

その一方で、サタンたちも焦りを感じ始めていた。
手加減しながら派手に喧嘩するのは、案外難しい。
ルシエルがエレボスの気を引いているお陰で『手加減するな』と
いう追加命令が出ないのは有難いが、停戦の命令もまた出ない。
やはりルシエルごときでは、あの子供たちを説得するのは無理な
のだろうか。

まあ無理だろうな、とサタンは思う。
ルシエルは子供の相手をするのが、決して得意であるとは言えな
い。

しかも、目の前で親友の死を見た後だ。心の裡は穏やかでいら
れないだろう。激昂して二人を罵ったりしないだけの理性はあるよ
うだが。

そのルシエルの親友である彼ならば、子供たちを簡単に説得して
くれたのだろうが、無い物ねだりをして仕方がない。

となると、子供の相手は武骨な男連中よりも、優しい女性と相場
が決まっている。

地の底で王を気取ったところで、なんと無力なことか。
結局俺様はあるときからずっと、手の届かない処から藻掻くこと
しかできないのだ。

サタンの口元に、凄絶な笑みが浮かぶ。
その覚悟を決めた笑みに、ジュピターの目が奪われた。
何をする気かと問う前に、サタンの唇が動く。
声を出さず、唇の動きだけで、サタンは己の意思を伝える。

止められる者は誰もいない。

サタンが、手に灯した力を大地に叩きつけるような仕草をするのも、その大地から岩の槍が立ち上がるのも、それがサタンの身体を貫くのも、すべてが一瞬の出来事だった。

斜めにせり上がった太い岩槍は、サタンの腹を貫通し、赤く染まる。

円錐状の岩槍に貫かれながら、それでもサタンは口元の笑みを絶やすことはなかった。

まるで時が止まったような錯覚を覚える。

サタンの身体が傾ぐのを、ジュピターは瞬きもせずに見つめていた。

サタンの腹を貫く岩槍が、風化したようにぼろぼろと崩れ落ちる。支えるものがなくなったサタンは、為す術なく地面に倒れ臥した。ジュピターの中で刻が動き出したのは、その直後だった。

まるで身を引き千切られるような悲鳴が、ジュピターの口から迸る。

弾かれたように、ルシエルたちが顔を向けた。

ジュピターは迷わずサタンの許に駆け寄る。

サタンの傷口から溢れた血が土を赤く濡らし、膝をついたジュピターの白いドレスを紅く染める。

ジュピターの口から出たのは攻撃のための呪ではなく、治癒するための祈りの詞だった。

エレボスの言葉による呪縛が、解除されたのだ。

サタンは自ら、動けなくなる程の、死に瀕する程の傷を負った。

エレボスの口からは、自傷を妨げるような言葉は出ていない。

故にこそ、サタンの行動だった。

こうすれば、少なくともジュピターは自由に動ける。
彼女に、あの子供たちを任せることができる。しかしジュピターは、サタンの傍を離れない。

「何を、してやがる……さつさとあのガキ共、手懷けてきやがれ……」

「あなたの治療が先です！」

擦れる声で言葉を紡ぐサタンを、ジュピターが一喝する。
霞む視界の中で、ジュピターが泣いているような気がした。
対照的に、サタンは笑みを絶やさなかった。
決して苦痛を顔には出さない。

これはサタンの意地だ。

だが、その笑みがジュピターに安心感を与えることはない。

「お願い……」

必死に治癒を続けていたジュピターが、声を絞り出す。
出血を少しでも止めようと、大きな傷口を手で押さえながら、その瞳はサタンを見ていなかった。

「助けてください」

震える声で、この世界の最高神である彼女が助けを求めている。
人々に、救いの手を差し伸べるはずの神が。

「あなたたちの力が必要なんです」

その瞳が、声が向けられているのは、小さな二人の子供。

「お願いします。助けてください」

ジュピターは再度、二人の子供に呼び掛けた。

その二人……エレボスもアイテールも、ただジュピターに顔を向けたまま、何の反応もない。

否、反応しないのではなく、できないのだ。

そんなことを言われたのは初めてで、どうしたらいいのか途惑っている。

しかし……

「何故……ボクたちがサタンを助けなきゃいけないの？」

エレボスが徐に口を開いた。

二人は未だ、過去の怨恨を捨てられないでいる。

そんな二人に助けを求めても無駄かもしれない。

だが、サタンの傷は深く、ジュピター一人の力では手に余る。

より強い力を持つ者が必要なのだ。

「過去の怨恨は、断ち切らなければなりません。でないと、怨みの輪廻は永劫続くことになってしまいます。

私は、過去にどんな憎しみがあつたのか知りません。ですが、これから知っていくことはできます。

そのためには、互いに歩み寄らねばなりません。そのためには、互いを許し合わねばなりません。

どうか、私に力を貸してください。私は、あなた方を許します」

ジュピターの懇願を聞き、エレボスとアイテールは顔を見合わせた。

彼女の言いたいことは解る。

それでも、納得できない。いや、納得したくない。

どうして皆、サタンばかり助けようとして、自分たちを助けられないのだ。

そんなのはずるい。

そう思ってしまうのだ。

ただ僻んで拗ねていじけているだけならば、まだいい。

その感情を憎しみに置き換えてしまったら、この子供たちは躊躇いもせずにサタンを見捨てるだろう。

だが、互いに顔を見合わせ悩んでいる二人の姿を見て、ジュピターは確信した。

今ならばまだ、この子供たちと和解できると。

「謝罪も償いもします。私には今、あなた方が必要なのです」

黙ってジュピターの言葉を聞いていたアイテールが、ゆっくりと視線をジュピターに合わせた。

彼女の傍には、大嫌いなサタンが倒れている。

サタンは酷いやつだ。この世界に迷い込んだボクを二つに分けて何千年も封じ続けた。

でも、ジュピターはそんなサタンを助けようと必死になっている。どうしてそんなに必死なのか。どうしてサタンを助けたいと思うのか。

アイテールにはそれが理解できなかった。

「どうして……サタンを助けようとするの？」

「死なせたくないからです」

「どうして死なせたくないの？」

「彼が死んでしまったら、悲しいからです」

アイテールの問いに、ジュピターが答える。

誰も口を挟もうとはせず、二人の問答を見守っていた。

アイテールの表情が、わずかずつではあるが変化していく。

アイテールの心が揺らいでいるのが、そのことから読み取れたからだ。

アイテールは今一度唇を開いた。

「かなしい……って、何？」

ジュピターは一度、視線をアイテールが抱きかかえているサディンに移した。

憂いをその瞳に湛え、ジュピターは静かに言葉を紡ぐ。

「その子が……サディンが倒れたときに、あなたが感じたものが、悲しいという気持ちですよ」

アイテールがサディンの顔に視線を落とす。

途端に胸中に湧き上がる息苦しさ、背筋を駆け昇る寒気。

吐きたくなくなるような胃の痛みと、冷たくなる指先、それとは逆に目の奥は熱くなる。

恐怖にも似たこの感覚。これが……

「……わかった。なんて言えばいいの？」

思わず溢れそうになる涙を拭い、アイテールが神妙な面持ちで顔を上げる。

初めて見せてくれた協力的な態度に、ジュピターの口元には笑み

が浮かんだ。

「サタンの傷が治るようにと」

アイテールはジュピターに促されるまま言葉を紡ぐ。
すぐにサタンに変化があった。

完全に切れていた内臓、血管、筋繊維が見る見る繋がり、抉れた肉が盛り上がってきて最後に皮膚が再生される。

ほぼ一瞬のうちに、サタンの傷は跡形もなく完治した。

ここまで瞬時に、綺麗に怪我を治すことなど、かつて治癒の大天使と謳われたリリスでも不可能だっただろう。

サタンがゆっくりと身を起こす。

流れ出た血液が戻っていないためか、顔色は悪い。

しかしそれも、数日もすれば回復するだろう。

複雑な表情で黙っているサタンに代わり、ジュピターがアイテールたちに笑みを向けた。

「ありがとうございます」

「……………」

アイテールは少しばかり照れたように首を竦めた。

ありがとうという言葉が、嬉しくてくすぐったい。

アイテールがジュピターに心を許したからだろう。エレボスの表情も、幾分和らいで見える。

ジュピターは徐に立ち上がり、アイテールの傍へと歩み寄った。

膝について座り、静かにアイテールに抱かれたサディンの手を取る。

「……さあアイテール、もうお兄様を眠らせてあげましょう」

「……………」

アイテールはしばらく躊躇っていたが、ついに小さく頷いた。いつまでも、荒涼とした地面の上に、サディンを寝かせておけない。

アイテールとエレボスはジュピターの指示に従い、ルシエルたちを解放した。

次いでサディンをサタンの城へ運ぼうとしたそのとき、突然頭上から声が降ってきた。

「待つて！」

思わず空を見上げた皆の目に飛び込んできたのは、空間移動してきたラファエルと、彼に支えられた壊れかけのカストルだった。

「待つて！ サっちゃん、まだここにいるんだ！」

「それは……どういうことですか!？」

叫びながらラファエルが降りてくる。

真っ先に飛び出したのはルシエルだった。

ラファエルに支えられたカストルは、とても大切な何かを守るように己の肩を抱いている。

カストルは何を守っているのか。

ルシエルたちには見えなかったが、そこにいることは解った。サディンの魂が、カストルの中にあることが。

つい先程のことだ。

ラファエルが、戦場となっている荒野のさらに向こうに、何者かの気配を捉えてそこに向かった。

そこで見たのは、岩場の陰にじっと身を潜めるカストルの姿だった。

「カーたん？　なんでこんなとこにいんの？」

ラファエルの呼び掛けに、カストルはわずかに顔を上げるが、それ以上は何の反応もない。

カストルは人形で、痛みなど感じないはずなのに、まるで痛みを堪えるようにじっと蹲り震えている。

それは来たる最期に怯えているようでもあり、大切なものを守るうとしているようでもあった。

カストルがサデインの傍を離れることなど、滅多にない。

まして、戦いの最中にサデインを残して逃げることなど、絶対にあり得ない。

ならば何故、カストルはこんな処に一人でいるのか？

ラファエルは瞬時に思い至った。

サデインが、ここにいないからではないかと。

「サっちゃん、いるの？」

周囲を見回しても、サデインと思しき人影は見当たらない。

気配を捉えようと意識を展開しても、サデインの姿はどこにもなかった。

しかし、代わりに妙なことに気付く。

目の前にいる、カストルの座標がぶれているのだ。
そう、まるで同じ座標上にもう一人いるような……

「もしかして……」

ラファエルはカストルを見遣る。

カストルが大事そうに抱いているもの。

ラファエルには見えない。だが、恐らく間違いない。

サデインの魂が、そこにいる。

「……サつちよんなの？」

ラファエルの声に、カストルは小さく頷いた。

サデインは賭けていたのだ。誰かが気付いてくれることに。

己の死を予感したのか、サデインはそのときに備え、カストルを
予め体外に出しておいた。

カストルの探査能力なしで、ミカエルたちの攻撃を避け続けられ
たのは、サデインが細く紡いだ糸を張り巡らせ、センサー代わりに
していたからだ。

そのため力を使いすぎて、早めに体力の限界が来たのだ。

かといって、カストルを体内に留めたままでも、死は免れなかつ
ただろう。

自分の魂を自らの意思で他の器に移せるのは、サデインくらいし
かない。

カストルという、魂の一部を共有した分身がいるからこそ出来る
芸当だ。

予備の器を持つミカエルですら、器替えは自由に行えない。

サディンは致命傷となる攻撃を受けた後、瞬時にカストルの器の中へと魂を逃げ込ませた。

それがカストルへ相当な負担を掛けることと知りながら、それでもサディンは生きたいと願ったのだ。

大切な仲間がいるこの時の中で生きたいと。

ラファエルは大急ぎでカストルを連れて空間移動した。

カストルの器に、サディンの魂は大きすぎる。

このまま放置すれば、器もろとも魂まで崩壊してしまう。

他人の器に魂を入れるなど、本来ならば器に負担がかかるため、短時間しかできないことなのだ。

いくら二人の繋がりが強いとはいえ、カストルの器は、サディンの魂を抱え続けられる程、強くは創られていない。

あくまでもカストルはサディンの一部を与えられた従属であり、本体はサディンなのだ。

そのため内包した魂に器が耐えきれず、カストルは徐々に崩壊を始めていた。

早くサディンの魂を戻さないと、二人とも消滅してしまう。

「ジュピター様、早くサっちょんを助けて！」

「お願いします、サディンを！」

天使たちに急かされ、ジュピターがカストルを見る。
しかし……

「……できません」

静かに、ジュピターは首を振る。

「何故です!?!」

「どうして!?!」

詰め寄る二人をミカエルが抑える。

ミカエルはよく知っていた。

魂の離れた天使の器が、どれ程脆弱になるかを。

彼らの視線を受けとめて、ジュピターは沈痛な面持ちで口を開いた。

「既に、器の崩壊が始まっています。この状態で魂を戻しても、二度と目覚めることはありません」

サデインの器から流れる血が、どす黒く変色してきている。

器の内側から、徐々に腐り始めているのだ。

こうなると、もうこの器は肉体として機能しないだろう。

そして、サデインはミカエルと違って、器の替えを創っていない。今から創るなど、到底間に合わない。

「そんな……」

サデインもカストルも、必死に魂を留めようとしているのに、自分たちには何もできないなんて。

遅すぎたというのだろうか。目の前の敵に気を取られ、大切な仲間が助けを求めていることに気付かなかったから。

力づくで場を収めようとした、愚かな考えの報いがこれだというのなら、それはあまりに残酷だ。

報いを受けるべきは、アイテールを守ろうとした彼らではなく、一方的に幼子を恐れた者たちの方ではないか。

誰もが言葉もなく、ただ頂垂れている。

そんな中、怖ず怖ずと声を上げたのはアイテールたちだった。

「……ボクが言ったら、お兄ちゃん助かる？」

「可能性は低いけど、やってみなきゃ判らないよ」

二人の子供は手を繋いで頷いた。

どちらからともなく口を開き、祈りと願いを言葉に乗せる。

二人の声が、同じ言葉を紡いだ。

エピローグ

天空に漂う雲の上に佇む白亜の神殿。

その広い庭園の一面に、繊細な彫刻が施された大きなオブジェが立っている。

そのオブジェの一面に、幾つかの文字が彫られていた。

その中に一つ、真新しい文字がある。

その文字を指先でなぞり、彼は小さく唇を開いた。

「……………」

大きな溜息と共に小さく呟いたのは、友の名。

いつか戻ると信じて、彼は待ち続けている。

あのととき、アイテールたちの言葉を以てしても、サディンの器が癒えることはなかった。

傷が治るのは、身体に備わる治癒力があるからだ。

しかし、器から完全に魂が離れてしまうと、身体の機能はすべて停止する。

そうなってしまうと、いくら身体の治癒力を底上げしても、傷が治ることはない。

そこで新たな器を創ってみようとしたのだが、それも無理だった。天使の器には、カエルス of 聖樹に実る果実を使う。

それを錬成して人型の器にするのだが、そのためのアルケミア・ルーン術式を、アイテールたちは知らなかった。

言葉の力を最大限に発揮するには、言葉そのものとその意味を正しく理解していなければならぬ。

付け焼き刃の知識では、不完全な器しか創れないのだ。

また、ジュピターがサディンの器を創るまでの間、魂を入れておくカストルの器を強化しようとした。

しかしカストル自身も崩壊が始まっており、まずはその傷を治す必要があったのだが、できなかったのだ。

カストルの器は木で作られた人形だ。
そもそも自ら傷を治す治癒力がない。

神も魔も、それを凌駕する力を持つ者でも、どうすることもできない。

サディンの時を巻き戻す、時を止めるということも考えたが、それこそ不可能だった。

時は不可侵にして、その流れは絶対だ。

流れに逆らうことは決してできない。

起こってしまったことは、既に歴史の一つとして書き込まれ、決して消すことも書き替えることもできないのだ。

故に、これしか方法がなかった。

「サディンの魂を……転生させる？」

「ええ。このまま何もしなければ、魂は消滅してしまいます。けれど転生すれば、この子らの魂を受け継いだ生まれ変わりが、いつかどこかで生まれてくるはずですよ」

確かにジュピターの言う通り、何もできないまま時間が過ぎていくよりは良いのかもしれない。

しかし、生まれ変われば、サディンはまったくの別人となってしまう。

それは果たして、サディンの命を救ったことになるのだろうか？

「ボクは……お兄ちゃんが消えないなら、それが一番いいと思う」

絶望的な思考に沈みかけたルシエルの意識は、アイテールの声で浮上した。

このまま消滅するのを待っているだけなら、例え別の人間になったとしても、転生させて新しい生を送る方がいいのかもしれない。そうすればいずれ、サデインの魂を持った誰かに再会できるだろう。

サデインの魂は消えていない。

消滅さえしていなければ、未来は鎖されていないのだから。

サデインの魂を、未来に繋げたい。

サデインもきつと、それを望むはずだ。

「そう……だね。サっちゃんの魂は、まだ消えてないんだから……それなら俺、サっちゃんを転生させてあげたいな」

ラファエルも同意した。

ミカエルも同じようだ。静かに頷いている。

ルシエルは何も言わなかった。

ただ黙って、カストルの身体を支えている。

彼らの顔を見渡して、ジュピターは決断したようだ。

カストルの魂ごと、サデインの魂を転生させることを。

何時、何処に転生するのかはまだ判らない。

ジュピターが送り出した魂は、一度世界に融け、新たに生まれる命に宿る。

転生したときに、前世の何を受け継ぐのかも不明だ。

容姿か、記憶か、能力か。はたまた何も受け継がないか。

未だ不確定な魂は、友に見送られて世界の中へと旅立った。

神殿に佇むオブジエには、殉職した天使の名が刻まれている。その中の一つを指先でなぞり、ルシエルは深く溜息を吐き出した。そこに刻まれた友の名を目にする度に、深く胸を抉られるような感覚に陥る。

そうして開いた胸の穴が埋まらないのだ。

ルシエルは何度も自問自答を繰り返す。

他に方法があつたのではないかと。

しかし返る答えは不可能ばかり。

現実を真摯に受けとめて、前を向かなければならないことも理解しているつもりだ。

それでもルシエルの問いは尽きない。

そう、ルシエルは……未だ現実を受け入れられていなかった。

ただ認めたくなくて、こうしてぼんやりと一日を過ごしている。

このままではいけないことも理解しているつもりだ。

だが、心の中の自分は頑なに現実と向き合うことを拒否している。

「僕は、あなたを……」

失いたくなかった。助けたかった。

しかしサディンが聞きたいのは、こんな言葉ではないはずだ。

もし立場が逆だったなら、待ち続けると、サディンは言ってくれるだろう。

再び会ったそのときに、おかえりと言ってくれる。

あのときも、そうだったではないか。

だから、ルシエルは待つことしかできない。

いつか友が帰ってくると信じて、待ち続けるしか。

例えその先に、自身の望んだ未来がなかったとしても。

「僕は……あなたを諦めません」

そう呟く彼が抱えているのは希望か、それとも……

暗い闇の中から眩しい光の中へ。魂は目覚めて産声をあげる。
小さな命の焰が灯るのは、未だ来ぬ未来の物語。

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3833m/>

TRUE ANGEL2――EXPRESSION――

2011年3月13日15時24分発行